

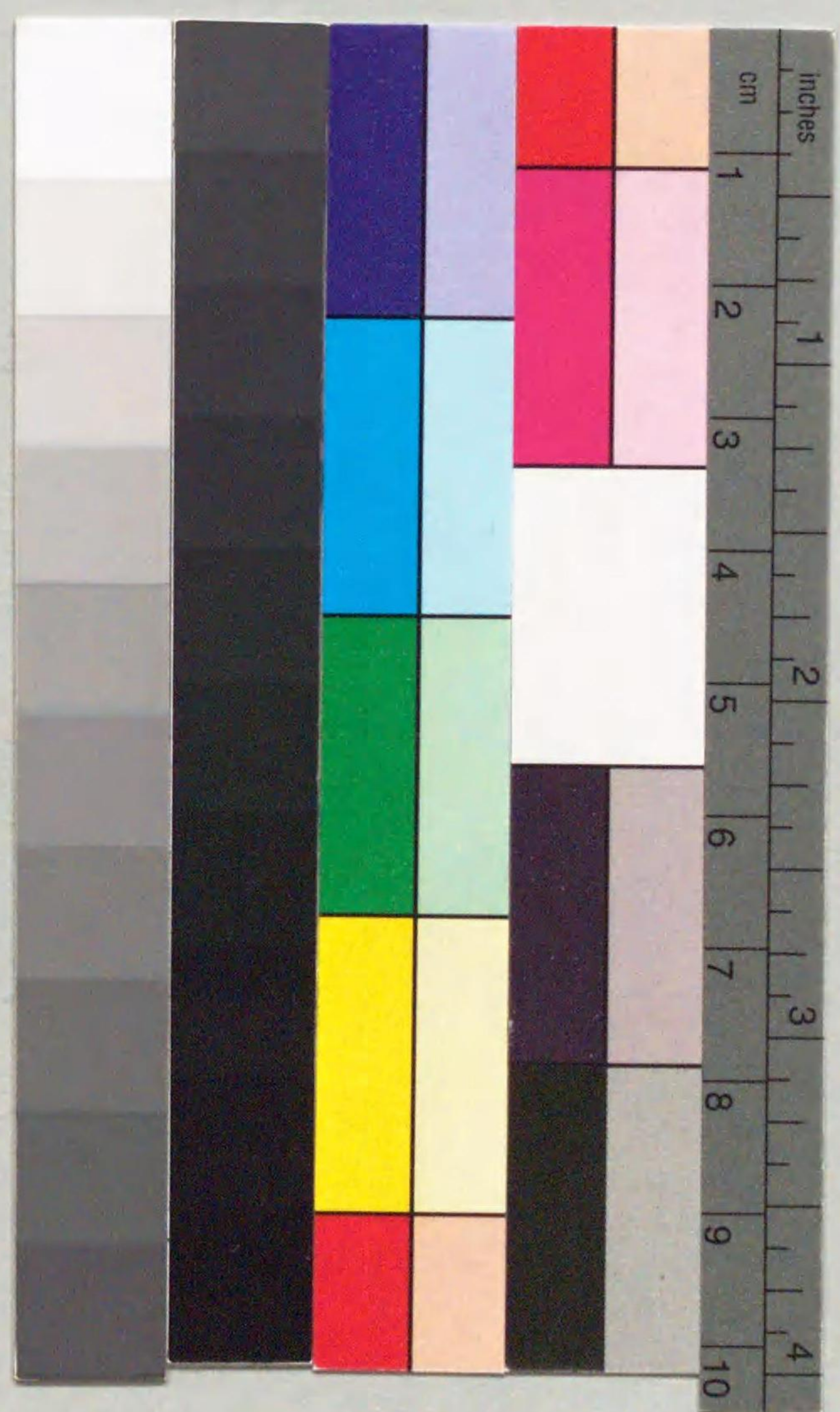
188.84
Su815i

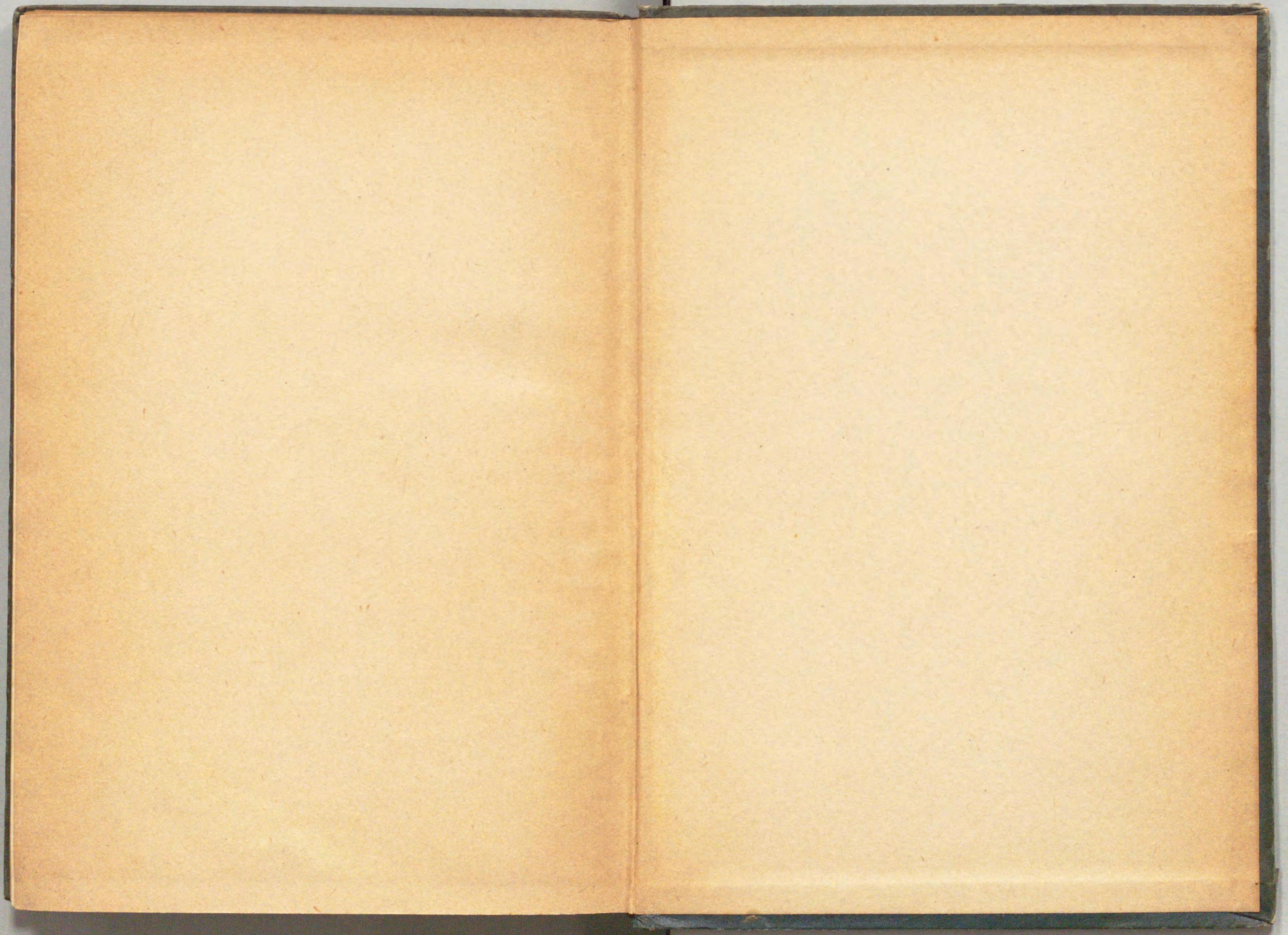


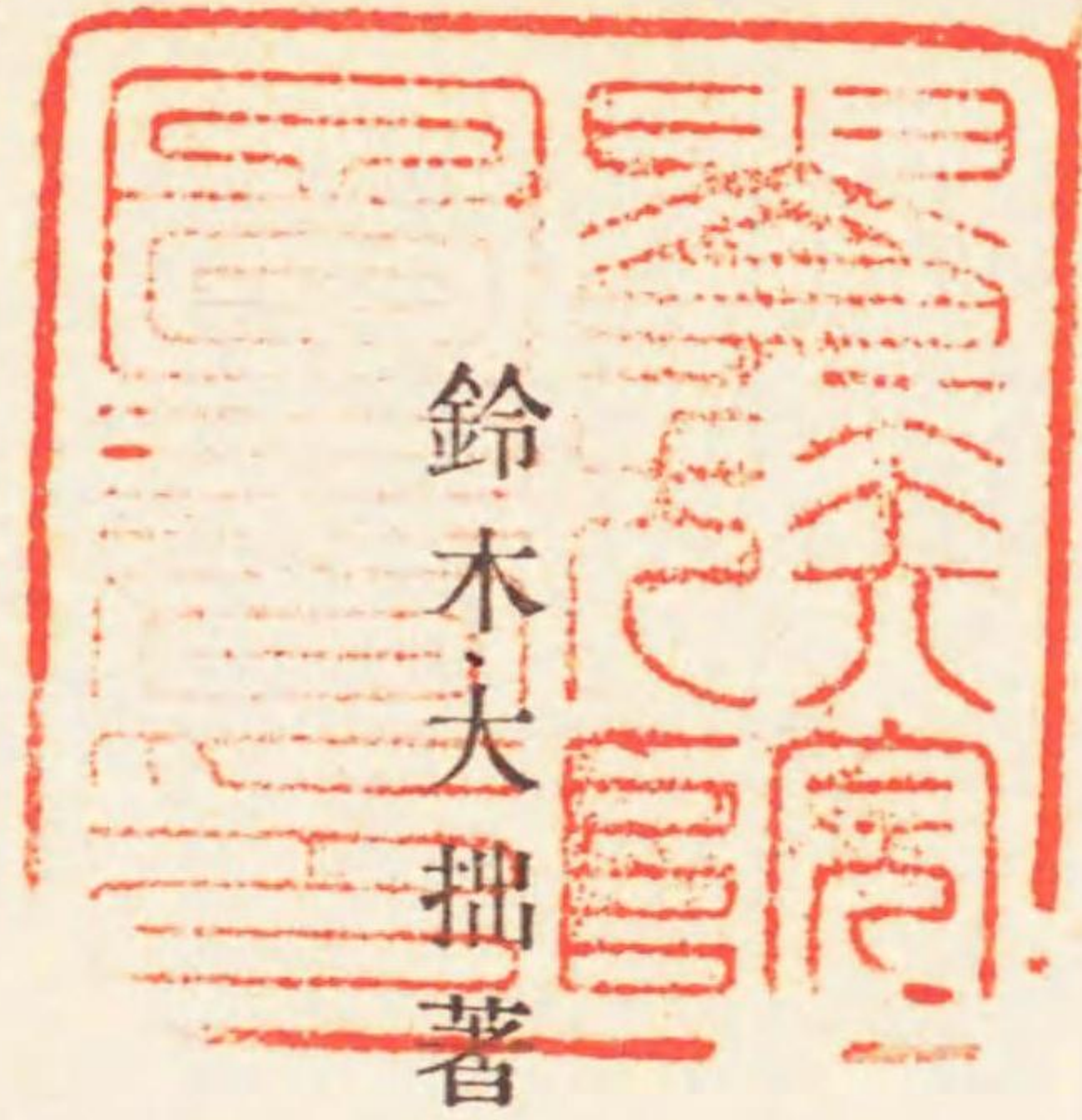
00696722

×
複写

18
Su







一 眞實の世界

近藤書店刊

557822

188.84

Su 815i



. 696722

序

藥山惟儼禪師は唐代の一大禪匠である(西、七五〇)。「不思量底、如何思量?」と尋ねられて、『非思量!』と答へた有名な問答は此人のである。又當時の官吏で哲學者であつた李翱との折衝に、『雲在天水在餅』と喝破して、相手を後へに墜若せしめたも此人である。併し彼が未だ此境地に到り得なかつた時には行脚に日をくらしつた。始め南嶽の石頭和尚のところを尋ねて、次の如く云つた。

『三乘十二分教(佛教の教義)については、私も多少は研窮致しましたのですが、承はりますと、南方には「直指人心、見性、成佛」と云ふ教へがあるとのことです。此意味がどうもわからぬのです。どうぞお師匠さまの指示を仰ぎたうござります。』

序

一

『恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁麼總不得。』(さうだと肯定してもいけない、さうでないかと否定してもいけない、さうだと、さうでないかと、肯定と否定とを一時にやつても、それでも一切だめだ。)

かう出しぬけにやられても、薬山には中々に分らない。暫らくじつと考へて居たが返事が出来なかつた。さうすると石頭和尚の曰はく、

『會麼?』(どうだ、わかるか?)

薬山は『わからぬ』と答へるより外なかつた。そこで石頭の云ふには、『恐らくお前の因縁はわしの處にはないのであらう。これから江西の馬祖和尚のところへ往つて又尋ねてごらん』と。かう親切に云はれるので、薬山は教へられるままに、江西へ往つて馬祖大師に相見して、石頭からの示唆を傳へて、教へを乞うた。すると馬祖の云はく、

『我有時教伊揚眉瞬目、有時不教伊揚眉瞬目、有時教伊揚眉瞬目者、有時教伊揚眉瞬目者不是』(自分は時によると眉をあげたり、目を動かしたりすること

もあり、又時によると、そんなことをせぬこともある。而して時にはさうするものが是なることもあり、またさうするのが不是なることもある。)

薬山は馬祖のこの指示をききて、『なるほど!』と悟つた。が、別に是と云つて玄妙奇特なこともないので、黙つて只お辭儀をする外なかつた。

馬祖も薬山が已に證入したのを見てとつたが、馬祖とても此上に何のかのと道理をつけて傳授すべきものもないので、かう云つた。

『お前は何でそんなに御辭儀ばかりして居るのかい。』

薬山の方でも別に何のかのと道理をつけて、其所謂の悟底なるものをしやべるべきでないので、たゞ次の如く云つた。

『わたくしは始め石頭和尚さんのところに居ましたときには、丁度蚊が鐵の牛にとまつたやうでした』と。

如何にも剴切な表現である。此境地に到り得たもので、始めて薬山の心理を理解し能ふのである。馬祖も此上何とも云はなかつた。

ある日、馬祖は薬山を見て突然尋ねた。

『お前此頃の見處はどうだい。』

薬山曰く、

『皮膚脱落盡シキテ、リ唯一眞實。』

馬祖深くこれを肯うた。

『子之所得、可ベシツヒ謂協於心體、布クト於四肢。云云。』

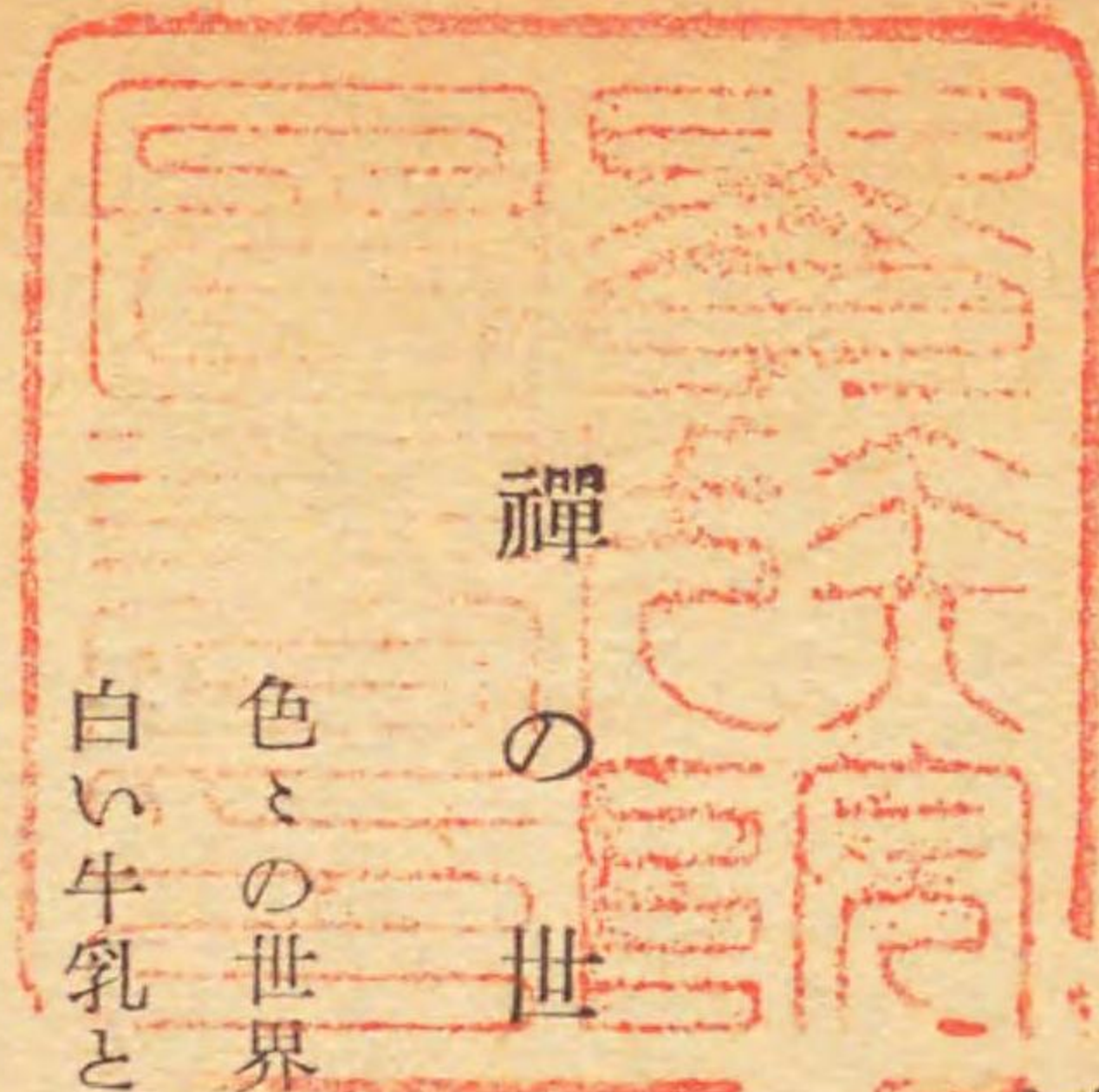
道元禪師の所謂る『身心脱落、脱落身心』なるものである。『皮膚脱落し盡きて唯一眞實のみあり』と云ふこと、如何にも薬山の胸中一物の蟠まるものなく、淨裸裸、赤灑灑、乾坤只一人の境地である。一眞實の世界またこれを禪の世界と云つておく。

本書は、昭和十六年の夏、鎌倉圓覺寺での夏期講座に、『禪の世界』と題して三回連続の講演をやつた、それを主體として、その他近年所々で口述したものの速記を訂正し補足して出来たものである。讀者のため何かの参考になれば、それに増した。た。

北鎌倉也風流庵にて

鈴木大拙

昭和十六年初秋



禪の世界(第一回)

目次

色々の世界……………三

白い牛乳と曲つた腕……………五

限られた世界……………一〇

價値の多様性……………一六

感覺の相互補足……………二〇

意識下に在るもの……………三

錯綜した利害の世界……………六

多様性を容れるもの……………三

原始生活へのあこがれ……………六

目次

禪の世界(第二回)

原始生活と唯物主義…………… 四
 氷の世界…………… 四
 私有財産・自然の生活等…………… 五
 閑家具と原始性…………… 六
 人間と自然…………… 六
 二元と一元…………… 七

禪の世界(第三回)

渾一と分裂…………… 八
 力と愛…………… 九
 大智・大悲…………… 九
 『神ながら』の意義…………… 一〇
 一眞實の世界…………… 一一

『わしは地獄へ行く』…………… 一三

禪と日本人の氣質

自然を愛する日本人…………… 一三
 外人の日本人観…………… 一三
 雨と月…………… 一四
 米國人と東洋思想…………… 一四
 雨滴聲…………… 一五
 躍るもの…………… 一六
 『如』と『即』…………… 一六
 自然に『即』する…………… 一七
 禪と近代の思想…………… 一七

禪の一面と武士道

一、殺人刀・活人劍…………… 一八

二、慕直向前……………二〇三

現代と禪

禪問答……………三三

禪の超越性と直接性……………二四六

現代生活の中心思想……………三五三

『一無位の真人』……………二六六

禪と東洋道德

無功用の働き……………二七三

二つの立場……………二七六

殺して殺さず……………二八二

無の兩極性……………二八九

慕直向前の眞理……………二九三

禪的倫理觀……………二九五

十方現身……………二九九

禪の世界

第一回

色々の世界

私は今日から三回にわたりて、『禪の世界』といふことを申し上げたいと思ひます。さういふ世界が、普通われらの話して居る世間、我等の住んで居る世界以外に、別にあるかと思召すでもありませんが、實際申上げると、私共はみんな同じやうな世界に住んで居るやうに思つて居ても、その實はさうではなくて、人々それ々の世界に住んで居るのである。その人々違つた世界に住んで居るとすれば、御互に話が出來ないやうなものだが、さうでなくて、話が出來る所があつて、私の言ふことが貴方に通ずる、貴方の仰言ることが私に通ずる。といふと、矢張り何か一つの世界がまだある譯なんです。

なるほど、ここに一つの世界のあることはあるのです。これがあるので雑多の世界が可能になる。而して實際の我等の生きてをる世界が皆違つて行くのです。單にそれぞれ違つて居るといふことでなくして、その間に次元とか層とか云ふべき違ひもあるし、それから又單に次元といふことでなくとも、水呑みが、水入れと違ふ如く、本が机と違ふが如き違ひもある。さういふ平面的の相違と、今云ふ層の違ひのやうに、立體的の違ひもあるのです。さういふやうな鹽梅に、相違が大體二種類に分けられると思はれる。それから又かういふ物理的の相違と思はれるものの外に、もう一つ精神的と申すか、心理的と申すか、或は超物理的相違——さういふものもあるやうに思はれる。

それでいろ／＼の世界が、丁度波長のやうに、個個別別に違つて居るといふことと同時に、又、渦卷のやうに、まづ中心から輪が小さなものより次第に擴がつて大きな輪となつて行つて、その小さな輪が大きな輪に包まれて行く。さうしてその大きな輪が、どの位大きく擴がつて行くか分らぬ位に大きなものとなるのである。さ

うしてその中に個個の世界、千差萬別の大きさの世界を包んで行くといふことにもなつて居るのです。そこに一つの體制が出来上ると云つてよい。別別に別れて行く違ひは、皆さんの個個の世界で、それはそれ／＼に違つて居るけれども、その違ひの間に一つの體制を持つて居つて、無限に大きいものが、その中に無限に小さいものを入れて居る。まあそんな工合に我等の箇箇に生きて居る世界が出来て居るやうに思はれます。

白い牛乳と曲つた腕

それを簡単な例から申しますと、かういふことになる。近頃何か雑誌を見て居りますと、有名なアインシュタインといふ人、これは何れも御存じでありませうが、相對性原理といふことを唱へ出した人で、今までのニュートン式の考へをひっくり返したといふことに聞いて居ります。私はその邊のことは知りませんが、兎に角物理の方面に於いて一大革命的意見を出した人である。これを紹介することは

なか／＼難かしいので、一寸した學者でも、その説明につきては十分の理解をもつことが出来ないといふやうに聞いて居ります。私らのやうなものは、固より何も分らぬのでありますけれども、兎に角、さういふ方面に於いてはアインシュタインは偉い人である。その人はユダヤ人であるので、ドイツを追出されて、今アメリカへ来て、プリンストン大學で講義をして居られる。

或る日、その人と呼んで欸待^{もてなし}してくれた女主人が尋ねました。『貴方は相對性原理の創唱者であつて、相對性原理はなか／＼分らぬといふが、私らのやうな者でも、何か一口で、簡單明瞭にわかるやうに話して下さる譯にいかぬか』と。

これが禪宗の問答でもあれば、頭から叩きのめすといふこともありませんが、澤山の數學の式で、いろ／＼な實驗とか實測を元にしたものであるとすると、一言一句で説きさかせるといふことは、なか／＼出来ないものである。けれども、さういふ風に要求せられたので、何か話をしようといふので、かういふことを言うたといふことがある。

アインシュタイン曰く、『私が或る暑い日に友達と一緒に歩いた。その友達は盲目であつた。暑いので、私が冷い牛乳を一杯飲みたいな』と言つた。ところがその盲目の友達が言ふには、『冷いといふことも一杯飲むといふことも分るが、牛乳とは何だ。』彼はかう尋ねたので私は『牛乳といふのは白い液體である』と答へた。さうすると、その盲目の友達は、『液體はわかるが、白いといふは何だ』、といふ。それで『白とは白鳥の色だ』と言ふと、その友達の言ふには、『白鳥とは何だ』といふ。『白鳥とは長い曲つた首の鳥だ』と言つた。『首はわかるが、曲つた首といふことが分らぬ』といふ。いくら説明しても分らぬので、自分は根氣をからして、その盲目の人の腕をとつて、それを伸して見せて、『これが眞直ぐだ』と云つてきかせ、今度はその腕を曲げて、『これが曲つたんだ』と言つたら、その盲目の友達は手を打つて叫んで曰はく、『あゝ分つた／＼』と。何が分つたかといへば、先に問題になつた白い牛乳の白いといふことが、曲つた腕だといふことに解せられたことになるのであります。

それはどうも、世界が違つて居るといへば世界が違つて居る、我等には五感がある——六感があるか知らんが——盲者といふものは、見るといふ感官がなくなつて居るから、その足りない感を補はうとすると、どうしてもどこかに難かしいことが出来る、解消出来ぬものがある。盲目の人に色を諒解させることはなか／＼難かしい、不可能事である。色を音といふものに翻譯しても、それは音でもう色ではない。近頃は色を音に翻譯したり、音を色に翻譯したりしますが、その興味は五官を具つた人のはなしである。聴覚のないものに、音を視覚に翻譯しても、それは色であつて聞くわけに行かぬ。これだけの音が、これだけの光の波動にかはつても、また色がどれだけかの空氣の波動に代つても、聾者の世界には絶対に音響はありません、盲者の世界では光線による色は絶対に見えないのです。禪宗の人は目で聞け、耳で視よと云ひますが、エーテルの波動はエーテルで、空氣の波動ではない。又空氣の波動はエーテルの波動でない。二元の世界では融通がきかない。融通無礙の世界は此處にはないのである。それはどちらにしても、耳を用ゐて聞くことが出来、目を

もつて見ることが出来るのであるから、片一方の感覺を又他の感覺に翻譯することは不可能である。翻譯してわかつたとすれば、結局、牛乳の色が曲つた腕になつてしまふ。

それと少し違ひますけれども、盲目の人が——盲目の人がよく譬へに出て來ますが、これは盲目の人にとつては氣の毒であるが、或る意味でいへば、我等も皆盲目の人なのであるから、つまり自分が自分の話をして居ると云ふことになり、特に盲目の人に對して無禮といふこともなからうと思ひます。さてその盲目の人の話であるが、昔からよく傳へられて居る印度の話であるが、盲目の人が象といふものを見たいと思つた。象といふものは大きいもので、猫とか犬なら撫でゝ見ても分るけれども、象のやうな大きなものになると、人間が一寸その全貌を撫でまわして知り悉くす譯に行かない。そこで、象の尾を捕へたとしても、又象の牙を撫でたり、象の足を抱いたり、象の胴に觸れたりしたといつても、それでその全貌を盡すといふ譯に行かない。それで全象を見ないとか、全豹を見ないとかいふ文字も出來ましたが、

どうも感覺の一部が缺けて居るといふと、一部しか分らなくて、ものの全體を見る
ことが出来ないことになる。この象の場合は、その全體を見ることが出来ないとい
ふことの譬へになつて居ります。アインシュタインの方は、これは感覺が全く違ふ、
見ることを觸れるといふ感覺の方へ翻譯することになるので、これは話が一寸違ひ
ますけれども、しかし全般を盡すことが出来ない、といふ點に於いては、よく似て
居ると思ふのであります。

限られた世界

しかしながら我等は物を皆見て居る、我等の目に寫るところの總てが視覺の全部
であるやうに考へる、又我等が聞いて居るところの音の總てが聽覺の總てであるや
うに思はれて居つたのでありますけれども、近頃はいろ／＼光の研究とか或は
音響の方の研究といふことが、次第に進歩して參りましたので、七色だけでなく、
紫色の外の色、赤色の外の色といふやうに、七色以外に色があることになつた。そ

れは嚴密に云へば、色と言へぬかも知れない、色といふものは我等の目に寫るもの
のことで、その目に寫らぬものは色でない、光の波動で物理学上の問題と云ふこと
になるかも知れぬ。兎に角、エーテルならエーテルの波動の極めて短かなもの、そ
れから我等の目の見得るより、もつと長い波動のもの、所謂波長が長いとか短いと
かいふものは、共に我等の目では見ることの出来ない世界となる譯である。聽覺の
方でも、音響があまり高いと聞えない。又あまり小さいと同じく聞えない。さうい
ふやうなことが近頃どん／＼發見せられて來たのであるが、さうなると、吾等目で
見て居る世界、耳で聞いて居る世界は色や音全部ではないことになる。もし吾等の
と違つた目や耳があれば、此世界は或る意味で廣くなると云へる。その代り、今よ
りも、もつと／＼うるさい世界になるに極まつて居る。

ところがこれをだん／＼追うて行きますと、波長——エーテルでも電氣でも空氣
でもよいが、その短かいといふことになれば、短かいに限りが無い、幾ら行つて
も短かい、これで短かさが止まるといふ所がない。波長の長さも同じ事で、盡きる

所がない。無限小の波長と無限大の波長と、又その間に無限量の波長があるとする
と、人間の五官の世界と云ふものは、誠に狭い小さいものであると云はねばならぬ。
無限に兩極端に廣がつて居るものの真中に、ちよぼんとした位置を占めて居る人間
を想像して見ると、何だか變な氣になる。これが目だけでなくて、耳の世界でも、
音響の波長は又兩極端に廣がつて無限に及んで居る。非常に高いものと、非常に低
い音のとは、何れもきこえぬ、天人の音楽などは到底も人間の沙汰ではない。近頃
は電氣作用で色々遠いところや低い音をききわけけるが、それは耳できくのでなくて、
器械で讀むのである。併し何もかも聞えてはまたその煩に堪へぬだらう。

こんなことは今日物理学の方の世界で、所謂科學的に證據立てられ、又實驗せら
れることになつたのでありますが、これがずつと昔、今から二千年以上の昔しに、
支那に莊子といふ人があつた。この人は支那の哲學者の第一位に坐るべき一人であ
る。私等は書生時代によく讀んだものですが、その莊子の中に、細かい音を聞く人
の話が出て居る。山の向ふに居つて蟻の——多分蟻だつたと思ふが——その喧嘩の

聲が聞かれるといふ耳を持つて居る人の話がある。或は非常に細かい物を百歩の外
に見る目を持つて居る人の話もある。又虱だか蚤だか、もつともつと小さなもので
あつたか忘れたが、その鬚の上に居る虫の卵が見える眼もあると云ふことである。
今から二千年前では、實驗とか觀察とかいふこともない世界であるけれども、しか
し、我等の中でも、きく耳に、小さい音、大きい音を區別し、又目で細かいものを
見、又大きなものを見得るとすれば、それから順々に推して、小さなものも見え、
低い音もきこえるにきまつて居るといふことが、想像的に感じられた譯でありませ
う。別にそれを實驗したといふ譯でないにしても、單なる類推の上の話でも、こん
なことは充分に言はれ得ると思ふ。今日はそれを實驗して、さうだといふことに證
據が立つのである。普通の目では、霧がかゝつて向ふの富士山が見えないといふ場
合でも、赤外線で寫眞が取れると云ふこともある。又古文書なども色が黒くて肉眼
で見えないのが、螢光線かX光線の寫眞に取つて見ると、黒いものの下の方にある
もとの色、又は文字などが讀めると云ふこともある。レントゲン光線、即ちX光線

といふものを、お医者さんは治療の方に使ふのでありますが、それはまたこの外にも中々用途が多くて、贗造物にせものの見分けをしたり、蜜柑の好悪を調べたりも出来ること云ひます。これも支那の古い醫者の扁鵲といふ人や、印度の耆婆といふ人などは、肉眼で病人のお腹の中も見えたと言はれて居る。今の言葉でいへば、その人の目がX光線やレントゲンのやうに働いたものであらう。何とかして醫學と光學の進歩で、もつと／＼はつきりと吾等のお腹の中を見透したいものである。

それは兎に角と致しましても、何か我等の普通の五感の世界でなくて、それ以外の世界があるといふことは、物理學的・形而下科學的方面から云つても、考へられることでもあります。我等の見て居る世界だけでなく、この外にもいろ／＼の世界があり得るといふことは、單なる素朴な經驗の上からでも、今述べたやうなわけで、想像せられるのです。單なる素朴な經驗といふものではわからないが、もつと深く思索して行くと、數理の上から、この空間といふものは三次元でないこと云へるので、空間は所謂巾と高さと深さとといふやうな三次元だけで出來て居ないで、そこに

は幾次元も考へられると云ふのです。

昔ギリシヤの數學者のユークリッドは三次元の幾何學を立てましたが、その後幾何學といふものをだん／＼研究して見ると、三次元だけでなく、四次元、五次元と云ふやうな空間の構造も可能であると云ひます。それで所謂非ユークリッドの世界が組立てられるといふことになつて來たと聞いて居ます。それは一寸きくと、如何にも不思議に思はれるけれども、よく考へて見ると、さういふことは何でも無い、平凡な話である。世界が三次元であらうが、四次元であらうが、五次元であらうが多次元であらうが、それは何も大してびつくりすることでない。又、目で見る光の波長といふものが、極小から極大になり、音響の波長もまたそんな風に無限の度合をもつとしても、何にも珍らしいとか、不思議であるとかいふに及ばぬのである。一尺がいつも一尺でなく、水が水でなく、石が重くも軽くもなると云ふことは、物理學的に云へることなのだから、何も別に驚くに足りない、普通人の我等でも考へられないことでないのである。つまり五官の世界中、單なる感覺の世界——普通我

等が見ることが出来る、聞くことが出来るといふやうな世界に於いても、それら普通の感覺の上で經驗することが出来ない世界が、そこらにいくらでもあるといふことは慥かなのであります。

價値の多様性

これは物理學上のお話である。盲目の人の話は、假りに解剖學又は生理學上の話と申しておきますが、その外の方面から見て、また雑多の世界が出てくるのです。それは心理學方面からと云つてもよいのですが、平常我等の使つて居る言葉で申しますれば、趣味の世界と申すか、價値の世界、値打の世界といふものが、これが又千差萬別の世界を作り出すのです。これはどなたにも直ぐ分ることでもあります。

動物と人間といふものは比較にならぬかも知れないけれども、例へば『猫に小判』といふやうなことを申すやうに、猫に小判では猫は感じない。それから犬でもその通りだと思ふのですが、しかし、猫に鰹節、犬に骨をやるといふことになる——

その骨に肉でもついて居れば、尙いいと思はれるやうに、犬はワン／＼とそれに飛び付く、猫はニャン／＼でなくて、ギャア／＼といつて、噛付くことになる。そこに結構な物があつても、人間から見ると、これは大事なもので、これがなかつたら今日は生きていけないと、思はれるやうな大事なもの——書物でも、或は金があつたといつても宜しい、或は國寶のやうな結構なものがあつたとしても、その香ひを嗅いで見て、その大事なものに魚の香か牛肉の香でもなければ、そつちを向いて知らぬ顔をして居る。或はその上に大小便でもかけることもある。人間にとつてはどんなに大切な物でも、猫や犬にとつては、何のこともない。その上に寝て居るのである。

ああいふ動物の世界を見ると、人間のやうに目はありましても、目がないと同じやうなもので、彼等の世界は香ひの世界である。香ひ一元の世界になつて居ると見てもいい。香ひを嗅いで見て、これは自分にとつて利益があるか、自分の存在にとつて役に立つか、役に立たないかといふことを感じる。又音を聞く時にも、その音

が自分の食すること、或はその存在に役立つこと、或は自分の身の上に何か危険がありはしないかと云ふところから、その音に對して直ぐ耳をたてる。人間が音楽をさくのと大に差がある。猫や犬の目は、鼻や耳ほどな割合で彼等に役立つか、動物學者にさかぬとわからぬ。目といふものは、鷲や鳶のやうな空中の動物と違つて、地上の動物にとつては、あまり大切な役目を果さないではないかしらん。とに角、耳や鼻は、地上の動物にとりては、大事なもののやうに思はれる。目が見えないと、何かにぶつかつたりするでありませうが、先づ耳の方が危険を知らず點に於いては大事であり、鼻の方は自分の榮養を攝る點に於いて大事である。

ところが鳥になりますと、鳥の目といふものは、非常に鋭敏なもので、特に鷲とか鷹の目といふものは、随分よく見るとみえて、鷹や鷲は高いところから、下の方に何があるかを見附ける。よく鷲にあげを取られたと申しますが、私等の子供の時もよくさういふ話を聞いたし、又實際、油揚などを提げて豆腐屋からでも歸つて來ると、向ふの方からサツとやつて來て、品物を掠めるとぶのを経験したものです。

私の國には鳶が多く居りまして、よく空から降おろして來たものである。あゝいふものの目は、人間から見て、非常に鋭いものであると思はれる。さういふやうな譯で、鳥は目の世界——聲の世界、音の世界も人間より廣く鋭いかも知れない。極樂では伽陵頻迦など云ふ鳥が居るのです。地上を這つて居る動物にとつては、とに角、鼻の方が最も鋭敏であると思はれる。

ところが、人間になつて來ると、鼻の方は寧ろ第二義に落ちる。五感の上にに於いて、最も知的のものといへば目である。さうして耳といふものも、鼻といふものも、眼からすれば、第二義・第三義である。鼻の餘り鋭敏な人は、人間として寧ろ下等といふ譯ではないかも知れないが、鼻の鋭いものは何でも嗅付けるといつて、あまりよく申しませぬ。嗅付けるといふと、動物の事を思ひ合せます。耳の方のことは、私は音楽の感覺が頗る鈍いのでいけませんけれども、音楽家に言はせますと、音楽程、人間の氣持を表現するに有力な道具はないといふことであります。近代の音楽は、しかし、餘程知的だとも申します。

感覺の相互補足

盲目の人になりますと、目が見えないといふ所から、目で損したところを、耳で取り戻すと云ひます。即ち耳が非常に鋭敏になるのです。それで人の氣配といふか、總て人の動きといふやうなことに對して、彼等は頗る敏感である。目が見えると、人の素振りを見て取ると申しますが、盲目の人は、素振りでなくて、氣配を悟ります。一寸でも物が動くとき氣配が漾ふ、それを耳で感ずるのです。耳が發達して來ると、かういふ風になるのです。

或る時盲目の人が家の中に居ると、家の外を歌を歌つて行く人があつた。これは話か事實か知りませぬが、さうすると、その盲目の人が言ふには、『あの人は首がないが』と言ひました。首がなくて歌が歌へる筈はないのであるが、とに角、さう云ひました。ところが、それから幾らか時間がたつてから、その歌を歌つて通つた人が、またその家の前へ來ますと、誰かに首を斬られてしまつた、といふのです。

バサリといふ音がして皆んながびつくりして出て見たと云ふことです。それはどういふことであつたかといふと、その人を狙つて居つた人があつたが、その人は主人の使ひに行く途であつたので、往きには斬らないで、使命を果して歸つてくるのを待つて斬つたといふ譯です。これは盲目の人は普通の目の明いて居る人よりも、耳の感じが強いので、道を通る人の聲からその人の運命が判ぜられたと云ふ、大分神祕的にもなりますけれども、さういふこともあり得ると見て宜しい。盲者の耳の敏いことは傳説的であります。

ところが、又盲者の例であります。盤珪禪師といつて、徳川の中世期、即ち元祿時代に亡くなられた人で、丁度澤庵和尚の後に出了た人があります。その盤珪禪師の所へ時々來る盲目の弟子があつた。その盲目の弟子は非常に鋭敏な耳をもつて居てよく音を聞きわけた。殊に人の聲を聞いて、その人の心持を讀むに妙を得て居た。その盲目の弟子が言ふには、普通に一般の人が『お目出度い』とかいつて、お祝ひの言葉と言ふのを聞いて居ると、その言葉と反對に、その聲の中に悲しみの心持が

出て居て、喜びの聲音が悲しみに聞こえる。それから又何處かで誰か死んだとかいつて、お弔ひに行つて、『洵にお氣の毒千萬です』といふ、その言葉の中には、どうも一種喜びの聲が聞こえると、かう言ふのです。ところが、盤珪禪師の聲を聞いて居ると、何時でも同じ柔かい、暖い聲で聞こえるとのことなのです。さういふ高僧になると、何時も和平の心持であるものと見える。これは頗る我等の心理状態を穿つて居る觀察で、心理學的にも本當のところがあるのです。宗教的に云つて、我等には我といふものがなく取れない。

近頃個人主義はいいとか悪いとかいひますが、この個人主義と云ふのは、果してどういふ意味で言ふのか、頗る漠然として居りますが、所謂個人主義を我利く主義であると解釋すれば、個人主義が悪いといつて居る人の中にも、大分我利くの考へを持つて居るといふことになるのです。それはそれとして、今悲しいといつても悲しいといふことの中味には、『彼奴が死んだら、私の世になるのだ』とか、『彼奴の椅子が自分にまわつてくる』とか、それは意識はしてゐないが、無意識の間に、

いいことをしたといふやうな氣持があるのです。又近頃は大臣になつたからといつて喜ばしいか喜ばしくないか知らないが、兎に角大臣になるとお目出度いといつて挨拶に行く。近頃は鯛を擔いて行く者もないかも知れぬが、昔はよくあつた。『彼奴が今はなつたが、この次には、彼奴を蹴落して、自分になつてやらう』といふやうなことを、思ひつつ行きはしないだらうか、人間といふものは、これが面白いところで、我等の心理といふか、心といふものは、かうと意識して思つて居ることと、無意識に思つて居ることとは、時に大に相違して居ることがあるのです。

意識下に在るもの

我等は普通表おもてに表れた、所謂色なら七色だけの世界を、これだけだと自分では思つて居る。それと同じ話が吾等の心の世界にもある。自分はいい人間だ、自分は大分修行が出来たと、かう思つて、いい顔をして居るといふことになるのだが、實際はさうでない。意識のずつと下の方に、それを裏切るものがある。『さうでない、

さうでない』と云つて居るものがある。さうしてその人の事實上の働き方は、その『さうでない』と云つて居るもので指圖せられて居るのである。これは誰でもさうなのである。

西郷隆盛は、自分がどの位の人間になつたかは、夢で検査して見るがよいと言つて居ります。人の前では鹿爪らしい堅いやうな顔をして居るが、夢の世界といふものは、さういふものを一切かなぐり捨てて、眞裸の世界である。さうすると、自分の兼く欲しいと思つて居つたものを手を出して泥坊をした夢を見ることもある。論語に、孔子は夢に周公を見ずと言つて居りますが、孔子は自らはもはや周公以上の人になつて居られたと、かう見ても宜い譯である。私は西郷隆盛が夢を検査せよと言つたことを、青年時代に讀んで、成程偉い人だと思つた。それから自分でも西郷隆盛の眞似をして自分の夢を検討しては考へたことである。又明慧上人は北條泰時の師であるが、此上人は華嚴宗の坊様であつたが、この人がまた夢のことを書いて居る。無意識の世界は宗教的にも意味があるのである。夢といふものは、『夢のや

うな』などと云つて、學問の上から、人物の鍊成の上から斥けるべきものではないのだ。

近來、精神分析學といふ學問が出て來たのでありますが、その方面では頻りに夢を研究する。さうしてその夢で以てその人の生涯を卜するといふ譯である。私は嘗てその方面の大家と話をしたことがあります。私がその人に、『私は子供の時は夢を見ても、覺えて居つたこともあるが、近頃は夢を見ても忘れてしまふことが多い。どうかすると朝覺えて居ることもあるが、大體夢は忘れてしまふ』と、話しましたら、その精神分析學の大家の人の言ふには、『それは研究のためと思つて、注意を重ねさへすれば、夢は覺えて居れるものである。始めはなか／＼覺えられないうが、覺えやう、覺えやうとして勉めると覺えられる。さうして自分で分析して見ることが出来るやうになる』と、かう言つて居りました。その人は人の思想情意の分析に非常な巧妙さをもつて居る人である。それで自分にもその分析方法を實驗して居るのでせう。毎晩何か夢見るものとすれば、それを自分に反省して見ることは

決して無益な事でないと思ふ夜。の夢を朝起きても忘れないやうにして、それについて何か研究と云ふほどでなくても、氣をつけて見て然るべしだと考へる。

夢は必ずしもいつも馬鹿なものばかりぢやない。『痴人夢を説く』と云ふのは非科學的態度である。夢にも正夢と逆夢とあるやうなことも申しますが、それは本當です。正しい方の夢と申しますと、身體に異常のあるといふやうな場合に、それが意識の上に出ぬこともあります。意識して居る世界では、忙しくて、その身體にある異常にまで注意が届かぬ。即ち普通の意識の面で、意識を要求するだけの強さを持たないほどの身體の異常なのです。身體の異常で、晝間は普通の意識にそれを知らせるだけの力がなくても、夜になつて、意識面に對して外から働きかける力が休んで居る場合には、内面に在るものが、晝間の弱さから回復して來ることがある。さういふ場合には、正夢といふものが本當にあるだらうと思ふ。それから又逆の夢といふものは、吉凶といふやうな考でさまるので、正夢とその意味を異にするやうにも見られる。今日は吉日であるとか、明日は凶であるとか申しまする吉凶の觀念は、

これを精神分析學の方面から見ると、單に希望的な心理の反映にすぎないものときめてはいけないかしらん。尙精しく考ふべき點もあるが、ここでは略する。

我等の心の中には色々のものはいつて居る、これを悉く意識の面に現はすと、大變なことになる。そこで平生の意識面に現はれて居るものは、割合無色で中性的なものである。今日我等の中で誰も彼もいいといつて、餘り悪しくは評判しないものが、意識の面に乗せられてある。併し意識の下にあるところの無意識の世界、即ち意識の上へ上つて來ない世界、それには、意識の上へ上げると如何にも大變なことになる思念、情意が秘めこまれてある。意識面へ出すと、社會的生活の上に面倒が起るので、押へ付けて置くのである。その押へ付けて置くものが、夢の世界に現はれて來る。併しそれがそのままの姿で出ないことが中々多い。意識面はいつも行儀正しくあるやうに訓練が出來て居るので、夢の場合にも、起きて居る時の意識面で見るとやうなものが出て來る。意識面では意識的に押へないけれども、意識面へ出しては大變であるといふ心が無意識的にあるので、夢の中に現はれる事項も、見か

けは罪のないものである。心の底のものが赤裸裸に現はれて出ない。意識し得る限りでは、何でもないといふ形をもつて現れて来る。さういふことは、あまり具體的にお話すると、一寸困ることもありません。この程度にして置きます。我等が押へ付けておいて、意識の面へ出しては大變だと思つて、夢の中でも押へ付けて居る。それがそのままに出ることもないことはないが、さうでない大抵の場合には、或る假面をかぶつて出る、何等差障りないやうな顔をして夢の中に現はれて出て来る。さういふ場合には、さか夢といふやうなことにしてよからうと、私は思ふ。さういふ譯でありますので、この夢といふものも、無闇に下らぬものとして、無視してはいけないと思ふ。宗教的にも餘程意味があるのです。夢を全く意識以外に放り出して、起きて居るときの生活と何等没交渉なものと考へてはならぬ。

錯綜した利害の世界

話が横へはいりましたが、その盲者の話をつゞけて、又我等の普通の意識面へ戻つてお話致します。さういふ譯で、この趣味の世界、價值の世界、値打の世界、もう一遍いへば主觀の世界とでもいひますか、さういふ世界に入ると、各人にそれぞれ千萬無量の世界があると云つてよいのです。一本の木を見て居つても、一つの石を見て居つても、向ふに山が聳へて居る、川が流れて居る、人間が通る、雨が降る、風が吹く、地面が濡れる、崖が崩れるといふやうな點、それは我等が普通一般に認めて居る世界の事實であつて、我等は何れもそれを同一様に受取つて居るかと云ふに、必ずしもさうでない。話の上へ出すと、抽象的に、一般的に、罪のない、無色透明なものになるが、それが個人／＼の實際的生活、内面的生活の中へはいつてくと、決してそんな無色のものではないのである。たとへば、崖が崩れたといふことは、その崖の下に居つた人にとつては大變であるが、他の人々にとりては、若しやそのとき人が死んだとしても、向ふ岸の火事のやうな鹽梅に感ぜられもしよう。全く平氣であると云ふことでなくとも、『氣の毒だ』といつても、それはお座なりの氣の毒で、別に大した感情に裏付られて居ないのが不斷である。川の水が出て、

家が流されて、洵に御同情申上げると云つても、多くは月並の口上である。時によると、貧乏人であれば、金持の屋敷は、ときに流れて見るも宜からうなどといふ考へになるかも知れない。金持にしてみると、貧乏人が流されては、そりや氣の毒だといふかも知れぬが、心の中ではナニ貧乏人が少し位流されたつて、大したことはないと思つて居るかも知れぬ。さうだと私は斷言はしないが、かういふことを感じ得る可能性は、その人の無意識の中に随分あると思ふ。或る點では、歴史的にもさういふ點の證明が出来得るかも知れない。又雨が降つて困る人と傘が賣れて喜ぶ人とある。近頃は統制で賣るにも賣られぬといふことになるかも知れぬが、兎に角、雨が降れば傘が賣れて結構だといふことになる。或は又この頃のやうに雨が降りつづくと『又降つて困る』といふが、水の足りない所からいへば、水のあつた方がいいといふことになる。人間萬事塞翁の馬で、色々の世界が色々の圓を描いて、様々に交差して居るのである。

それで、我等は感覺的には、或は概念的には、同じ世界に住んでゐるやうで、それで各人に具體的な實際生活的の趣味の世界に入ると、その世界は千差萬別になる。この柱は、物理的、客觀的にいへば、四角といふことになるが、或る人の主觀から見ると、これが三角でも六角でも、或は丸くてもかまはないので、四角がいつも四角に見えないのである。その人の主觀の差で、即ち趣味の世界を支配して行く原理で、或る程度までは、客觀的と云ふ事象などには無頓著なのが、我等の世界である。或る人にとつては、お寺の構造よりも、一匹の蟻の歩いて居る方が大事だといふこともある。さうすると、我等の實際生きて居る世界といふものは、空間的、時間的、概念的存在以上に、千差萬別の個體的世界が非常な複雑性で入り亂れて居るものと見なくてはならぬ。その人々の持つて居る價值の世界、趣味の世界、主觀の世界といふものは、個體の認められる限りに、無限量のものと云ふことが出来得ると思ふ。しかし、今いふやうに、雨に興味を持ち、柱に興味を持ち、蟻に興味を持つて居るといふやうに、感覺的、客觀的事實と云ふ特定の個物に對して、それ々の興味を持つて居るといふだけでなくて、同じ柱そのものについても、各人の興味が違ふ

のである。私等の見る所と、大工さんの見る所と、家を建てる人の見る所と、材木屋の見る所と、子供の見る所と、或は猫をか犬とか云ふもの——犬ならば、臭ひの世界におけるこの柱は小便をするに丁度いいといふので、無闇に嗅ぐかも知れない——とに角、色々の見方がある、いろ／＼の個人的主観の世界がある。價値の世界を單なる主観の世界といふ譯にはいかぬであらう。何か客観的なものを考へなければならぬが、それを生活の上で受入れる世界は、やはり個人の主観だから、千差萬別の世界は成り立つのである。

多様性を容れるもの

それでありますから、同じ家に住んで居つても、同じ家族であつても、家族は人違つた意味を持つて、その家に住んで居ることになる。さういふことになると、この世界は大分我等が普通に考へて居るやうな簡單なものでないらしいやうに思はれる。今日のやうな世界であるから、マア一億一心といふやうな鹽梅に、やつて行

かなければならぬのであるけれども、一億一心といつても、或る點だけが一人であつて、その外の點では、種種雑多であることは疑ひない。それには、一億一心といふことも言はれ得るが、中には矢張り、一億一心でないものも入つて居る。一億の心が、それが一つの點に集中せられて居るといふことは、一億一心といふその一心の方へ、我等のもつ普通の心の一部分が——我等の意識の尖端が——そこへ行つて居る、而してその尖端を廻ぐつて居るところの、周邊にあるところの心、或は世界と云ふものは、一億一心を支持して居るといつてよい。さう支へて行かなければ、今日戦さが出來ないといふことになるのである。併しその一心を離れもせず、又それにつきもせずして、フラ／＼とその周りに動いて居るものもいくらかもある、或はさういふものがあるために、かへつて一心といふものを育て上げることが出来る。あまり皆んなが一心一心で、心の尖端へ寄つて來て居ると、一心だけになつて、却て動きのとれぬものになつて、機械的なものになつてしまふ、何等の力のないものになるかも知れないと、かう思ふ。意識の尖端に出て居るところの『一心』は、所

謂『泥中の蓮』といふやうなもので、泥の中からでない蓮は咲かない、蓮はひとりで咲いて居るのではない。蓮を咲かして居る泥水がある。あゝいふ汚ないものと思はれるものが、そこにあるので、そこから綺麗なものが咲いて出る。それと同じやうに、一心といふ美しい花を咲かせるには、その花ばかりでなくて、そのぐるりにいろ／＼なものがある。それがあるによつて、かへつて一心といふものが育て上げられる、かういつたらしいではないかと思ふ。

そこで、そのぐるりにある所のものであるが、これは特定の場合を除いては、それは自由自在な働きをして居るといふことになる。例へば骨董の好きな人なら、骨董といふことで、別に實利でないやうなものを見て、喜ぶといふやうなことがある。これと反對に、實利主義の人は『花より團子』といふやうな鹽梅に、團子に飛び付くといふことになる。この柱を四角と見る人、三角と見る人、或は丸いと見る人といろ／＼ある。そのいろ／＼あるところに百紫千紅、各々その美をなすのである。それを一つに纏めて、自餘の存在を許さないといふことになる、みたところは揃

つてゐるが、そこには眞の生命はない、何れも機械的になつてしまふ、即ち死んでしまふ。統一體が國家なら國家、社會なら社會、或る地方ならその地方といふあんなばいにかたまりの集團意識に引くるめるはよいが、その周邊又は根の方に、その統一を支えて行くもの、而してそれに生命を與へて居るものには、その生命の持續し活動するやうな處置を懈つてはならぬ。

下の方はそれでよいとしても、只それだけでもいけない。上の方には矢張り一纏めのものがなくてはならぬ。それが或る一定の時期に於ける、特定の仕事といふことでなしに、特定の場合も、普通の場合も、皆悉く含めて、その總てのものをひつくるめたところの、極めて高い、極めて廣い、極めて深い、廣大幽遠な世界を考へなくてはならぬ。その世界に於いて、千差萬別なものを統一するといつてもいけない、統制するといつてもいけないが、とに角、その千差萬別なものが、それにおいて始めてそれ／＼の意識界を建てて行くと云ふことになるのです。我等各自の個的趣味、價值觀など云ふものをそのままにして置いて、さうしてそれらを一纏めにひ

つくるめて、その間に矛盾、衝突の存在をも許して行くところの一つの世界がなければならぬのです。人間に意識の出たかぎりにおいてはさういふ世界を見付けなければならぬのです。その世界を見付けることによつて、その人の靈的價値とでも云ふものが定まるのです。つまりそれで人間に値打が出るといふことになるのです。

我等各自の主觀の世界では千差萬別のものを持つて居る。その千差萬別のことを、千差萬別のままにして、各自に、個個、それ／＼に、その所を得せしめるやうな、もう一つの統一性の世界がある。統一性などと云つては誤まれるも知れないが、假りに統一性の世界として置く。さういふものが、どう見ても、なくてはならぬのです。それを體認クシャインチーすることによりて、人は千差萬別の主觀に囚へられずに、一種超脱の生涯に入るのであります。これで絶對値打ができると思ふ。これを一眞實の世界と申しておきます。

原始生活へのあこがれ

これは尙第二回に續けて申しますが、その前に一寸お話をしたいのは、近頃讀んだ本の中で餘程面白いと思ふことがあるのです。それはエスキモー人の原始生活に對するあこがれなのです。

エスキモーといふのは、アメリカ大陸の極北方に住んで居る土着の民族で、アメリカン・インディアンの一部族と云ふことです。北アメリカの又北の、カナダのずつと又その北の方の寒い所に、今は定住して居るのです。近頃ヨーロッパの戰爭でアメリカがアイスランドとか、グリーンランドに進駐したなど新聞に出て居るが、そのこのグリーンランドよりも、もつと北方に當るカナダの極北に住んで居る種族に、エスキモーといふのがあることは、貴方もよく御承知のことと思ふ。その邊の氣候は零下五十五度といふのですが、これは華氏と思ひます。攝氏では五十五度でもまだ大したことはないと思ひます。華氏の零下五十五度といふと非常なものでせう。私は華氏で零下十度位の所に住んで居つたこともあります。それは攝氏の二十五度以下の所で、滿洲のやうな所に幾冬もすごしたこともあります。そこらよりまだ

まだ寒いのですから、餘程寒い。自分の居たところでは、冬は地下六尺以上も凍るのですが、北極近くでは百尺位の深さまでも氷ることでせうか。

かういふやうに、人間界から離れた所に住んで居るエスキモー人の食べる物は、所謂ラッコかオットセイか（どつちだか無學の自分は知りませぬが）、それを捕へて食べるのです。その外には魚です、野菜は固よりありません。日本人の食べるやうな魚の刺身でなくて、オットセイの刺身です。魚のは凍つた刺身でせう。何でもがすぐに凍つてしまふと云ふことです。氷の下の海水は普通には冷いが、此處では暖い、そこに魚やオットセイが居る。表面の氷を掘つて、その下何尺といふところに居る魚を取るのである。魚は上へ上げられたら直ぐ凍つてしまふことになるだらうと思ふが、さういつた魚を食べて生きて居る。エスキモー民族の生命は、冬期では魚とオットセイかラッコかで繋がれて行くのである。

こんな鹽梅でありますから、火炊は勿論しない、出來ない。凍つた物を生のまゝ、手づかみで食べるのだから、そんな所では文明人・文化人が行つたんでは、到底一

日も住める所ではない。ところが、そこへ宣教傳道に出掛けたキリスト教——新教でなくて舊教だが——その教父にアンリーといふ人が行つて居る。自分らの白人仲間・文明人仲間を全く離れてしまつて、そこに獨りで布教をして居る。今話しの本の著者はその人のことを此處で書いて居るのであります。西洋の人は酔狂といへば酔狂であるが、随分番狂はせの仕事をやつてのける。巴里の眞中に居た或る一人のフランス人が、ある日、ヒョットとエスキモー民族の中へ行つて見たいといふ氣になつて出掛けて行つたのである。その旅行記は英語で讀んだのであるが、元は佛文であります。このフランス人がパリでエスキモーのことを書いた本を讀んで、急にそこへ行く氣になり、教父のアンリーといふ人の所を、遂に訪ねることになり、其人の生活の一部をも、此書に書いてある。

著者によると、その教父のアンリーといふ人は、小さい丸太小屋に住んで居つた。あちらでは木よりも氷を積重ねて作つた小屋の方が暖かいさうです。氷を煉瓦のやうに切出して、それを積上げて拵へた小屋をイグルーといふさうです。そのイグル

の方が暖かいさうですが、その坊さんの住んで居るのは木の小屋であつて、その中に小さな寢臺が一つあつて、その上にラッコか何かの皮が二、三枚敷いてある。さうして小さい入口から寢床までは四尺位の隔りしかないといふのだから、所謂維摩の方丈よりも小さい木の小屋である。そこで教父は寢起きして居る譯であるが、さうして彼はそこにもう六年間送つたと云ふことです。自分の仲間と同じやうな人間が一人も居らないエスキモーの中で、さういふ野蠻的といふか、原始的と云ふか、單純極まる生活をやつて居るのです。さうして食べて居る物は何かといふと、所謂その生の凍つた魚なのです。それを手づかみでたべるのだと云ふことです。

さういふ生活で何を楽しんで居るか、何がその人の生活を支配して居るのかと、かう感じるが、そこを訪ねた人の話では、キリスト教の唯々神といふものだけで、神と共に生きて居る——佛教の方なら佛と共に生きて居るといつてもいいでせうが、神と一緒に生きて居るといふより外ないのです。如何にも、その人の身體といふやうなものが透通すびとにつて見えるのだと云ふのです。さういふやうな寒い所であるから、

いろ／＼な毛皮を着て、顔も鬚だらけで、殆んど身體といつても目の周りだけ見えて居るだけだが、それで居て、その人の全體から出る人格がどうも透通つて居るやうに見える。さうしてその目が子供の目のやうに實に澄んで居る。我等の目のやうに濁つてどんよりしてゐない。さういふやうに、神と共に生きて居るのであるから、目の色が徹底して透通つて居るにきまつて居る、その人から受けるところの總ての感じが、如何にも玲瓏で表裏なしと云ふこと、一片の人欲といふものもないからでせうかと、かう此本の著者は記して居ります。

さうして、此聖者の教父を訪ねた人が、『今日は寒い』と言へば、成程『寒い』といふ返事はするが、その人は、こちらが寒いといふから、寒いと挨拶するだけで、寒くても暑くても、そんな事は無頓著だといふ顔色である、或は目色であつたと云ふ。著者の云ふには、その坊さんは浮世の言葉を使つてはゐるが、その人の表情は浮世を離れて、神の世界に居るやうに感ぜられたと云ふことです。その人の人格のすべてが透通つて見えるといふと、エスキモーの氷の世界のやうに、何か冷たく感

じられるかも知れぬが、さうでなしに寧ろ暖みあたたかのある黄金の光といった方が宜いかも知れん。その人の總てから黄金のやうに暖か味のある光が放たれて居つたものと見える。此本の著者はかういふやうな清浄な生活をして居る基督舊教の教父に、北極の氷の中で會つて來た話を書いて居るのです。基督教者には今もこんなえらい人があるから、その教の力が衰へぬのでせう。佛教徒は私かに自ら顧みるべきである。實にかういふ人の生きて居る世界は、氷の世界に居りながら、氷の世界でない、神の世界に生きて居るといふことになる。その人の持つて居る世界を見るといふと、我々も一種の憧れの氣分が起きる。かういふやうな世界があるといふことは、單なる趣味とか價值とかの世界でなくて、もつと超越したところの世界であるやうに感ずる。此人の如きは實に一眞實の世界の人でありませう。

第二一回

原始生活と唯物主義

今日はエスキモーのお話に聯關したことを少し申し上げます。その方が話を進める上に具合がいいと思ふのです。

エスキモーの生活といふものは、極めて原始的なものである。今日我等の生活はこれに反して『文化的』である。さうして原始的な生活を餘程離れて居る。離れて居るがために人間性といふものが却てはつきり分らぬやうなこともある。従つて或る點では人間界をとりまく本來の環境とでもいふものが、またはつきり認識せられぬといふこともある。

文化が進むに従つて歴史的環境といふものが出来る。單なる自然といふことになくて、又別の環境といふものが人間生活を包んで來るといふやうなことになるが、さうすると、何かいろ／＼なものがくつついて來る。機構といふか、何か作意的な、人爲的なもので、自分らを餘計に包むといふことになる。昔、孔子が衣食足つて禮

節を知るといつたやうに、衣食住が充分でない、その方面の要求を満たすに忙がしくて、禮儀といふやうなことは行はれぬ。禮儀といふことは即ち文化といふことである、今日の文化生活、文明生活といふことになるのでありますが、しかし、我等の衣食住といふことが、人間生活に對して最も原始的な要求であるといふので、その原始的な要求であるといふことのために、そこに最も人間性といふものを讀むことが出来るのである。

その人間性を讀む時に、近頃の唯物論者とか、共產主義といふやうなものは、その所で、單なる經濟生活、經濟思想といふやうなことだけを見ようとする所があるやうに思ふのであります。ところが、原始生活は單なる衣食住を満足するところの生活といふものにしても、そこに單なる經濟生活といふか、物質的文化といふやうなものだけを見るべきではないと思はれるところがあるのです。

そこで、この原始的な生活へ戻つて行つて、單なる經濟生活だけでないものをそこに見るといふことがあるのです。唯物生活といふやうなことだけを考へるといふこととでなくして、もう一つ私はさうでない生活がそこにあると思ふ。それを見なければならぬ。唯物論者とか、共產主義者といふものは、その原始の經濟生活を衣食住の要求といふことを満たす所に於いてのみ見て居る。單なる經濟方面だけを見て、さうして何も彼も經濟主義で總てを規制して行かうといふことになる、そこに非常な誤りが生ずるようになるのです。

それで、原始生活へ我等の今日の生活を還元して見て、さうしてそこに單なる經濟生活といふこと、衣食住の満足といふことでない、もつと他のものを見るかといふことにしなければならぬ。それなら、その他のものといふのは何であるか。唯經濟生活を見るべきであるといふ所へ、他のものを附加へて見るのかといふと、さうでなくして、經濟生活に即して、我等には經濟生活を超越したところのものがある、さういふものを見ることにしたいと、かう思ふ。

昔、人類の進化論といふことが大分喧しく言はれた時に、——今日でも勿論進化論はいひますが、初めてダーウィンが進化論を持出した時に、生存競争といふこと

が言ひ出された。私の若い時には生存競争とか弱肉強食といふやうなことも言つて、唯強い者が勝つのだ、弱い者は負ける、何でも強くなれ、強くなつて弱い者を食へて行けば、それでいゝのだ。さうして自分等が次の世に残るようになければならぬ。強者といふものが自ら存在するだけの権利を持つて居る。弱者は結局生きて行く必要がないといふか、生きて行くだけの権利或は理窟がないといつたものである。その時に、何でも強くなるのが一番だ、何でも他の人を酷い目に遭せても、自分さへよければいいといふ思想が、中々熾んに行はれたこともあります。

丁度、マルキシズムが出て、物質的にのみ物を見ること、即ち唯物主義といふものを説いたのと能く似て居ます。唯物主義は唯物を見て他のものを見ない、經濟生活の他に何ものを見ないと云ふのです。それであるから、何でも經濟的方面の機構だけを變へて行けばそれでよいといふことを唱へるのです。これは、或る意味で言ふと、このダーウインの進化論と——ダーウインの進化論は必ずしもさういふ意味ではなかつたが、生存競争といふこと、強者が弱者をとつちめて、強者の存在だけ

が希望せられるといふやうな所と、此唯物論は、或る意味に於いては一脈通ずる所があるやうに思はれる。その一脈通じて居るといふ點は、所謂唯々物の力にたよりて、その外のものを認めぬといふ所にあるのだと思ふ。單に物のみを見て、他の何も見ないといふことになると、どうしても力の世界だけしか見ないことになるのです。それで弱肉強食にならねばならぬのです。

ところが人類の生活をいくら原始生活に還へして見ても、そこに單なる唯物主義、經濟主義、弱肉強食主義、或る意味で言ふと、適者生存、強い者が勝つといふ生活の方面だけではないのです。原始生活の中にも、精神的といへば精神的、靈的といへば靈的、さうして又宗教的といへば宗教的ともいへる、さういふものがそこに見られると、かう思ふ。それを見るのに、エスキモーの生活を、近頃外國の雜誌で讀んだのを御紹介すると、多少私の心持が分るだらうと思ふ。

氷の世界

そこで前講でも話したやうに、ヨーロッパの人——文明の今日、至り得る限りの生活をして居つたそのヨーロッパ人が、ヒョツと思ひ立つて、北極近くに住んで居る原始的なエスキモー人の中へ行つて一冬をすごしたのである。その人の記録を見ますと、その人はエスキモーの中では、百年に三人しかはいらなかつたといふヨーロッパ白人の中の一人であつたとのことです。その位、現時代文明の空気を吸つてゐない。野蠻といへばいへないこともない、原始的生活をやつて居るのがエスキモーなのです。さういふ人々の中で一冬をすごした此書の著者は餘程思ひきつた人と云はなければならぬ。

その一冬といふものが、昨日も申上げたやうに、華氏の零下五十度といふのである。一面に凍つた海の上を犬が橇を引いて歩く。ああいふ寒い所では、冬が本當の生活をやる時季だといへるのである。冬になると、今まで渡つて行けなかつた海や河水が水面下何尺といふところまで凍つて行くから、今まで行けなかつた所を橇で自由自在に、犬に引かせて行けるといふことは餘程面白いことである。日本のやう

なからいふ所に居れば分りませんが、ああいふ寒い所に居つて、今まで行けないと思つて居つた湖水が皆凍つてしまふ、その上を自由自在に歩くことが出来るといふことは、何だか妙な気分になるものであります。ロシアにバイカルといふ湖水があります、バイカル湖の湖水の端を四月頃通つたが、その湖水の上をずつと橇を馬に曳かせて駆けすべらして行くのを見たことがありました、如何にも別な天地が開けたやうに思はれます。さういふあんなばいで、エスキモー人は北氷洋が凍るといふと、今まで近付けなかつた海の上が自由自在に通れる。さうして、風が吹くとか雪が吹き荒むといふやうな時には、氷を切つてそれを積上げて、さうしてその下へかゝんで、雪を避けるとか、風を避けるといふやうな生活をして居る譯なんです。さういふ所になりますと、満目荒涼といふか、すべて灰色一つに塗りつぶされて、水平線上の向ふにも、海と天との區切りがつかなくなつて、只一面の灰色の世界となると云ふことです。

北氷洋の冬になりますと、吹雪の時には寸尺を辨ぜずといふか、自分の橇を引い

て行く犬さへ見えない酷い吹雪の時がある。さういふ時には何處を通つて行くのか本當に分らぬやうなことになる。ところが馴れて居るエスキモー人はさういふことはあまり心配せずにさつさと行く所に行く。そんなら、さういふ所で、どうして道を迷はないかといふと、氷の上に行く時に橇の輪の跡——それは幅二寸程のもので、二尺にも足らぬ間隔を有する跡がつく、その跡を探がして行くのである。雪が降つたらその跡が消えると思ふが、エスキモー人は雪の中を除けて、その跡を嗅ぎ出すだけの勘と申すか、さういふ一種の直覺力を持つて居る。我等が行つたら何處へ行つてしまふか分らぬやうな所を、エスキモー人はよくその輪のあとを探しあてて、行くべき方向を知るのである。北極の吹雪といふやうな時に、場合によつては、五十哩位の速力で風が吹き廻はるといふ時に、顔はコテを當てたやうに焼け出し、體中がすべて棒のやうになり、自分は一體何處へどういふ風に吹飛ばされて、どう云ふ運命に見舞はれるか分らぬと、我等は心配するが、エスキモー人は、さういふことは更に心配しない。まづ一服と云ふ具合に、煙草を吸つて、それから氷を切る仕

事にとりかかるや否や驚くべき敏捷さで、先に申上げたやうに氷を積み上げて、イグルーを拵へる。

やるだけのことを、やつてしまふと、それからは悠悠としたものである。馴れないものが見ると、或はどうしてそんなにぐずぐずやつて居るのか、或はどうしてそんなに素早く動けるのか、或はどうしてそんな勘があるのかと思はれるが、彼等は實に何の心配もなく、何の澁滞もなく、如何にも悠然として、而して敢然としてやつてのけるのである。

さういふ點を見ると、殊にヨーロッパ人などの目から見ると、彼等は實に驚くべき習性の人間だと申さなければならぬのです。所謂アリアンといふか西洋の人間は、東洋人に較べると、如何にも神経質でせか／＼して、さう思つたら早速やらなければ氣が濟まぬといふやうな所がある、さういふ人間が今言うたやうな原始的自然と突き合ふ時に當つて、土人が悠悠と迫らずに、落付いて氷の家を作るといふやうな様子を見ると、西洋人が西洋人自身を省みて、如何にも馬鹿くさくて仕様がな

思はれたといふやうなことを、此エスキモーのことを書いた佛蘭西人は言つて居る。それは勿論さうだらうと思ひます。

そこで、この土人について學ぶべきことはどういふことかといふと、さういふ急變の場合に於いても、今までずつと馴れた經驗で氷を切り出したり、雪で埋められた氷上に行くに當りても、橇のわだちを嗅ぎ出して、行くべきに行き、止まるべきに止まる様子は、技術的にも見事なものであるが、その精神的態度——大事に當りて悠悠迫らぬ態度——などは、如何にも文明人の學んで行かねばならぬやうな所があると、著者は感心して居る。

それから今一つ御話しなければならぬのは、こんな處で生きて行くには、この北氷洋に住んで居る動物を取つて、それを食べて行かなければならぬといふことである。その魚を取る時には、さういふ水面下何尺も凍つて居る氷の中へずつと穴を明けて、その穴の中から水中を覗いて魚を捕るのである。その捕へ方はそれを釣るのではなくて、銛といふやうなもので突くのです。魚の來るのを待つて居つて、どん

な小さな魚でものがすことなく突刺す。それが一時間でも二時間でも魚の來るのを同じ姿勢で氷の上にしゃがんで待つて居らなければならぬ場合がある。魚の場合は、それ位でも濟むが、オットセイとかラッコといふやうなものを取る時にはどうするかといふと、オットセイは水の中に住んで居るが、時々氷の上へ顔を出して息をしなければならぬものである。厚い氷であるから、さういふ穴をオットセイが方々に拵へて置くものである。しかしその穴は始終雪が降つたり、新たに氷つたりして、ふさがつては居るが、その所は氷が割合に薄い。そこを犬が行つて嗅ぎ出す、さうして主人に知らす。さうするとエスキモーの土人はその穴のそばで、オットセイが穴から顔を出すのを待つて居る。オットセイは非常に耳が敏感な動物で、一寸した氣色けはひにも直ぐ氣付くのである。それで土人は少し離れた所から、一種の同じ姿勢でつくばいながら、いざと云へばいつでも武器をくり出し能ふ態度で、而かも動かないで、穴を見守つて居なければならぬ。それが一日や二日ならいゝが、三日も四日も待つて居ることがあるといふのです。そんなことは事實でないらしく思はれる

が、どうもさういふこともあると見える。さういふ時には三日も四日も食べずに居る。動物も人間も、こんな處では、不規則な生活をするので、食べないのには、馴れて居ると見えて、犬なども一週間も食べない場合もあると云ふことです。それでも犬共は逃げもしないで、主人のために働くべき時には働くと言ふのである。犬と人と氣合がよく合つて居るとでも云ふべきであらうか。兩者とも如何にも超越したものである。三日も四日も同じ姿勢で寝もせず、食べもせずに、じつとして居るといふその忍耐はとても文化人の眞似の出来るところのものではないのである。

さうして、愈々獲物を捕へたとなると、それから大亂舞の御馳走が始まるのである。それを料理して食べるときになると、それは、非常に異常なものだと云ふことです。即ちそこに集まつた一群の人々は、生のまゝの肉を手掴みで、骨ごとにモリ／＼食べる。エスキモー人の顎は非常に強い、唯肉を食べるだけでなくて、少し位の骨はガリ／＼と音を立て、食つて居る、齒が恐ろしい位頑丈なものださうです。さういふやうな鹽梅に、兩手に血だらけのものをつかんで、初めはいい所から食べて行く

が、だん／＼悪い所でも構はずにみんな綺麗に食べてしまふ。その様子はまるで鬼のやうであると書いてある。

私有財産・自然の生活等

エスキモー人の集團生活といふものには、個人主義とか私有財産など云ふ觀念がないと云ふのです。一人が持つて來たものは、皆んなでわかる、みんなで食べる。一人だけで大事な物をこつそりと持つて居るなどいふことがなくて、一つの集團に屬したものとなつて居る。自分の物もないし、人のものといふこともないので、その生活様式は本當に共產主義の生活である。すべての物は、集團のものであり、我々の物である。私の物でなくて私らのものである。冬など物を貯蓄する場合にも、——なるほど、貯蓄心といふものは持つて居るが、それは蟻が貯蓄するやうなもので、貯蓄をしなければならぬからするのであつて、さうしてその貯藏所は共同のもので錠前も鍵も何も無い。去年から今年にかけて、其處にほ／＼放してある。そこ

から出して来て食べる時には、皆んなで分けて食べるといふやうな鹽梅である。

さういふやうに、極めて原始的共同の生活をやつて居るエスキモー人の間には、自分といふものを考へないで居るやうである。ところが、こゝに一つ、我等所謂文明人といふか、或は少しく原始的な生活を離れたと云ふべき人々から見ると、なかなか酷いやうな所がある。それはどういふ所かといふと、年寄を捨ててしまふといふことがある。年寄の世話は出来るだけするが、いゝ加減な年になつて、身體が自由にならぬ、團體生活の上に役に立たぬ、却て團體はその年寄の世話を餘程見てやらなければならぬことになる、その年寄は自分からも發意し、團體からも認められて、ついには氷雪の上へ持つて行つて、捨てられるのである。日本にも姥捨山と云ふのがあつたが、役に立たぬものは捨てられてしまふといふことになる。原始生活といふものには、さういふ一面がある、今日の戦さの場合でも、絶對的能率を擧げなければならぬときには、足手まといになるものは、何でもかでも皆捨ててしまふのである。それと同じやうに、團體の生活を持続する上に於いて、食物がないと云

ふふとなり、又それを獲得するに能率を缺くと云ふことになれば、團體としてはその全機能を盡して食べるといふことに集注せられねばならぬ。さうすると、どうしても足手まといの者は捨ててしまはなければならぬといふことになる譯である。そこがどうも今日私共普通の人間として甚だしのびない譯であるが、しかし原始社會の人々の中では、それが習慣になつて居るので、年寄自身の方からもう捨ててくれといひ出すといふことである。さうして皆んなが寄つて相談して、さういふことにしようといふことにきまると、その人を夜中に氷雪の上に捨てて置くといふことである。イグルーの中から出されて、寒い一晚を氷の上に晒されることになれば、年寄は間もなく死んでしまふといふことになるであらう。甚だ不人情を極むるわけであるけれども、只今申したやうに、所屬の團體の生活能率を擧げること、即ち環境の壓迫力に抵抗して生きて行かなければならぬといふ時には、どうしてもさういふやうなことは已むを得ないのであらう。近代文明の國でも、科學的生活と云ふものを強調するところでは、人情から見ても隨分如何はしいと思はれることが、實地に

行はれて居ると云ふものもある。

今日の我等の考から見ると、原始集團的生活には色々の面があります。もう一つ、人間の原始的状態即ち環境を赤裸裸に示す所のものが北極で見られます。我等のやうな今日の生活をして居つては分らぬけれども、この北極のエスキモー人の天地に行くと、何もかも隠くすところなしです。空には鷹がぐる／＼廻つて居る。何を取るのかといふと鼠を取るのです。鼠は小さな鼠である。その鼠は何を食べて居るかといふと、自分よりも小さなものを食べるためにそこに居る、所謂弱肉強食である。小さなものが大きなものに食べられる。弱いものが強いものに食べられて行く様が、さういふ所に居ると直ぐに目につくと云ふ。今日の資本主義とか、自由競争主義とかいふものでは、なるほど強いものが弱いものにいじめられるが、一寸の素人には、直接には見えないかも知れないが、原始的環境では、そのままにさらけ出されて、直ぐ目の前に見える。

又そこら邊りには、狐が澤山居る。北氷洋だから白狐である。エスキモー人が狐

を取るが、しかしエスキモー人にとつては、狐は何の價もないものである。それを所謂文明人が行つて、狐の皮を買ふのである、さうしてエスキモー人と何か物物交換をするのである。それがために、冬に氷が解け出して、こちらの南の方の人間が行けるやうになると、或る所で市場が開かれて、狐の皮と文明品との交換をするといふことになるさうです。

それで、その狐はどうして生きて居るかといふと、そこには又狼が居つて、その狼はその邊に居る特殊な鹿を攻撃して食べる、ところが狼は贅澤なもので、鹿の或る部分しか食べない。後を残して置いて又新しい鹿を殺して食べる。狼のお残りの部分を狐が食べるのである。その邊に住んで居る白熊は何を食べるかといふと、例のオットセイとかラッコ、海豹といふやうなものを食べる。白熊は又贅澤でオットセイの油だけを食べて他は顧みない。さうするとその残りを今度はまた狐が行つて食べる、といふやうにお互に食べ合ふといふ譯である。事實人間も他の動物を食べるて居る譯であるが、さういふ具合にまざ／＼と目の前に見えない。人間は牛肉を食

べるが、それは誰か殺してくれるので、我等が直接に牛を引割いて食べるという譯ではない、一種の製造せられた品物のやうになつて、牛肉は人間の食卓に上つてくる。併し屠牛場へ行つて見ると、實に凄慘なものである。あすこへ行つたらああいふものは食べられません。(餘談であるが、シカゴの屠牛場を見たことがありますが、それは酷いものである。ああいふことをやつて居る人を見るといふと、その人の顔は人間の顔ぢやない、鬼畜の顔といつてもいい。鉞や鋸で、皮を剥いたり牛を四ツ切りにしてしまふ。酷いものである。そこに働いて居る人の顔は見られたものではない。さういふ風にして作つた後で、我等の所へ持つて來るのである。それが原始の生活を見るといふと、直接に何もかも赤裸裸に出て居るのだから、なかなかどうも酷いものである。さういふものを現にそこへ見せつけられる。)

さうして原始民族が、魚を取つて食べるとか、それからオットセイを食べるとかいふ所を見るといふと、如何にも人間といふものが生きて行く爲には、又他の生き物を食べて行かなければならぬ。そこに人間生活といふか、生物生活といふものの、

如何にも情ない所が見える。しかしながら、情ないといふのは、今日我等が言ふ所で、實際その場面向つて居るものには、情ないといふより、さういふことに始めからなつて居るのでなんでもないのである。狼は鹿を食べる、その残りを狐が食べるものときまつて居る。エスキモーは二晩でも三晩でも、氷の上の穴を狙つて、オットセイの顔を出すや否や、それを一突きにしとめる。さうしてそれをまるで、犬のやうに肉や骨をガリ／＼食べる。かういふ風になつて居るのである、別に何といふことはない。可哀想といふこともなければ、氣の毒といふこともない、さういふことをしているのか悪いのかといふこともない。唯、さうして生きて居るのである、生きることが至上命令なのである。唯それだけなんだ。年寄は仕方がないから捨ててしまふ、捨てられてしまふ。さうでないと集團の生活能力を缺く、その機構の上に變化を生ずる。さうなつてはどうもならぬから、年寄は自ら消えなければならぬのである。さういふことなんだから、それで何ともなしに行ける。唯その共同生活をやつて行く上に於いて、互に一致して行き、互に力を合せて行くことが必要であ

る。その他は顧みるに違がないのである。こんなことを云ふのも、外からさういふことに気が付くだけのことで、現にそんな生活をやつて居るものは、さうは思はないのである。唯さういふことになつて居るのを、そのままに受入れるだけである。

閑家具と原始性

もう一つ、さういふ生活をするといふと、古道具といふやうなものがいらぬ。要る物は、毛皮を着るに必要なものとか、魚を捕るとか、その他の動物を捕るに要る銛とか綱とかいふものだけである。贅澤品をその身につけようとも思はないし、又つけても何もならない。極めて原始的な生活をやるに必要なものだけ、それさへあれば、それで結構である。さうすると、我等は原始生活から見ると、要らない物を澤山並べて生きて居ることになる、これは、私は聞いた話であるが、京都の或禪寺の偉い坊さんが、驛から歸られるに、いつも歩いて歸られた。色々の商店の前に擧げられてある品物を見つつあるかれた。今では京都も昔風がなくなつて、商店の確

子窓にはいろ／＼な物が並べてある。その陳列の品物をその坊さんが見て歩かれる。それを見て、弟子の侍者は、『和尚さんはあれが欲しい、これが欲しいと思つて、見てあるかれるのだらう』と、自分の心で師匠の心を忖度した。『何か和尚さん欲しい物がございますか』と聞いた。ところが和尚の言はれるには、『私は別に欲しいものはないけれども、人間といふものは、如何にも澤山要らぬ物をほしがるものぢやな』といはれたといふことである。それはさういふ高德な和尚さんになると、さういふこともあらうと思ふ。我等のやうな貧乏人であると、また反對の意味で高僧的見地に立つことが出来る。ヨーロッパやアメリカのいろ／＼な繁華な町の真中を通ると、如何にも立派な寶石やキラ／＼した着物や道具類などが、いやほど並んで居るのを見る。どれを見ても買ふ力がないから、負惜しみにかう思ふ、『役にも立たない物が、如何にも澤山並んで居るな』と。その實は、『買ひたい物が澤山あるな』といった方が、わかるのである。しかし、或る角度から、即ち或る人生觀の立場から見ると、人間には如何に多くの要らぬものを持たなければならぬものだと

いふことになるのである。宗教の文化否定性は此處に在るのだ。

今日文明開化の人々がなくてはならぬと云ふやうなものは、原始生活をして居るものには何も要らない。赤裸裸の生活には何も要らぬ。坊さんは一衣一鉢といふことを申しますが、樹下石上の生活をやつて行くには一衣一鉢でいいことになる。宗教生活にも原始生活の面影を宿したところがある。原始生活に教へられる所は、必要以外のものは絶対に何も要らないといふこと、さうしてお互に協同融通して、私を忘れるといふやうな所である。文明人が原始人に學ばなければならぬように思はれるのは、その生活の上に、實にやたらに無駄なものを積み重ねて、その下で喘ぎ喘ぎ生きて行かぬようにすることである。今一遍今日の生活を原始に還元して見るといふことである。さういふことが出来る、今日かうして居ると云ふことの本當の意味がわかると思ふ。即ちエスキモー人の所などへ行つて見ると、何が本當の生活かと云ふことが分るのであります。原始人の野蠻性、残忍性は別として、赤裸の生活にはどんな意味があるかと云ふことが、わかるだらうと思ふ。

これは百年かほど前の話であります、アメリカの東の方にソローといふ人がありまして、丁度その頃東洋思想がヨーロッパを通じてアメリカへ流れ込んで行つた時代です。このソローといふ人は、東洋思想の影響を受けて、文化生活の反逆者となりました。彼は全く原始生活を自分でやつて見ようと考へたのである。彼は天然の木を伐つてそれで小屋を作つて、その中に机を一つと寢臺を一つ、椅子を一つ置いて、そこで生活をやつたのである。その人の友達が、それはあんまりひどいと云つてそこへ一つの小さな敷物を持つて来てやらうとした。ところがソローの言ふには、そんな敷物を一つ使ひ始めると、その次には、あれも欲しい、これも欲しいといふことになつて、それから自分の考が崩れ出すからそれは御免だ、さつさと持つて返つてくれといつて、受取らなかつたといふことであるが、こんな原始生活を始めた頃には、彼は人間世界を離れて、とに角こんな森の中へ来て居ると、何だか淋しいやうな氣が一寸したと云ふことである。ところが或る日のこと、靜かに雨が降つてその小さな天然の木で作つた丸太の小屋の軒から滴る雨だれの音を聞いて居つ

たときに、ふと悟つた。こんな原始的生活にも一種の趣きはあるものである。それ以來、人間の世界に對して、さう戀しいと思はなくなつた。文明生活と絶縁とまで行かなくても、まあこれでいいといふ氣になつた。こんなことが彼の森の中と云ふ本の中に書いてある。彼はまた非常な文學的才能を持つて居つて、その人の書いた日記は今も持てはやされて居る。森の中のごときは、今日でもアメリカ人に非常に好かれて讀まれる、年年新版が出来る次第である。その人の書き出した動物の生活、鳥の生活といふやうなものを見ると、鳥なり動物なりの生きた生活態を書いて居るので、鳥も動物も活動して居る、唯鳥を寫生するのではなくて、鳥と自分とが一つになつて、さうして自分が鳥の中に生きて居る。かういふやうな話がある、日本の畫家が米國のある大學へ頼まれて行つて、いろ／＼動物の寫生をして、さうして標本の繪解をやつたと云ふことであるが、その人を頼んだ大學の先生の話に、日本の人が花鳥や動物の繪を書くときは、西洋の人が書くのと違つて、鳥なり木が生きて居ると言つたといふことを聞いたことがあります。こんな一寸したやうな話でも、

東洋の我等は寧ろ自然そのものの中に生きて居る、それと一緒に生きて行くといふやうなことが云はれ得るのである。

所謂文化といふものが進むと、自然といふものからだん／＼遠ざかつて行く。さうすると嘘といふものがそこへ矢鱈に入つて來る。さうすると、ありのまゝにものを見ないで、それをまげて見るといふやうなことになる。これが今日、このエスキモーの生活を書いた人の本が頻りに讀まれるといふことになる一つの有力な原因だと、わしは思ふ。人間は今日我等が送つて居るやうな生活を離れて、どうかして一遍は元の原始性に歸りたいといふ心持をもつて居るものである。その原始へ歸りたいといふのは、さきに御話したやうな、お互に生物を殺し合ふと云ふ残忍な生活を、もう一遍、こゝへ活動寫眞などのやうに、自分の生活そのものの上に寫し出すといふ意味ではない。こんな物質的・生物學的生活に一遍歸つて見て、味はつて見て、それを今日の生活と比較して見るといふのではない。原始生活の純粹性・素朴性・眞實性を再經驗することによりて、今日人間が何れも惱んで居る虚偽から脱がれよ

うと云ふのである。今日の虚偽性はかうでもせぬと、その身に實感出來ぬのである。

人間と自然

そこで、それはどういふ意味かといふと、話を少し變へなければならぬが、元來人間といふのは、この自然に對しての反逆兒なのである。自然に對して謀反を起して來たものなのである。原始生活、或は自然のままの生活と云ふことになる、それは誠に自然のままであるから、オットセイの血だらけなのを口でひきちぎつて、骨ごと食べる、さうしてお腹が一ぱいになつたら、ごろりと寝てしまふといふやうなことが、自然であるとする、それが今日の我等のやうな生活までになるには、幾つかの段階を経て來なくてはならぬ、而してその段階の第一歩と云ふのは、まづ自然的生活に對して反逆を起すことである。その反逆といふのは、どういふ形で現れて來たかといふと、それは反省意識といふものである。それが人間に出來て來たといふところに反逆の原理がある。人間が自然に對しての反逆兒であると云ふ原理

は、人間に意識といふものが出て來た所に成り立つのである。意識といふものが出て來たために、人間世界には今までになかつたものが次から次へと簇り起つて來た。而して人間は憂鬱にならざるを得なくなつた。

そんなら人間の意識といふものは、どういふものかといふと、それは自分と云ふものを考へることなのである。『自分』が環境から離れ出るのである。何かものを向ふへ置いて、それから自分が離れて、そのものを見るといふことになる、このとき反省意識が成就する。つまり、原始生活といふと、それは自然のまま、一元的生活をやつて居るのである。それであるから、集團生活の生物學的・物質的・經濟的能率を削ぐやうな事情が起れば、親を氷雪の上へ放出して凍死させて、何でもないとはいふやうなことになつて來る、反省のない世界では、どこでも此通りである。それが二つに分かれると、向ふへ行くものと、こちらへ引き下るものが出來て、生活は二元になる。今までは一元的生活をやつたのが、此處で二つに分裂する。此分裂は思索を意味する、而して思索がたび可能になつてくると、今まで何の事なく、や

るべき事としてやつて来たことが、さうやれなくなる。人間の心は批評的になつてくる。そこで人間の幸・不幸といふものが出て来る。論理的に言ふと、矛盾といふものが出来た譯である。さうしてその矛盾から今日の世界のやうにいろ／＼なものが展開して来る。これが好いやうな、悪いやうなものなのです。

今まで向ふ見ずに走つて行つたものが、一寸踏止つて自分の姿を見ると云ふことは、何でもないやうだが、その實、人間の生活の上に此ほどの一大轉變は起つたことではないのである。エスキモーの場合を考へて見る。彼等はオットセイを捕るとき、一定の姿勢で——今日の禪宗の坊さんの三昧生活に入るときのやうに、ぢつと心を一處に集中して、一元の生活に入つて居る。それを三日三晩も持續すると云ふことは、今日の我等から見れば大變の勞力である。それで一匹の毛物を捕へたと云つても、どうもそれだけの値打がないやうだ。そんなことをしなければ、生きて行かぬと云へば、止むを得ぬでもあらうが、どうもくだらない、即ち勞と報ひとが相償はぬと云ふことに考へられよう。何とかもつと樂に澤山とる方法がないかなど云ふ

考が出て、生活が反省的に二元的になつてくると、今までの單純な生活といふものが破れてしまふ、もはや純一でなくなつてしまふ。一つが二つになれば屹度それから三つ四つとなつて、今までの原始的な集團生活といふものが一變しなければならなくなる。『自分は何をやつて居る』、『それは何のためか』、『一體どうなるのだ』と云つて、反省的・二元的意識が出れば、人間はまたもとの人間でなくなつてしまふ。さうしてこれから、人間書を讀むは憂の本と云ふことにならざるを得ぬのである。

それで我等の今日の世界は、二つに分れた世界であつて、それが、それからそれへと、種種雜多な方面に分れて、これがためにいろ／＼なことが出来て来る。我等はさういふ複雑な生活、どつちを見ても突當つてばかり居るやうな生活をして居つて、それでどうも何だか不自由で、壓迫感に惱まされ、束縛せられるやうな感じばかりをもつてしまふ。これでは寛やかな、落付いた、本當の安心と云ふものが出て來ぬ。どうしてもこの二元的生活の圈内を飛び出したいといふ心持が、何かのきつ

かけに、ひよつと湧き出る。それで此佛人はエスキモーの中へ行つて生活して見ようといふやうな心持になつたものと思ふ。

今日でも我等の仲間で、さういふ赤裸裸な生活をやつて見たくなるといふ簡単な例を申しますと、酒を飲むといふことである。酒を何故飲むかといふと、我等が原始生活に戻りたい、一元的生活へ戻りたいといふ要求が無意識の間に働いて居るからである。無意識だから、意識はせぬが、その表面に出て来たところでは、酒を飲みたいといふことになるのである。酒は束縛感を麻痺させて、一時幻惑的に飲み手に自由感を與へるのである。

それはどうかといふと、幻惑的でも何でも、酒を飲んで酔拂ふと、今日の文明人が持つて居る壓迫感から逃れて、ちよつと天地を狭しとする氣になる。即ち一元の生活へ幾分なりとも近附いたやうな心持になつて、壓迫感が飛んでしまふ。酔ふと云ふのは、壓迫の自覺がない、二元的生活が解消したと云ふ意味である。

二元と一元

二元では、あちらに物があつて、こちらを制するといふことになつて、人間社會では、社會の制裁と云ふことである、お互に制し合ひきしり合ひ、突き當るといふことである。一番最初には一元で動いて居つたのが、こんなに二元になつて制し合ふことになる、窮屈で仕様がな。本當に一元的生活に還りたいとのあこがれが意識下に動く。二元に別れて居ると始終一元が戀しいものであるが。一たび一元の故郷を出てしまつたのであるから、即ち時間と云ふものの波に乗り出したのであるから、どうしても元へは戻れないのである。一たび自然に對して反逆を起して、意識といふものが出て來ることになつたとすると、これは取り消しの出來ぬ事實であつて、原始に一元の生活があつたといふ事實と同じやうに、今日の二元的生活——二元に分れて種種雑多な生活をするといふことは、又當面の事實、已むを得ないものとして受け入れなければならぬ。今日の二元の生活を、昔日一元に歸して見せる

といふことは、それは出来ないことである。二元の生活をくりながら、元の一元を忘れないやうに、即ち二元の中に一元を生かして行くと云ふ生き方より外に今日我等に許された仕事はないのであると思ふ。酒に限らず、筋肉の律動的運動とか、集團的統制意識と云ふものは、原始一元の生活様式を一時的に表面的に再現せしめる効用をもつのである。併しそれは何處までも、一時的で上走りの^{うはつぱし}で幻想的であるに過ぎないことは打消されぬ事實である。

人間の二元的社會的生活とはどんなもの、それから心理的にいつも壓迫感を持つて居て、思ふ通りに物事が運ばぬと云ふは、どんなことかと云ふ卑近な例を申します。何れも經驗する所であるが、わしらは誰か人が見て居ると思ふと、何とか様子を作る、身體にしなを作る、もう自分が自分でなくなる、これが壓迫である。この點では動物などは餘程人間と違ふ。鼠が出ると猫は飛びつく、何の猶豫もない、人が見て居ようが、居なからうが、そんなことには頓着しない。善いも悪いもあつたものでない。本能的即ち一元的に動く。一直線にやつてしまふ。人間にはそんな事

は出来ぬ。あつち見たりこつち見たり、一狐疑して又一狐疑すである。ところが酒を飲むと、今まで止めて居た神経の中樞がしびれてしまふ、今まで壓迫が加へられたとか、しらふではやり悪いなど云つて居たことが、破壊せられるといふことになつてくる。こんな鹽梅で、吾等は時々大雨でも降つて天地がひっくり返れば面白いなどといふ氣のすることがある。世間が昨今のやうな具合になつてくると、どこかへ爆弾でも落ちたら、どんなかしらんなどと思ふことさへある。經驗して見ないと分らないけれども、さういふやうな病的とも云ふべき、心理的變態が感じられることがあるのです。これには矢張り元の一元性に還りたいといふ意味が含まれて居ると見てよいと思ふ。一切の世界のものを破壊して見たいといふやうな氣持は、變態心理ではあるが、そこには何やら自由になりたい、解脱したいと云ふやうなものが、潜在で居るやうに思はれる。

今日のやうに機械文明が進んで來ると、人間は機械で縛られてしまつて、手も足も動かぬといふことになる、人間自身が機械の一部になつてしまふ。人間は勞力を

省き、時間を節約するため、いろ／＼な機械を拵へたのであるが、機械は人間の思ふやうには動かなくなつてしまつた。大量生産といふことは成程便利で結構なことだが、これがために金持と貧乏人とは實際の生活において大なる懸隔を生ずるやうになつた。機械が出来ると、いらぬものが澤山出来る、それを何とか賣捌かなければならぬ、それを捨てて置く譯に行かない、捨てて置くと資本が損になる、どうかして賣らなければならぬ、賣る先を擴げにやならぬ。いやだ、といふ所へ『貴様買へ、買はなければ殺す』——とまで言はないにしても、大分無理をしても賣付けようとする。今日の戦さは皆そこから出る、何とか言つて居るが結局はさうです。

機械を拵へるといふことになる、それは科學が進歩したといふことになる、今日は科學がいろ／＼悪い意味に使はれて居る。併しそれは誰がやつたかといへば、實は私共がやつたのである、佛教の人はこれを業ごうだといふのである。昔は業といふものを個人の業とのみ解して居つた。我等が前世でいいことをしたから、この世で金持になつたとか何とか云つて、昔は業を個人的に解して居つたけれども、それで

はいけない。業といふものは、我等人間なら人間、生物なら生物、或は一切存在全分の業を、我等は全體として、一個人として、皆それを擔つて居るのである。この渾然たりし天地に、意識といふものが出て來た、而して一元が二元に分れた、而してその分れたところに、そこに業といふものが出て來ることになつた。今日我等が苦しむといふことは、我が前世で個人／＼に悪いことをしたから、その業報として皆個人的に苦しむといふのではない。前世に何か誤りがあつたとすれば、それは人間全體——世界全體がやつた誤りなのである。佛教で無明といふが、それは意識の始まりと云ふのと同じである。無始の過去に無明といふものがあつた、それで意識といふものが出た、それが業なのである。業には個人的なものはない。その業を私共／＼私と云ふ單人稱ではない——複数の私共が皆んなこれを受けて行かなければならぬ。今日のやうに戦さをして、お互に殺し合ふといふことは、如何なる歴史上政治上の理由又は事情によつても、それは矢張りお互の業である、何も個人個人といふものでなくて、世界全體、宇宙全體の業を、我等がそれ／＼擔つて居る。

これを基督教神學的に原罪と云つてもよい。とに角、これらはいふ業といふものを清算しなければならぬのである。それをどういふ風に清算するかといふことは一人／＼だけでやつたのでは駄目で、全體が全體として覺醒しなければいけないのである。宇宙全體が覺醒しなければならぬのである。もとの一元的生活に還らなければならぬ、而してこの還るといふのは、時間的に、機械的に、物理的に逆戻りする。と云ふ意味でなくて、精神的・靈的に成就せられねばならぬのである。靈的・精神的に成就するといふことは、我等自身が靈的であるといふこと、我等は物質的の存在ではない、また俗に云ふ『精神』的存在でもない。と云ふこと、物心以上に靈的なものがあること、その靈的なものを見つけると云ふことである。これを見付けることによりて、無始劫來の業の世界から浮ぶことが出来る。二元的生活といふものから出て來た、一つの呪ひといふものを、我等が今日受けて居るが、その呪ひから逃れることが出来る。その呪ひから逃がれるには、たゞ一人／＼が個人的に逃がれると云ふことだけではいけない、これは集團的でなくてはならぬ。さうしてその集團

と云ふは單なる人間の集團でなくて、動物も植物も、山河大地も悉く合せて、總ての存在が一團となつて靈的に自覺するといふことがなければならぬ。靈的自覺といふことがあるによつて、初めて無始劫來の業から逃がれることが出来る、かう思ふのである。

それを第三講に申し上げたいと思ひます。今日は一寸言ひすぎたのでありますが、今日の部分はさういふ所でなくて、原始生活といふことをお話しして、我等文明人が原始生活に還らうといふやうな動機の原因は、我等が當初にやつて居た一元的生活から今日は大いに／＼離れて來たと云ふ事實に在るのである。その一元的生活と云ふのは、どんなものかと云ふに、それは原始の生活を見ると、はつきり分るところがあるのである。併したゞ見てはいけない。物質的・生物學的にのみ見てはいけない。靈的と云ふものが要る。よく世間で自然が呼ぶとか、山や海が呼ぶとか申しますが、そんな聲の出處、そんな聲の聞處は何處に在るか。と云ふと、それは何れも人間の靈性的主體のところには在るのです。それはさうとして、エスキモーの生

活を書いた人が、エスキモーの生活を實地に何箇月かやつて来て、さて最後に別れを告げるとき、山の上から北方を顧みて、自分が今まで過して来たエスキモーの原始的生活を考へ直して見た。さうすると、どうも今更『文明』の世界へ飛び込む氣力がないやうに感じた、何だか後髪をひかれるやうな氣がして仕様がなかつたと云ふことである。所謂原始的生活なるものは、今日の我等から見ると、如何にも汚ない生活でもあるし、いやらしいと思はれる生活でもあるけれども、赤裸裸で、天真爛漫で、子供が着物をぬいで真裸でそこら邊りを轉がりまわるといふやうな心持が、原始生活の中に味はへるのである。汚ない生活に氣を腐らせるよりも、天真獨露のところを心に心を惹かれる方が強いのである。それを一遍味はつて來ると、幾枚もの着物を着て、押付けられたやうな生活をしたり、あつちで叩かれ、こつちで叩かれて、無礙の生活が出来ぬとなると、如何にも情ない氣がする。といふことを著者は書いて居るが、如何にも尤で、我等もその心持を十分に解し得るのである。ところで、此人の結論は、自分は原始的生活をすべきでない、自分の使命は矢張り文明

世界へ戻つて、佛蘭西國の一人として暮すところにあるのだといふことであつた。

我等の今日は、一元から二元へ出てしまつて、自然に對する謀反人と成り了つたと云つてよい。それでそれから出た矛盾の世界は、今や彌が上に複雑怪奇を極めた人間の世界になつた。原始の世界では、自分といふものと他人といふものがなくて、たゞ一つの集團人といふやうなものがあつた。さうしてそれも自覺せられずに居た。集團人は、蟻群か蜂群のやうに、それ／＼手分けをして、働いて居た。それであるから、彼等の生活といふものには分裂がなかつた。分裂がないといふことは差別がないといふことである。ところが、今日差別の世界に入つて來てからは、集團人はなくなつた。差別は更に差別を呼ぶことになつた。今までの一つの世界では、一つの人間であり、一つの自然であつたのが、今日では、自然といふものも一つでなくなり、人間も千差萬別になつて、個個の世界で盛んに飛び廻ることになつた。一人一人になつた人間は、もはや一つの人間でなくなつて、皆それ／＼ちり／＼ばらばらの世界を持つて居り、その心の向く所に従つて、いろ／＼な生活様式をもつた。

である。

それ故、一つのものが一つのものと見られなくなつた。諸君及び自分の目の前の柱は、四角と見られるが、それでもそれを三角と見る人もあり、或はまるいと見る者もないとは限らぬ。或は今ここを通つても、ここにそんな柱があつたと云ふことに氣の付かぬ場合もいくらもある。この鎌倉から東京へ行くのには、程ヶ谷の隧道を通るのであるが、ひよつとすると隧道に氣の付かぬことがある。横濱か程ヶ谷についてから、成程それを通つたのだなと云ふことが時々ある。そんな時にはその隧道は、私にとつての存在でなかつたといふことも出来る。さうすると、現實の隧道も或る意味での現實性を失ふといふことになる、或る世界は私にはないと言へる譯である。それと同じやうに、この柱を今氣をつけて見れば四角と見て居るが、何の氣なしに、ここを通つた者があるとすると、後から考へて見て、あの柱はどんな風に四角だつたか、或は丸柱だつたか、或は三角でさへもあつたかなと思ふこともいくらかもある。さういふ世界があるのである。これを嘘の世界、幻想の世界と云へぬ

こともないが、幻想の世界と云ふものと、我等がいつも現實と云つて居る世界と、一體どう云ふところで違ふのであるか。その人にとりて見ると、所謂幻想の世界は現實の世界なのである。一方では、君の世界は嘘の世界であると云へるが、さういふて居る人の方が、また一方から見ると、嘘の世界であるかも知れない。莊子が夢に胡蝶となつて、フワリ／＼と花の上を飛んで歩いて暮して居つた。自分が蝶であるのか、莊子自分であるのか、どうか、分らぬのである。また『夢』の莊子が本當の莊子か、『現』の莊子が嘘の存在か、どつちがより多くの『現實性』を持つて居るのか。夢に夢見ると云ふこともあつて、或る角度からすると、此問題は必ずしも閑問題ではないのである。面白いところもないとは云へぬ。今日我等がかうして居るとかう思つて居るけれども、それ程非現實性を持つたものはないかも知れぬ。本當に現實性をもつたものは、さう思つて居るものを、もう一つ突貫けたところにあるのではなからうか。自分にはさう思はれてならないのである。これは改めて申上げたいと思ひます。

さういふ譯で、何が現實であり、何が非現實であるかといふことは、これはお互に議論をして分るものではない。この今我等に面して居ると考へられる世界は、もともと一元であるが、それが意識の發生で、二元の世界に分れて、それから次へ次へと、千差萬別の世界になつたから、お互に私の方が現實だ、お前の方が非現實だといつて暮すやうになつて、自分の生きて居る世界だけが一眞實の世界のやうに思はれるやうになつた。さういふわしの方が非現實だ、非眞實だと言はれるお方があるかも知れない。それにはまた已むを得ぬところがあると思ふ。

とに角、上述のやうな鹽梅で、まづこの非現實の世界、この矛盾の世界、この二元の世界と考へらるべきところに居る我等は、何時もこれと絶縁して、もとの一元の世界に還りたい、一直線の生活を送りたい、赤裸裸の生活を體驗して見たい、一眞實の世界に生活して見たいといふ要求を感じて居るといふことは、事實なのである。おの／＼がそれ／＼の世界を持つてゐながら、いろ／＼のものに縛られながら、

お互に制し合ひながら、然も一路貫通、無碍自在の道を行きたいといふ氣持は、何れにも慥かにあるのである。この無礙の世界を見ることによつて、今までの、二元性の世界や、原始生活の意味が出て来る。即ち今日の矛盾の世界、夢だと考へて居る世界、非現實だといつて居る世界、さういふ世界にもそれ／＼意味を持つことが出来る。さういふやうな意味を持たせる世界を、一つ掴みたいものである。その世界を掴むことによりて、すべてが更生するといふところのもの——そんなものは果してあるのだらうか。

自分はそんな世界はあると信ずる、それを私は『禪の世界』・『一眞實の世界』と、申上げておきます

第三回

渾一と分裂

今までのお話をおききになつたお方には、『大分世間離れをしたものだ』と、おつしやりますかも知れませんが、時々世間離れをしたことを、お聞きになるも悪くはあるまいと、自分勝手に思ふのであります。今日は戦いくさをやらなければならぬのですが、さういふことがあるに拘らず、何とか世間離れをしたことを聞きたいといふ氣がしよつちゆうあるものです。これは私だけかも知れないが、實際のところ、この世間離れのしたところに、本當の世間が成立して、そこから此世界が動いて行くのです。

越後に良寛和尚といふ人がありました。ああいふ人の一生を讀んで見ると、如何にも世間離れをして居る。世間離れをして居るから、何の役にも立たぬかと思ふが、さうでない、何となく自分等を引つける。昨日申上げたやうに、エスキモーを見て其人々の中に住んで來た人が、エスキモーを離れる時、何となく後ろ髪を引かれるやうな思ひがしたと云ふのを見ても、文化人の心の奥にも、此世間離れをして見た

いといふ氣があるのがわかる。何か原始的なもの、出世間的なものが我等を呼付けることがあるやうに思はれる。それは私共の心の中に二元的生活或は多元的生活、或は今日の世間的生活を離れて、一元へ還らうと云ふ願があるからである。さうしてこの『一』は二や三やなど數に對する一でなくて、或る意味でいへば、絶對的の一であると云つておきたい。或は一元と言はずに、無限といつても宜い、『無限』の世界に還りたい、丁度子供が皆母親に歸らうといふやうな心持を持つて居ると同じやうに、我等は『元』へ歸らうといふ心持が取れない。出世間のあこがれは此所から出て來るのだと、私は思ふ。

それで前回申上げたやうに、意識といふものが出て、自然に對して反逆を起した——反逆といふ言葉は一寸穩かならぬのでありますけれども、これを矛盾と言へば論理學の言葉になつて、社會的示唆の意味がなくなつて或は穩かであるかも知れぬ。それで、論理の上の矛盾といふことは何であるかと云ふに、それは一が二になり、それが相互に否定し合ふと云ふことである。今まで無意識で生活した世界に意識が

出て、そのために今までは渾然として一であつたものが、異分子の發生で相互牽制をやると云ふことである。鷹が鼠を取つても、白熊がオットセイを取つても、オットセイが魚を食べるにしても、人間が白狐を捕へるにしても、そこには唯生命の動きが、何らの自覺を伴はないで居るので、今日の人のやうな價值とか、批判とかをやらない。或は善惡とか、或は美醜とか、或は順逆とかいふやうな二元的世界の展開が見られぬ。年取つた親を捨ててしまふ、親の方でも捨てられて、捨てられるべきものだと思つて居る、或は何とも思はずに居ると云つた方が事實だらう。かういふやうなことに對して何らの批判を加へないといふ所に、渾然たる生命の全一的動きがあるものと云へるのである。

ところが、この生命の渾一性の上に分裂が生じて、一が二となつた。何等の狐疑なしに動いた生命の流に對して、一寸待つてくれ、一寸其歩みを止めよと云ふことになつた。生命と共に流れないで、脇の方へ離れて出て、さうしてそれを見ようといふことになる、今までの世界はどうしても歩調が亂れて混雜な世界にならざるを得ぬ。かう云ふと時間の考がここにはいるかも知れぬ。百年とか二百年とか、乃至千年・萬年・億年とか云ふ時間の關係を考へるかも知れぬ。併しその實は時間的ではいけないので、一が二になるのは、人間意識の世界に刻刻に生じて居ることなのである。一が一で居れない。一は自分を知らうとする。自分を知らうとすることが、一なのである。一が一となるべき所以を確かめようとするのが、『一』存在の本來の理由なので、其理由の故に一はどうしても二になる、二が一から出て來る。かうも云へる、一が一である限りは一でない、自らを分けることによつて始めて一となるのだと。つまり一は只二に分かれて行かうといふのでなくて、二に分れるといふことは、一に戻るといふことである。かういふ風に、一が二になる意味を解決しなければならぬと思ふ。之に反して、二と一との關係を單なる分裂・矛盾・衝突・相殺などとする癖が我等について來ると、佛教で云ふ無始の無明は本當の無明になつて、それから千差萬別の邪解・惑亂・煩惱が簇起して止むところを知らぬのである。

無始の無明といふと、知識の方面、認識・論理の方面での言葉になりませんが、それを我等の日常生活で普通に使ふ言葉でいふと、力といふことになるのです。一が二に分れる。これまでの相手のなかつたものに相手が出た。さうすると、かう分れたもの間に成立つ關係を、力と云ふもので見ようとするのが、我等の僻である。これを、また佛教の言葉で云ふと、人間の業ごうと云ふものである、さうしてこの業のために人間は無闇に悩むのである。此悩みのもととは、分れたものを力の關係で見ようとするによつて起つて來るのであると思ふ。こゝに、根本に誤つた考へがある。この誤つた考へも、或る意味では、已むを得ずして出て居るとも云へるが、誤りは誤りなのである。例へば、先に申上げたやうに、鷹が鼠を取る、狼が鹿を取るといふやうな、かういふ所を力の關係で見るのが誤りだと思ふのです。普通に見る時には、どうしても弱肉強食で、力の關係といふより外はないのだが、それが一眞實の世界から見ると、誤りなのです。二に分れた所だけに止まつて居ると、力と見るより外はないと云へるが、一が二に分れたのだ、その二は一に歸るべきだ、即ち

一が一たる所以を、自ら確かめようといふことで、二があるのだと見ると、二に分れて居るその二は、畢竟一の中に含まれて居るものと考ふべき二であると云ふことになる。二は二のまま残つて居て、相對峙して、御互は力で制し合ふべきだと考へてはならぬのである。

であるから、二に分れた意味は、二になつたそのまま永遠に二で行かうといふ意味でなくて、二に分れては居るが、それは一に歸るべき二で、そこに一が一になることによつて、一の本當の意味があり、また二が二としてあるといふ意味が始めてわかるのである。かういふ風に考へ直さなければならぬと、私は思ふのです。さうでないといふから出る争ひは止むときがないのであります。

力 と 愛

力の關係では、どうしても、強いものが弱いものを制するといふことにならなければならぬ。これが東洋の考へと西洋の考へとの相背馳する一面である。東洋の考

で西洋の考を直さなければならぬ。さうして西洋の考方で、東洋の考を、もつと實證的に、組織的に、論理的にしなければならぬと、私は考へて居る。

西洋の考が對峙と矛盾と相殺とに止まつて居るといふことは、これは元來ギリシヤの人が——西洋の文明はギリシヤ文明であります、一方又ユダヤ人の文明が入つて居る。キリスト教が入つて居るが、キリスト教の考へ方も、ギリシヤと同じで、二つの世界をどくどくまでも立てて行かうといふことになつて居る。そこで二つの世界に分れたところを基礎として、其上に論理を成り立たせ、それで此人事關係を律して行かうと云ふのが、西洋式の考となるのである。それで西洋人はものを個個に見て行かう、孤立的に見て行かうといふ考が、その生活——人生觀・世界觀の基礎になつて居る。科學の發達するのも、つまりさういふ所から發達して行くのである。科學といふものは、事と物とを各自に別のものと見るのが原則である。物がそれ／＼にその個體を維持して行くものと考へる所に、科學の可能性があると云へる。科學といふものは、つまり數字で出來上る。一は一、二は二と定めた數量を本とし

て居る。即ち數字といふものは、一一に分けて行かなければならぬものである。一が集まつて二になり、三になり、四になる。それがずつと何處まで行くか知らぬが、行く所まで行く、無限に進んで行くのである。世間が——人事すらも、數量の關係で解せられて行く。一が二に分れたといふ所から、二にのみ目がつけられて行くといふことになる。二が一に戻らなければならぬが、數量の世界になると、二は何時までも二で、そのままで行けるものと考へられる。二がどういふ風に一にならなければならぬかと云ふことは、科學の世界では考へなくてよいのである。一が二になれば、それから益々分れて三・四・五といふやうに、無限に數量的に割られて行かなければならぬ。即ち物が孤立的に分れて行けば、孤立の世界より外の世界がなくなるわけである。二元的論理の世界が生命の基礎を成して居るといふやうに考へられてくるのである。

ところが、西洋でも、ギリシヤにしても、ユダヤにしても、何か矢張り元に戻りたいといふ考は取れないやうである、さういふ感じは取れないやうである。それで

原始生活などをやつて見たいといふものが出て来る事にもなるのである。原始的生活をやりたいたと云ふ動機の底には、一眞實を望む心が慥かに潜在して居ると、私は思ふ。それから論理の上や哲學の上に於いても、西洋人は何とかして、その一の生活を、一の論理を樹てようとして居るけれども、その西洋の論理で見るところの一といふものは、何時も二といふものを基礎にした一たる事を免かれぬのである。それであるから、その一といふものは、二を包む事がどうしても出来ない。二の方から一を包まうとすると、どうしてもその二がまた一に對するものとなつて、依然として二になつてしまふ。さういふやうな關係が、西洋の論理の樹て方にあるやうだ。

それが東洋の方では、一の方から二を見るといふことになる。一の方から二を見るといふことは、どういふ意味かといふと、力といふことを主にしないで、愛といふことを主にするといふことになる。愛といふ言葉は、西洋のキリスト教の方から言葉でありますけれども、我等は今日その愛といふ言葉を使つて居るが、元は佛教の方で言ふ慈悲に相應するものなのである。佛教の方の慈悲といふ言葉と愛とい

ふ言葉は、幾らか違つたやうに取れますけれども、その本來の意味を考へて見ると、同じことなのである。唯東洋の方では、愛といふ言葉の意味が充分に諒解せられてゐなかつたために、愛といふものが大悲とか慈悲といふことと違ふやうに考へられて來たのです。

西洋の方で愛といふ、その愛は、一が二つに分れた、その二つの間の愛といふ意味に餘程考へられて居る。それで幾ら愛というても二元的なものが取れない。西洋人の愛といふ言葉は、よく人の申すやうに、エロスといふのとアガペといふのに、分けられて居る。エロスの方は普通に言ふところの愛で、二つの間の愛といふことになる。アガペといふのは二つを離れたところに出る愛である。即ち佛教で云ふ無縁の慈悲、無功用の用といふ意味に外ならぬのである。彼等は神が人間を愛するのは、エロスでなくてアガペであるといひます。併しよく考へると、そのアガペなるものは、東洋の人間が考へ始めたところの大^{マヘ「カルナ」}悲——佛教の方で大きな智慧と大きな慈悲といふことを申しますその大悲に大體相當するやうで、而かもまだ到らぬと

ころがあるやうに考へられる。この佛教の方の大悲といふことは、絶對一を主にしたところから出るところのものなのである。大悲は絶對一の自愛であると云つてもよい。西洋人のアガペでは、どうも二を離れて居ない。アガペの愛には二元的殘滓があるやに感ぜられる。神が人間を愛するといふとき、その愛なるものは、神と人間といふものを二つに分けて置いて、その間に出る神よりの愛を意味するものやうである。西洋の論理——西洋人の考へ方がいつも二元的であるから、愛を云ふときでも、その臭みがとれない氣がする。

それで、人間が神に對するときには、人間の持つて居る世界の業、世界の罪を拂ひ淨めて、さうして始めて神によつて助けられると、かういふことに考へられて居る。ところが、東洋の方はさうでなくて、その持つて居る業といふものは、永遠に取れないのである。例へば各種の生物的本能の如き、二元的思索から出る惡業といふ如きものは、人間としては取りのけられぬが、佛教ではそれらをそのままにして、絶對一の中へ飛び込めと教へる。さうしてかういふ風に飛び込むことによつて、そ

こに始めて本當の大悲の働きが感ぜられるといふのである。それで佛教には西洋的宗教的なるものと大に質的相違のある何かが儼存すると云ふことになる。これをはつきり意識してかからぬと、東洋の精神生活といふか、靈的生活と云ふか、そんなもの土臺が何處にあるか、わからなくなる。西洋人の考へ方にはどこまでも二元的なものがある、それも大に結構であり、吾等もそれを學ぶべきところもあるが、とに角、東洋的考へ或は感ぜを、まづはつきり見ておくのが大事であらう。

それをはつきりしておく——即ち、一が二に分れたといふのは、どんな意味であるかと云ふことをはつきり意識しておく、そこに今までにない一つの働きの出て来る。此働きは一元の世界に特有のものなのである。二つに分れた、幾つかに分れたと云ふのは、愈々物を混雜させようといふのではないのである。一から二が出て、その二を一に還さんとして又々二と一とを對峙させて窮まりなからんとするのではなく、一から出る二と、その二ともとの一との關係をはつきり意識して行かうといふのである。二が出たと云ふのは、一が愈々一にならんがために出たのだとい

ふことに氣付かなければならないのです。これが最も肝心な所であると思ふ。

大智・大悲

一をこんな工合に意味づけることを愛と云つてもよい。宗教的に言つて愛と見てよろしい。けれども、佛教の方では、單にこれを愛と言はずに、智といふものを説くのである。大智と大悲といふものを佛教でたてる、ここが西洋の考へ方に比して一段を抜いて居る所であると思ふ。大智といふことでないと、愛、アガベといふことの意識が明瞭にならぬと思ふ。アガベは大智から出るのである。大悲はただの悲でなく絶對悲である、絶對悲は絶對智である。そこで二元といふものが取れる。基督教のアガベでは二元が取れないやうだ。基督教ではアガベに對境がくつついて廻る如く感ずる、本當に絶對の一といふものが出て來ないやうだ。佛教の一は二に對しての一でなくて、絶對的全體の一であると、かう見たいのである、而してその一といふものを體得するのが大智である。一が二に分れる前に、一の中に在るところの

もの、これが智であるが、その智にはまだ働きが見えぬ。一が二に分れる所に、智の働きが出る、それと同時にそこに悲の働きが出る。悲は智の働き、智は悲の主體だと、かういふ具合に、智と悲とを見るところに東洋的考へ方があると思ふ。さうしてこれが東洋的考へ方の優れた所であると、わしは云ひたいのである。

ここに注意しなければならぬことは、話が抽象になります、佛教の方で體といふ字とそれから用——佛教の人は用もちと言ふが——といふことを分ける、その體といふ概念に只今の「大智」といふ智を當てる。絶對的一に當ても宜い。用といふ方は、一が二に分れて、意識が出て來るところ、無始の無明が動くところ、これを「用」といふ。けれどもその體といふものの外に用があるのでない。用の外に體がある譯でない。用が即ち體で、體が即ち用なのである。働くといふことは働くといふものが別にあるものでない。働きそのものが働くものである。働くものが即ち働きそのものである。それはこの二元の世界に止まつて居る以上は、充分に了解し得られないと思ひますが、それを了解させるのが、宗教と申すか、佛教と申すか、禪と申すか、

さういふものの仕事であると、自分は考へて居る。

かういふことを話して居りますと、即ち一から二が出るとか、意識のない所から意識が出るとか、或は生命といふものが、或る意味で、本能的に働いて居つたものが、今度はさうでなくて反省的に働くとか、さういふやうな話をする時、何かそこに時間といふものが出て來ると考へられる。ところが、今佛教と申しても宜いし、禪と申しても宜い、東洋風の考へ方と申しても宜しいが、その何れにしても、かういふ話をする時時間といふ考へをそこに入れないのである。一から二が出るといふやうなときには、何か天から雨が降つて大地に落ちた、天を出たときが第一秒で、地面に着いたときが第二秒第三秒であつたといふやうに、時間といふものをそこに考へるが、それは我等が一が二に分れたと云ふ所から見ることである。即ちここに數字の觀念を入れる、これは言ふまでもなく、時間といふ意味になる。繼續といふか、連續といふやうなことを、考へるのであるけれども、今言ふ東洋の考へ方といふのは、二と云ふところに居て、一を見るのではなく、また一に居つて二を見るので

なくして、一が即ち二、二が即ち一、一が即ち一切、一切が即ち一であると云ふところに坐つて居て、今のやうな話を進めて行くのである。こんな見方が東洋的考への底に在るのである。

その見方といふものを、宗教的に言ひ現はすと、智が、悲即ち愛といふものを包むといふことになる。それは無限で無礙の慈悲となつて働く。無限の慈悲とは相手のない慈悲である。向ふにものを置いて、それと相對して、それを包むといふのではない。そこには包むものがないのである。包まれるものもないのである。包むといふことになる時、物が中に在ると云ふことになる。中に在るものとその外に在るものと云ふことになれば、その間に力の關係を考へたくなる。この力の考へが一寸でもはいつてくると、今日のやうに人々争ふことになる。世界は永遠の争の巷とならざるを得ないのである。

今日一番悪いことは、どうも日本では昔は言はなかつたのであるが、此の頃征服といふことを矢鱈に言うて居る。山を征服するとか、飛行機で空中を征服するとか、

何を征服するとか、かを征服するとか云つて、矢鱈に征服といふ言葉を使ふ。自分等は東洋的といふことを言ふが、征服といふ言葉程非東洋的のものはない、これは全く西洋から輸入された言葉である。近頃個人主義がいけないと言ふが、その個人主義と最も関係をもつて居るのが征服といふ言葉である。征服といふことは一つのものと他のものが對して、その間に力の関係を見るから出るところの觀念である。もしこの間に、力の関係を見ないで、こつちがあつちを包む、又反對にあちらがこちらを包むといふことにして、力の代りに愛の心を生かすことにすると、征服の觀念は消えて行く。お互に包まれて生きて行くと云ふことになる。太陽と大風とが競争して旅人の外套を脱がせたと云ふインソップ物語は面白い寓話である。

大悲の光に攝取せられる、——阿彌陀の光に一切のものが攝取せられると、いふことには深長な意味がある。征服と言はないで攝取といふ、それが最もいい表現であると思ふ。

それで攝取とは何を云ふか、征服とはどんな意味になるかを明かに見得するには、科學といふものの成り立つ基礎を調べて見なくてはならぬ。近代人の科學觀には大なる根本的誤りがあると、自分は信ずる。元來科學といふものは二元の世界を基としてその上に建てられたものである。既に世界二元觀に基礎を置いて居るからには、そこに科學の限界があることを忘れてはならぬ。向ふに物を置いて、それをこちらから眺める、こちらからつづく、叩くと云ふことにすれば、いつも自分と自分ならざるものとの對立の世界を離れられぬ。科學の考はいづれも此對立から出るのである。

近頃は電子の破壊と云ふことが出來て、その破壊から出る動力の甚大なることは言語に絶すると云ふことである。まだ實用と云ふことにはならぬときくが、愈々そんなことになる、利益も害毒も非常なものであらう。力の觀念のとれぬ限りは、破壊と征服と侵略と壓迫と害毒と云ふやうなことは、必然に出て來る。さうでなくて、そのものの中へ入つて行く、そのものになつて自らが分析せられる、そのものと自分とが一つになる、原子又は電子を破壊するのでなくて、自分が二つに分れて

行く、原子と自分と一つの行動をする、向ふだけが分れて、自分は分れないと云ふことでなく、向ふが分れるのは、こちらが分れるのだといふやうな考が全體的に動かなくてはならぬと、さう思ふのである。

とにかく、向ふの中にこちらの全身を打込む、全身を打込むと、向ふが持つて居ると思はれた秘密が、自分に知られることが出来る。向ふの秘密をひたたくつて、行かうといふ考へを持つて居るところに、今日の科學の根本的誤謬がある。そんな征服慾、奪取的觀念に我々が止まつて居る限りは、力の争ひはどうしても止まない。さうでなくて、我々が向ふの中に飛び込む、それと一つになる。さうしてそれと共に分れるなら分れて行く、さうするとき、そのものが持つて居るところの秘密なら秘密が體得出来るのである。此時始めて今まで曇つて居つたと思ふものが、はっきりするやうになつて、一元觀的意識が明瞭になるのである。これをどうも近頃の科學者は——西洋の科學者は、かういふことに考へざるを得ないから、かういふことになつたのであるが、東洋でも、その眞似をしなければならぬ理由はない。科學

の外面的・實用的發達といふものに眩惑して、その根本概念に徹底しないとこんなことになるより外はないだらうが、それを東洋の我等がそのままに取入れて、西洋の科學者の顰に倣うて、必ず向ふのものを叩きつける、力で攻めとるといふやうなことばかりに、あせつて居ては、我等の祖先の考と相背馳することにならざるを得ぬ。一寸見た仕事の上では、西も東も同じかも知れぬが、しかしながら、其仕事を支持して行く全體の態度、根本の精神的氣構は、今までとはすつかり變つて行きたいものである。

この天地にかうやつて居る、この天地は私わしのものである、私が持つて居るといふやうな考は捨てなくてはならぬ。天地を本當に持つてゐるといふことは、天地と一つになるといふことである。まづ自分といふものがあつて、また天地といふものがあり、さうしてその天地を自分のものとして居るとの考へは、根本的に誤りである。自分がないと天地がないとか、それでもあるとか、何とか云ふ態度は二元的である。如何なる意味での二元的でも、此考へで科學をやるのは、ギリシヤやユダヤ

のやり方である。それが東洋人の科學者のやり方にも、ずつと入つて來て居る。どんな研究をやるにしても、根本的心構に二元的なものがあると、力の關係がはいつて來る、此關係で世界觀が出來ると、科學もうそになる、又その實績も危険千萬のものにならざるを得ぬ。西洋の科學を取り入れるにも、我等は本來先祖から持つて來たところの考へ方で、取入れるのが一番大事だと思ふ。西洋の誤りを東洋でも續けなければならぬ理由はないと信ずる。近頃のやうに、何だ彼だといつて、やれ西洋がどうか、ヨーロッパがどうか、アメリカがどうか、ドイツがどうかなどと言つて、一方では外國依存を止めると云つて、他方の實行では、依存・模倣是れ事として居る。いかにも馬鹿なことだが、どうしてそんなことになるのかと思はれてならぬ。分らぬものは仕方がないやうなものであるが、出來るならば、分らせたいものである。

西洋のものを取入れるといふことは、西洋の眞似をするといふことぢやない。今まで西洋の持つてゐたものを益々生かすといふことでなくてはならぬ、さう意識して來るといふと、今まで我等祖先が意識しないで持つて來たところのものを、今度ははつきり意識して使ふといふことになる。そこに我等の本當に人間としての働きが出て來ると思ふ。そこで始めて一つが二つに分れたと云ふ意味が、はつきり取れて來ると思ふ。

『神ながら』の意義

これも又近來よく言ふことでありますが、『神ながら』といふことを矢鱈に振りまはす人がある。頗る無闇なことだと思ふ。神とは何かと云ふことを、まづはつきり意味を付けなければならぬ。それから『神ながら』の語の中にどういふ歴史の意味が含まれて居るか。又それはどういふ方面——人間生活は多方面をもつてゐるが、その中のどの方面に、適正に應用せらるべきかなど云ふことが、はつきり意識せられなければならぬ。或人の云ふやうな『神ながら』であれば、所謂エスキモー人の『神ながら』と同じやうなものでもあり得る。そこには本當の一なるものが意識せ

られて居ない。意識が二つに分れることによつて、絶対の一がまた體認せられなければならぬが、そのない『神ながら』は、時には生物的・本能的『神ながら』にさへ轉落し得るのである。『神ながら』の一は一に止まつてはならぬ、二つに分れて出て來なければならぬ。二つにわかれて、また元の一が始めて明かにならねばいけない。ここに西洋の人のやつたことを活用する機會がある、さうしてそれによつてまた眞實を明にする所があるのである。何も西洋を盲滅法に排斥するには及ばない、大いに取つて以て藥籠中のものとしなければならぬ。但し取り方に於いて誤りがあると天地懸絶といふこともあり得る。何を云つても、何時も大事なものは、我等の根本的世界觀が正しくなければならぬことである。

この一の眞實の世界がいろ／＼な方面から見られるのであるが、しかし、その方面を一一お話するとなか／＼盡きないので、ここでは申されぬが、その一のことを取出してお話することにして置きます。私がこれだけ言つたからといつて、それだけに限つたことでなくて、他にも見ようはあるけれども、まあかういふ具合に考へ

て置くと、所謂る誤解も除かれようかと思ふのであります。

そこで、これをどういふ所から云ひ始めるかと申しますに、今我等の當面して居ると見られる世界はいろ／＼に分れて居ると云へる。かう只分れて居ると云ふ所から見ると、我等はいつも御互に争ひ合つて居るといふことになる。が、その分れて居るところのものは、どうしてさう分れるといふことになつたか、分裂の事實を可能ならしめたものは何處にあるのか。こんなことを考へて見ると、どうもどこかに分れてゐないものがあつて、それが分れて居る世界を包んで居るのだと云ふことになる。前者が後者を包んで居て、而かもその中に動いて居ると、考へなくてはならぬ。さうしてこの一物——即ち一眞實の世界を見付けることによつて、その分れたところのものが分れたままで、各々その處を得ると云ふことになる。分れたところでは各々が相争ふやうに見えて居つても、今の考で行くと、力の關係で世界を見るといふことがなくなるので、相争ふやうにあつても、然もそれを包むところのものによりて攝取不捨の愛の光の中に動いて居るのだと云ふことになる。さうすると、

その分れたものが、各々その處を得るのである。分れたままで居て、而かもその上に包んだものを見る、のみならず、その包んだものが、上か外に在ると見えて、而して尙ほ分れたものの中に在るといふことになる、分れたものは、もはや力の關係で相争ふと云ふことでなくなる。一切を包んで居てまた一切の中に在ると云ふものを見ることは、一切のものがその一一の上に靈光を出して居て、それで一一のものとその全體を併せ包むといふことになる。此に偉大なる東洋の思想があると、私は思ひます。一一のものがそのまま、各々その光を放つて、さうしてその他のものを包み、一切のものを包み、またお互に包み合ふといふことになる、——これは今日の物理學では想像せられぬことであらう。又科學だけの世界では、どうしても説明も了解も出来ない事象なのです。光と云ふは單なる譬へにすぎませんが、ある宗教的立場からすると、さういふことが云はれるのです、否、實際さう見えるのです。

かう云ふ見方が可能であり、又事實であるとする、分れて居ると云ふ世界の中の一つを取つて見ても、その一つの中に、全體を包んで居るものが見える、そのものへ直ちに突通るといふことが出来る。一一のものが、各々その處を得るには、それらを併せて全體として、これを包んで居るところのものに、氣がつかなければならぬ。それに氣が付くことによつて、一一のものが、一一として、他の一一と同じく、一つに包まれて、その自らを全うする所以に、始めて徹底するのである。それであるから、その一なるものの上に立つて、その自然の働きによつて働けば、その働きは全部を包んで、やがて又一一に徹して居ると云ふことになるのである。また逆に一つ／＼の方から見ると、雨が降るなら、この雨といふものの一滴を通して、その何も彼もを包んで居る一に至ると云ふことが出来る。即ち私がこゝに一冊の本をこの机の上からとり上げることによつて、世界の全體は此本に即して持ち上げられると云ふことが出来る。それは『一』が一切であるからである。しかしながら、この『一』が別にあつて、全體を包むといふのではない。別にさういふものがあつて、大きな風呂敷のやうに、一つ／＼を包むといふ意味ではないのである。さきか

ら包むといふのは、包むものと包まれるものがあるときに云ふ意味の包むでなく、兩者共になくて而かも包むといふことのみがある、それである。これはどうしても矛盾した言葉を使はなければならぬので困るのだ。人間の思惟はさういふ風に制約せられて居るのである。

一 眞實の世界

これから、『禪の世界』、即ち一眞實の世界といふは、どんな意味かと云ふことを言ひ得ると思ふ。一一に離れ／＼の個個の世界と見られるその一つに居りながら、その離れて居る一一を包んで居て、而かも包むものがないといふ世界がある。こんな世界は自分の外にあるのでなくて、自分の内にある世界である。自分の中に收められてあると云つても、その自分を二元的に見てはならぬのである。この收められる方は、收めるものも收められるものもなく、而かも收めて居ると云ふことのある收め方である。もう一遍言ひ換れば、一つ／＼に見える個個の物は、その實個個で

なくて、唯『一』である、さうして此『一』は個個を離れてあるところの一でなくて、個個をそのままに一とするところのものであるとの意味である。これを見付ける所に於いて、禪の世界が成立し、發展して行くのである。身心脱落して一眞實の世界のみがあると云ふはこんな意味である。

かういふことを言ふと、何だか如何にも我等の現實の世界に關係のないやうに思ふのですが、こゝが妙である。關係がないのが嘘で、大いに／＼關係があるのである。我等は一が二つに分れたと云ふその二つといふものを土臺にして見て居るから、現實とか非現實とかいふことを言ふようになる。それで今言ふやうな意味も直ぐに二つの相對して居ると見る世界の上に翻譯せられて行つたのである。現實であるとか、現實でないとか云ふ考は、皆畢竟じて此翻譯から出るのである。それで今言ふやうに、一が多で、多が一であるといふことは、單なる物理的・空間的に見るのではない。甲が乙を包んで居るといふ意味で見ると、上來の所述は無意味になる。一が多であり、然も一でもない、多でもないと云ふやうな所は、腰を据ゑようと思つ

ても据ゑることの出来ないところである。併しさういふ所を、どうしても一遍は擱まなくてはならぬ。さうすると大いに腰が坐ることが出来るのであります。またその『一』の光が大いに出て来るところが分るのであります。現實だの、非現實だのといふことが問題にならなくなる。

それで禪宗の本を讀みますと、中にいろ／＼なことが書いてある。そんなことに注意せぬ人から見ると、まことに無意味至極とも考へられる。一寸足を上げてても天地がひつくり返るとか、この手の中に宇宙がゴロ／＼轉がつて居るとか云つたりするのである。さういふ場合に、禪坊さんといふものは矢鱈にホラをふくものであると思はれる。或る點では禪坊さんのホラをふくことは慥かであるが、いつもさうではない。或る場合では、さういふ具合に云ひ現はした方がよくわかると云つて宜いことがある。さういふ所からも物を見ると、無數に分れて行く人人の世界、人人それ／＼に持つて居る世界、同じ世界に誰も住んでゐないと思はれる世界、誠に何れも同じでない世界が、それ／＼に纏まつて行くのである。これを『和』の世界と云

ひませう。聖徳太子の言はれるやうに、『和を以て貴しとなす』と云ふ、この和はまづや、はらぎと讀むべきである。や、はらぎといふは、愛といふこと、大智大悲の世界、何でも物を無限に包んで行くといふ世界であります。『和』といふことは、個個に同じくない世界に居て、それがそれ／＼に集まつて、しかし各々の働きが相互に調和して行くこと、恰も天の星が衝突しないで運行するやうなのが、和といふものである。さういふ世界が、一眞實の世界であると云つて宜い。和の世界はやわらぎの世界である、さうして又一眞實の世界である。それを此では禪の世界と云つておくのである。

これは、ここの圓覺寺のものと管長さんに釋宗演といはれる御方がお出ででありまして、そのお方からよく聞かされたのであります。併しそれが何處にあるのか、調べて見ようと思つて、まだ見付かりませんが、かういふことなんです。餘程面白いことで私はよく覺えて居るのです。それは道元禪師のお話であるが、この人は鎌倉時代の人です。鎌倉時代といふのは日本の文化史上に著しい大きな足跡を残した

時代である。その時代に道元禪師といつて曹洞宗の開祖であります。この人が支那からお歸りになつたとき、或る人が尋ねました。「あなたは支那へ三年も四年もお出でになつて、どういふことをお悟りになりましたか」と。さうすると、禪師は『私は何も別がないが、只柔軟心と云ふものを得て來た』と仰しやつたといふことである。この柔軟心といふことが餘程面白い。これを佛教の人は『忍』とも云ひます。忍辱とも云ひます。『忍』の字が色々と他の字と組み合はされてよく使はれて居ます。この柔軟心といふのは、聖徳太子のやわらぎの義に外ならぬのである。

我等には『我』といふ硬いものが、いつも心の中に坐を占めて居るから、何か向ふから來るものがあるとそれを容れることが出來ないので。どうしてもそれを『我』の力で突返すのです。これを衝突とも矛盾とも申します。これに反して、柔軟心といふことになりますと、向ふから來たものがその中に吸ひとられてしまふ。それは淨土宗の考では所謂攝取不捨と申すことです。それが、先に申上げた、包む——何も彼もその中に入れて行く、何がはいつでも無碍といふやうなことなのです。

かういふことは、餘程經驗を積んだ、よく反省をして、よく修行せられた人でないと、出て來ない言葉であります。我等は何時も、向ふから來るものを突返すといふやうに硬いものを心に入れて、二元的生活をやつて居るのです。

で、この柔軟心といふこと、和いだ、柔かな心で、對象的に向ふの世界をゆつくりとその中に入れて行くこと、これはまた一切世界を包むといふことにもなるのですが、この心持を、また他の角度から云ひ現はす方法があります。これは支那の唐時代に居つた人で、有名な趙州從諗といふ人がある。この人は餘程面白い人であつて、禪坊さんとして甚だ偉いと思ふのであります。今日の日本の禪といふのは、機鋒を貴ぶと云ふので、中には随分如何はしい力さわぎをやるのが禪だと心得違ひして居るものもあるときいて居ます。趙州の從諗和尚の機鋒なるものは、言葉の上でのやうとりで、いつのまにか、『包まれて』しまふのです。やはらぎの心で相手の對抗力が消されるのです。相争ふとか、突返すとかいふことをしないで、如何にも柔かだ居て、その中にこちらの硬きものが、自ら清算せられるのである。

例へば有名な話であります。趙州のお寺に大きな石の橋があつた。この石の橋はその頃支那では有名であつた。或る坊さんが来て、『有名な石橋が此方にあるといふことですが、来て見ますと、石橋どころではない、小さな、危ぶなげな丸木橋ではありませんか。何處にやかましい石橋があるのですか』と言つた。私共もよく考へて置かなければならぬことは、人間といふものは、自分の見る所より以上に、他人を見ることの出来ないものである。自分の人格が小さければ、大きな人を見て、その大きいところを見ないので、見えないのです。小さいものだけしか見えない。大きなものを小さくして見てしまふ。鼠の世界へ行くと、世界は鼠だけの世界で、それしか見えない。何でも彼でも食べるといふことしか考へないものにとつては、如何なる世界もみな食物と云ふ點からのみ見られるのである。そんな世界は頗る迷惑な世界であります。所謂天地を包むといふやうな心持から見ると、盤珪禪師の『一圓相の輪があらばこそ』と云ふことになりませう。西洋の人、佛蘭西人にパスカルといふ哲學者があつた、この人は、周邊のない圓には中心點が到るとこ

ろにあると云つたのですが、佛教ではよく圓相を描きます、絶對『一』の表象のもりです。その圓に周邊、即ちぐるりを限つたものがないことになると、何處でも中心であるから、『一』は無碍である、多も亦無碍である。圓に周邊があれば、中心は一所にしかない、それで萬事が固定化する。圓周がなければ、何處でも中心が出来るから、かうして居て全宇宙を此掌裡に握ると云ふことになる譯である。絶對なるものには、周邊をつけるわけに行かぬ。さうすれば、大きく叩けば大きく鳴り、小さければ小さく響く道理で、小人物には小さなことだけしか見えない。こんな人は何にでも周邊をつけたくつてしやうのないくせがある、小さい所で丸くかたまつて休まうと云ふ傾きがある。

今來た坊さんは、大きな石橋を目の前に見、自方が踏んで來ておきながら、丸木橋のやうにしか見なかつたと云ふのである。近くの大きな柱も、人によりては細い丸太の棒にしか見えない。かういふことになるより外ないのである。この坊さんにはまた一つの見處があるので、わざと小さくして、相手の出ようを見んとするので

あるが、此處では此人を小さく見ておく。さうしたら、趙州の言はれるには、『お前は石橋といふものを知らないのだ。お前には、この石橋も丸木橋のやうにしか見えないのだ。私の所の石橋は馬も渡れば驢馬も渡る』と。驢馬といふのは、或は今來た坊さんを指したものと見ても差支ないかも知れぬ。趙州の心持を今少し近代的にいへば、この『石橋』は日本人も渡れば支那人も渡る、ロシア人も、ドイツ人も、イギリス人も、アメリカ人も皆渡る。さうかと思ふと、蚤も渡れば、虱も渡る。或は黴菌も渡るといふことになるかも知れない。さういふやうに趙州の立場から見ると、趙州の石橋は何を渡しても平氣で居る、さうしてまた何もかもこれを渡らなければならぬのです。佛教のお經の中に、ガンジス河、即ち恆河といふ頗る大きい印度の河の譬へがあります。その河の砂は誰でも何でも皆踏んで行く。大きな象も踏めば、龜の子も踏む、踏むだけでない、ときにはいろ／＼な汚きたないものもその上に流されるであらう。如何にも無殘に踏みじられ、情なく穢きたなされるのであるが、恆河の砂は何とも言はない、不平を言はない、喜びもない、元の通の顔をして居る。

その通り、趙州の石橋も、どういふものが渡らうが、どういふものが叩かうが、依然として趙州の石橋は小ゆるぎもしない。又何らの不平も言はぬ。これが道元禪師の柔軟心、聖徳太子のやはらぎであるが、趙州の表現は堅き石橋である。それでは硬いやうな氣がするが、實は同一物である。譬へといふものはいつも不十分なもので、それが譬への弱點である。しかしながら、何も彼も乗せて、何等の不平を言はぬ、そこにいろ／＼な小さな世界を入れて、それを一つに包んで、綽綽として餘裕を持つて居るところ、ここに石橋の意味を見たいものである。

『わしは地獄へ行く』

もう一つ反對の側から見た趙州の話にかういふことがある。佛教でも、東洋の方でも、或る意味で言ふと、その人生觀・社會觀における缺點と思ふが、男尊女卑といふことがある。西洋、特にアメリカなどは、女尊男卑と申しますが、——それは必ずしもさうでないやうであるが、兎に角、男が尊くて女が卑しいとか、女が尊く

て男が卑しいといふことは、考へてならないのである。お互に一つの存在として、お互に助け合ふといふ所に、人間生活の意味がなくてはならぬが、東洋の方では、女といふものは總て、何でも彼でも従順に、言ふことを聞いて居るべきことになつて居る。或る婆さんが趙州の所に來て、『女といふものは、小さな時には親の言ふことに従ひ、嫁に行けば夫の言ふことを聞く、年取ると子供の言ふことを聞くといふやうに、どんなことにも頭を下げて行かねばならぬ、如何にも業の深いものであると承つて居りますけれども、その業の深い、罪の深い自分は、どうしたら助かりませう』と、趙州和尚に尋ねた。趙州は、『助かつてどうする、皆んなの人は極樂に行つてくれ、私だけは地獄へ行く、これでいいぢやないか』と言はれた。無限の慈悲といふものは、かういふ所にあります。誠に有難い趙州の訓示です。唯押へ付けて忍従させるのでは、固より意味はない。

東洋人には、妙な風の諦めと云ふものがある。かういふやうに、毎日雨が降れば水が出る、崖が崩れる、汽車が通らぬやうになる、どうも仕様がな、毎年さうだ

と、こんな風に『仕方がない』と云ふ運命観である。或る意味からは、これもいいかも知れないが、文化的生活——一を二に分けてやつて來た生活型態を續ける限り、こんな宿命主義は甚だいけない。人情の或る方面から見ると、他はよかれかし、自分には悪かれかしとは言はぬけれども、他もよかれかし、自分も特に悪くならぬやうにと云ふのが、社會道德の通念である。つまり社會全體に福利の増進を考へなくてはならぬのである。東洋的運命観は、近時嫌がられる『個人主義』の變型に外ならぬのである。此にも宗教が要る。

單なる道德觀念では社會生活の根本義に徹せぬ。道德は限られて居る、積極性に缺けて居る。時に道德には力の觀念さへはいつて來る。こんな風にさせられるから、かうするといへば、一種の壓迫、一種の力である。ここに道德は有るが、それだけでは人間生活の全部を盡くさないものがあります。道德は宗教におき換へられねばならぬ。併し道德から宗教は出て來ぬ、宗教からは道德は出ることが出来る。道德の世界のみに居ては、宗教の世界へは入ること不可能である。一眞實の世界は道德

の世界を超えて居る。道德の世界は宗教の世界、禪の世界に引上げられねばならぬ。人間生活の奥底には『お前は極樂へ行け、私は地獄へ行く』といふものが、なければならぬ。それは宗教に徹底することによつて了解體認せられる。宗教の世界は、即ち禪の世界である、禪に入ることによつてのみ、道德の眞實性が認められると云つてよいのである。道德は尙力の關係を顧慮して居るところがある。力でない世界、愛の世界、慈悲の世界といふものがそこに展開しなくてはならぬ。趙州和尚の言はれるところに、餘程有難いものがある。世間では、道德で宗教が片付くと思つて居る人もあるやうだが、是は短見者流の僻見で、本當ではない。

もう一つ、趙州和尚のお話を致しますと、或る人が出て来て、趙州和尚の所へ行つて、『貴方は死んでから何處へ行きますか』と尋ねた。死ぬといふことも又一つの問題にしなればならぬのだが、兎に角、死ぬるとして、又死後の生活もあるとしておいて、さて趙州和尚の返事は如何にと言ふに、『私はもう眞逆様に地獄に行くんだ』と答へた。この尋ねた人はびつくりして『貴方のやうな高德の聖人（ひじり）でどうし

て地獄にお出でになるのですか』と言つた。趙州和尚の答はかうである。『私が地獄へ行かなんたら、お前のやうなものはどうして救ふか』と。かういふやうな言ひ方は、よく禪坊さんのやるところである。或る一種の立場から言ふとこれは本當である。別に向ふの揚足を取るために言ふのぢやなくて、問ふ人の問ひ方で自然にかう云ふ風に揚足を取られたやうに聞えて來るのである。實際は取るの取られるのと云ふことでは、更（さら）くないのである。この地獄へ眞逆様に行くといふ意味はどういふ意味であるかといふと、すでに申しましたやうに、一が二に分れる、二に分れて行けば、これが更に多に分れ、それから種種雑多の世界が出て來て、千差萬別的展開を見るのである。さうすると普通私等は此に力の世界、業の世界を見んとする。地獄と極樂の世界を見ようとするのである。

我等は平常二つに分れた世界をいつも二つのままで續くものと思つて居る。併し二つになつたのは、元（もと）一をはつきり自覺しようといふために、二つに分れたのである。それであるから、二つに分れたところをいつもそのままであるものと考へて

はならぬ。二つはそのままではあるが、それで一に還元して居るものと認めなくてはならぬのである。二は一を自覺するための二である。千差萬別は實に一のところ
で動いて居ると見なければならぬ。その一を見るときに、はじめてこの千差萬別の
世界がそこに包まれて居ることがわかる。即ち聖人（『一者』）は地獄（千差萬別の
『多』）へ行くことによつて、その聖を全うすることになるのである。これが佛敎者
の所謂衆生を濟度する——地獄へ行くことによつてのみ衆生を濟度することが出来
ると云ふわけなのである。千差萬別の世界に出ることによつてのみ、太初の『一』
の働きが出るのである。即ちそれが愛である。この世界が大悲大智の世界である。

大悲大智といふことは東洋思想である、これは西洋思想の考へ方の及ばない所だ
あると私は信じて疑はない。大悲と大智といふことを見なければならぬ。只智でも、
只悲でもない、悲と智と分れて、而かも『一』である、此『一』が二に分れるので
ある、そこから方便ウヰヤなるものが出る。方便となると意識である。無意識——この無
意識は、先に申上げたやうな心理的な無意識でなくて、心理學の所を突き破つた無

意識でなくてはならぬ——さういふ無意識から意識が出るといふ意味からいふと、
意識といふものには無意識が裏付けて居る。意識が動いて居るところに無意識がひ
そんで居る。差別の動いて居るところに無差別がある。無分別のある所に分別が起
つて居る。悲智の無方便から方便が湧いて来る。矛盾して居るところに、そこに矛
盾してゐないものが動いて居るといひませうか。さういふことになりますと、お互
に顔を突合せてゐながら、お互に殺し合ふといふやうなことがある。その殺し合ふ
といふことが、二つが二つとして對峙して居て、殺し合ふといふことでない、それ
は力である。一眞實の世界では、一といふものから見て殺すといふことになりま
すから、それは二元的意味の殺すといふことではなくて、その本當の意味は却て生か
すと云ふことになるのです。ここに殺人刀が活人劍になるのです。

大風がゴウ／＼と吹いて來て、そこらの樹を倒す、家屋を破壊するといつて、風
を恨むのは、二つといふものの對峙の世界に居る我等の僻見である。風自身の動く
所では、天空海潤、唯ずつと吹いて行き過ぎるのである。そこに何ら物を倒すとか、

殺すとかいふやうな計較も意圖もない。天日が麗かに輝いて居ると同じやうに、風が吹いて、雨が降る。その吹く風、降る雨になつて、我等も動くとするれば、そこに殺すとか活かすとか云ふ問題はない。殺されるものもなければ、殺すものもない。殺して殺されないと云ふことになる。それが本當に生きることである。所謂『電光影裡に春風を斬る』といふ鹽梅になる。これは印度思想の特色であるが、それが支那を通つて日本に來ると、また日本的に、此思想の展開がある。一眞實の世界が體認^{リシテ}せられるとき、何にもかもはつきりして來ると信じます。

(昭和十六年七月二十日より二十二日まで、鎌倉圓覺寺における夏期講座講演速記を修補したもの。)

禪と日本人の氣質

自然を愛する日本人

日本人氣質と申しましても色々な方面から考へられることと思ひますが、私は今日主として審美的方面とでも申しませうか、日本人が自然を愛するといふ方面、それと禪といふものと、どういふ關係にあるかといふやうなことを申したいと思ふのでございます。

これはずつと日本の歴史や文學を研究なさつたお方にとりましては、私が今申し上げようとするやうなことは頗る淺薄な、とるに足らないやうなことに思はれるだらうと思ひますが、私はさういふ方の専門の知識がありませんから、私としては極めて常識的に、普通の日本人即ち私等のやうなものが持つて居ると想像されるやうな知識を土臺にして、それから日本人が天然を愛する、自然を愛する、自然界になつて居る所のそれらの事物を愛するといふことに就て、それが禪といふものと、どういふ關係に立つて居るか、その點を極めてどんざいな考へ方でありますけれど

も、何か御參考になりはしないかと思ふのでございます。かういふやうなことは、もつと深く研究しなければならず、又専門の方面から見ても興味のあることだらうと思ひますけれども、私は甚だち恥しうございますが、その邊の造詣が浅いのでありますから、餘り大したことは申されぬので、それを遺憾に思ひます。

そこで我等が普通に考へますことは、どうも此日本に富士山があるといふこと、これが餘程我等の心をして天然自然の景物に對して憧憬と申しますか、或は又愛慕と申しますか、さういふ心持を養ふに與つて力があるのではないかと思ふ。若し富士山をこの日本から取つてしまつたならば、どういふ影響を日本人の審美的生活の方面に與へるか、いふことも考へて見て宜いことじゃないかと、かう思ふのであります。一昨日私が京都から東海道を經て此方に參ります時に、丁度、朝、眼が覺めて汽車の窓を開けて見ますと富士山が如何にも赤髯髯淨灑灑とでも申しますか、その全貌を、脱體現成的に見せて居つたのであります。それが暫く、一分二分と經たぬ間に、雲が何處からともなく湧き起つて、もう五分の後には、その全貌を跡

方もなく包んでしまつて、何も無くなつてしまひました。唯雲漠漠の後方に、あの一面に張り籠められた幕の中に、富士があるのだなと云ふ氣分がするだけで、それからずつと顧みく見ましたけれども、遂に再び見ることが出来なかつた。

この富士のことは今更申す迄もないことで、極めて平凡なやうなことでありますけれども、昔伊達政宗といふ——この人は武骨な人のやうに思はれますけれども、この人の富士を詠つた和歌が一つ二つあります。その和歌の中にかういふのがあります。

『見る度に景色ぞ變はる富士の山、

初めて向ふ心地こそすれ。』

それからもう一つあります。

『見ぬ人の問はゞ如何にと答ふべき、

幾度變はる富士の景色を。』

この富士の山の千變萬化すると申しまするか、見て居る中に變つて行くのであり

ますからして、政宗等の江戸の時代には汽車といふものも無いのでありますし、旅をするのには馬に乗つて悠悠と旅をしたものと思はれる。それでその景色の變化は、秋はそんなで無いでせうが、春とか夏になりましたらば、山の姿が刻刻に非常な變化を生ずることと思ひます。それでこれをどういふ風に、まだ山を知らぬ人々に對して話をしたらば宜からうか、山の面白味はその形だけに在るのでなくて、實にその姿が他の景物と關係づけられる所に在るのでから、未だ見ない人には、この話が出来ないといふやうなのが、政宗の和歌の心だと思ひます。

かういふやうに武人が、昔は武人と申しましてもさう殺風景ではないやうで、日本の武人といふものは一面に於ては悉く文人であつたと申しても宜からうと思ひます。文武兼備の良將と申しますやうに、一方に武があれば又一方に文といふものがある。文と武とが兼ねてあるといふのが日本の武士の特色であつたらうと思ひまするので、このやうな所にも日本人の自然美を愛する特質といふものを見ることが出来るだらうと思ひますが、その數に洩れぬ日本人の政宗でありますから、富士に對

してかういふ心持を有つたのも固よりであります。武人にこれが有るので、その奥床しさと云ふものを感じるのです。奥床しさ、是が面白い日本語の一つだと思ふが、如何でせう。

それから百人一首といふ、今の若い人はやるかどうか分りませぬけれども、我等の子供の時には歌留多をとりましたが、あの中にあつた和歌の一つに

『田子の浦に打出て見れば白妙の

富士の高根に雪は降りつつ』

といふのがあります。あれなども、まづ田子の浦をそこに置いて見ます。さうすると、和歌には出て居りませぬけれども、想像して見ますれば、そこに青海原が一面に展開して、ずつと藍を流したやうに流れて居る。さうして向ふには又紫色の富士があつて、その上方には雪が降りつもつて、頂上は眞白になつて居るといふ景色を想像して見るといふと、色の配合から見ても頗る我等の心を動かすものがあるので、それをひよつと何處からでもよいが、その濱邊に出て見上げたなら、その景色

の鮮かさ、すつとした心地になりませう。和歌の面だけでは、さういふ感情を言ひ現はして居ないやうでありますけれども、併しその詠んだ人はその言葉以外に、こんなやうな心持をも、そこへ寄せてあるものと、かう見ても宜からうではありませうまいか。

唯思出す儘に申しますが、太田道灌の話になりましたも、御土御門天皇が、唯今おまいの家はどういふ所かと御問ひ遊ばされた時に、道灌が申し上げますには——これは皆様御存知のことでありませうけれども、

『我庵は松原つゞき海近く、

富士の高根を軒端にぞ見る』

と申上げ、陛下も非常に御満足であらせられたといふやうなことを、我等は子供の時によく聞かされたものでございます。太田道灌等も中々風流な大將でありまして、有名な山吹の和歌等もあります、さういふ方面で、武人は却つて本當の歌人よりも、その自然の風景に動され易い心を有つて居り、又動かされた心を三十一文字

に現はすだけの文學を有つて居るといふことは、我等日本人の品性・氣質・風格・素養などと云ふものからして、今日大分考へて見てよいことと思ふのでございます。殊にこの太田道灌の『我庵は』といふ所ですが、我等は庵と申しますと、彼の鴨長明の方丈記で見る茅屋のやうな鹽梅に、如何にも質素な草葺の、賤が伏屋といふやうなことを思ひ出すのであります。太田道灌はこの武藏野の開拓者の第一人者であつたといふことでありますから、この東京——武藏野を開いた先祖であると思つて宜しい。そして其所にどういふ城を拵へたかは、私は知りませぬけれども、決して『我庵は』といふやうな、賤が伏屋的のものでは無かつたと想像致します。豪壯といふやうなことでなくとも、幾らか大將に相應しい建物であつたらうと思ひますが、それを『我庵』といふ。あの道灌の歌人的な情操が讀めると思ふのであります。『我屋敷は』ではどうもおかしいでせうし、『我家は』——家は色々の意味にとられると思ひますが、この『我庵は』といふ所に、太田道灌の詩人的な肌が窺はれる。この太田道灌といふのは、最後は頗る悲慘なものであつたやうに聞いて居りますが、

その時も自分が腹を槍で突かれ乍ら、その槍を持つてその時に詠つたのに

『きのふまで、まくもうしうを、入れおきし

へなむしぶくろ、いま破りけむ！』

兎も角も死ぬ時にかういふ餘裕のあるといふこと、さうしてその餘裕のある所を、直ちに文字に現はし得るといふやうなこと、さういふ所が日本人の特質と申しますか、固よりかういふことは、必ずしも日本人でなくとも、苟も幾らかの文明文化的の生活をやつた人には、多少はあると思ひます。支那へ行つても、印度へ行つても、波斯、アラビヤ、ヨーロッパ邊りへ參つても、さういふやうな人は、いくらかはあるものと信じて居ります。けれども我等は子供の時から、さういふ雰圍氣に養はれて來たのであつて、何でもないやうに思つて居るのでありますけれども、外國人がそれを見るといふと、餘程心を打たれるものやうです。

外人の日本人觀

その點で私が想ひ出しますのはイギリスから日本へ大使に來て居られましたサー・チャールズ・エリオットと申す人がありました。このエリオットといふ人は餘程東洋の文化に憧れを有つて居つた人で、印度教及び佛教といふ著述もあるし、又亡くなられて後から日本佛教といふ本が出て居ります。この日本佛教といふ本は、エリオット大使が日本へ赴任される時から考へて居られた本で、實は印度教及び佛教といふ本の中に、日本の佛教に關することを書かれたのであります。日本へ愈々赴任して來られることになつて、さうして自分の國を代表して來る者が、日本の佛教のことを彼此書いては甚だ宜くなからうといふので、態々自分の著書から削つてしまはれた。さうして大使を何年かやつて居られて、そのうち大使を辭められてから、又日本へ來られて、奈良に居られた。それから一度も二度もイギリスへ往復せられたやうであります。その間日本佛教の研究に従事せられた。さうして一昨年から一昨昨年かであつたが、その本の原稿を持つてイギリスへ歸られた。その時に、私が申しますには、又もう一遍日本へお出でになることと思ひますが、隨分御機嫌宜

しくと、斯う御挨拶をした時に、自分はもう七十以上になつて居ると云はれた。今日では、七十というても、日本人でも、さう大した年のやうに思はぬやうになりましたが、況や外國人では七十位では、さう年寄の中に這入らぬかも知れませぬけれども、併しエリオットさんは自分はもう七十以上で、これからイギリスへ歸つたら、又日本へ來ることが出來ぬかも知れないと云はれた。それが識を爲したかどうか。途中でペナンか何所か、あの邊で亡くなられて、水葬を行はれた譯なんです。そしてその時に持つて行かれた原稿を自分が彼方で監督して出版される譯であつたのを、さういふことが出來なくなつた爲に——今これで三年目かとも思ひますが、漸く今春世話をする人があつて、その原稿を整理して、これが出版になつた譯であります。私はこのお方のことを、かう長くと申しますのは、どういふ譯かと申しますに、これは個人的に關係もありますし、それから又色々佛教のことを話し會つたりして居りましたので、或意味のお弔ひの言葉を、機會がある時には申して居るのでございます。この人の書かれたものは、日本佛教といふ本ですが、その中にかういふ言葉がある。それを少し申上げたいと思ふのであります。

それを直譯して申上げますと、これは日本佛教でありますから色々な方面を書かれて居りますが、その中に禪のことに就て記録の一番初めに、かういふことが書いてある。禪は極東の、詰り日本、斯う見ても宜しいのであります。その藝術的、審美的方面・智的方面、それから政治的の方面迄も非常な影響を及ぼして居る。或度迄は、禪は日本人の氣質、日本人の性格を形造つたというても宜しいが、又一方で見ると日本人の性格——本講演の表題には氣質と書きましたけれども、性格も氣質も大體似たやうなことに見て置きたいと思ふ。氣質と申しますと、幾らか感情的傾向と云ふ方面が考へられます。又性格といふと意志的に定義されて宜いか知らんと思ひますけれども、茲では性格も氣質も、まあ大體同じやうに見る、多少の輪廓の出入はあつても同じやうな概念を荷うて居るものと、斯う見て、さうしてその日本人の性格——その日本人の性格の表現が禪であると見て宜しい。佛教の他の形體は、詰り禪宗以外の他の形體、それは天台宗・眞言宗・或は日蓮宗・眞宗といふや

うな範囲に見ても宜しうございますが、その佛教の他のどの形體よりも、禪は日本人的であると、かういふ言ひ方なんです。もう一遍それを私の言葉で申しますれば、禪といふものは日本人の性格を陶冶した、陶冶したが、又一方から見ると日本人の性格そのものの表現が禪であると、斯う見ても宜い。禪は實に日本的なものであると、かういふ言ひ方、これは極めて簡單でありますけれども、私は能く禪と日本人氣質との關係を道破して居ると思ふ。

かういふやうな外國人の觀察——殊に外國人でも、所謂彼方へ行つたり、此方へ行つたりして世界中を飛んで歩いて、さうして上ツ面だけしか見ないやうな人が、色々日本人のことに就ても、東洋人のことに就ても書きまするけれども、さういふ人は一時の印象——表面の印象を書連ねたに過ぎない。併しその表面の觀察にも時には中々穿ち得たこともあります。第一の印象といふものが却つて第二第三の印象よりも肯綮に中ることが少なからぬのであります。それであるから第一の印象を書いたものが悉く取るに足るとか、足らぬとかいふ譯ではないけれども、併し第一流

の頭を有つた人が、何年かの研究をした後に觀察をして書き記した所には、その結論に對して、耳を傾けても宜いものがありはしないかと思ふ。

さういふ外國人の批評を聞かなくても事實といふのは手近かな所にあるのですから、歴史の上、文學の上、或は又我等の日常生活の上から色々と考證をして、我等自身としても勝手に結論を出しても宜いではないかといふ議論もありますけれども、併し燈臺下暗しといふやうなこともありますし、又他山の石といふやうなこともありますから、人の批評を聞くといふことは、單に雅量を示すといふだけでなく、我等自身を知るといふ點に於て餘程有益なことがあらうと思ふ。それで近頃は外國人の見たる日本といふやうな本も出て居るやうな譯で、鏡に向つて自分を照して見るといふことは、餘程有益な事であると思ふのですが、自分でも自分の意識に上る所の考へといふものは、その自分といふものに餘程色付けられて居るのである。それで虚心坦懐に自分を自分の意識の鏡に照し出すと云ふことは難かしいものである。有名なイギリスの詩人にバーンズといふ人があります。之はアイリッシュであります

すけれども、イギリス人といふ中に入れておく。アイリッシュ人はかう云ふと中々怒りますが、まあこのバーンズといふ人の詩の中に、『若し人が私を見るやうな鹽梅に、自分が自分を見ることが出来れば』といふ句がある。これは有名な句であります。さういふやうな鹽梅です。我等は大抵人がどう見て居るかといふことを気に掛けて居ることが多い。自分自身の考へで自分自身が勝手に働くといふよりも、人が自分の働きに對してどういふ批評を加へて居るかといふやうなことを、餘計に氣に掛けて行く動物であります。それとは又別に今度は向うの見方を直ちに自分の方に持つて、さうして自分を餘計に知るといふこと、これから先自分が進む可き途をそれに依つて開拓して行くといふ、詰り參考資料にするといふことが餘程宜いと思ふ。さういふ爲に外國人の説を、善きにつけ悪しきにつけ、聞くといふことは決して無駄ではない。

雨 と 月

斯う持つて廻つて申さなくても宜いのでありますが、私はこのエリオットさんの禪と日本人に關する批評が餘程當つて居るじやないかと思ふ。それはどういふ譯であるかといふと、禪といふことに就いてもつと申さなければなりません。かういふことがあるのです。これは謠曲を研究なさるお方はよく御承知だらうと思ひますが、謠曲に『雨月』といふのがあります。これは西行法師の旅の生活の中の一つの出來事であるといふやうに書いてある。それから又大體の趣旨といふものは、あれは住吉の神様でありましたかと覺えますが、とに角、和歌の神様で和歌の徳を褒め讃へるといふことの趣旨になつて居るのです。併し乍ら私は和歌にとつては門外漢なので、それよりも雨と月との關係、そこが面白いのです。未だ御存じないお方がおありかとも思ひますので、ちよつと申し上げますが、話の筋はかういふことなんであります。

西行法師が旅をして夕方になると、もう日が暮れて候——そこで何所か向うで火が見える、其所へ行つて宿らうと存ずるといふ譯で、其處へ來て戸を叩くと老主人

が出て来て相手をして呉れた。そこで一夜の宿りを頼むといふと、老主人は、それは出来ない、迎もさういふお客を泊める様な設備といふものがないと云ふ。さうすると、そこには老夫婦が住んで居りましたので、その老夫人の方が出て参りました、これは旅の坊様である、旅の行脚の僧侶であるならば、一夜の宿りを貸して上げたらどうかといふので、その老夫婦の間に意見の相違があつた。詰り貸せられる、貸せられぬといふことの問題になる因は、その賤が伏屋には屋根がない。全く無いといふ譯でもないでせう、幾らかあつたでせうと思ひまするが、そこは謠曲であり、詩であり、歌であるから、まあ青天井的なものであつたとかう見て——そこで老人は、お爺さんの方は、もう秋も更けて来るのであるから、月を見たいから屋根の無い方が宜いと主張する。所がお婆さんの方では、月は兎に角として自分は雨が聴きたい。雨を聴くには屋根がなくちやならぬ、屋根へ雨がバタ／＼と落ちる音を聴くと、如何にも物静かで好い心持がする。これは私が附けたのですけれどもと角、こんな事の次第で老夫婦の間に意見の相違が出来た。屋根は葺くべきであらうか、

葺かなくてもよいであらうか。そこで老夫婦は、

『賤が伏屋を葺きぞわづらふ』

と言つた。さうすると西行法師は、そいつは面白い、誠によい歌の下の句になると云つて、『賤が伏屋を葺きぞわづらふ』と口ずさんだ。これをきいたその老夫婦は、あなたも和歌が分かるのか、それならばこの上の句を付けられたら、何とか工夫して泊ませせうと云ふ。さうしたら西行が

『月は洩れ雨は溜れと思ふにも』

と詠んだ。それで泊められたといふことになつて居ります。その晩にその歌の神様が現はれまして、和歌の功力をほめたたへられるのです。それはとに角として、その日は夜が更けて來ると、段段に月が上つて來て、さうして雪も霜も降らぬのに、見わたす限りの野原や、その向うの山全體に互つて如何にも眞白に見える。月の光が如何にも明るいので、霜の夜かと疑はれるのである。月は千里のはてを照らすといふ具合に煌煌と照渡るのです。所が又颯然として一陣の風がやつて來ると、バラ

バラと雨の音がする。これはといふので外を見ると、月は元の如くに眞白であるが、風が起つたがために、秋の木の葉が散る、その木の葉の散る音が雨のやうに聽えるのです。これも或人の歌ですが、私はいつももの忘れをするので困りますけれども、大體の意味はかうです。秋の夜に風が吹いて木の葉が散ると、さうすると、その音が雨のやうに聽えるので、時雨して居るのか、して居ないのかといふ歌なのです。さういふ心持が、此の『雨月』の中にも出て居るが、兎に角、西行が其所へ泊つたが爲に、雨と月と諸共に、夫婦も亦相共に仲よく樂しむことが出来たといふ。これが歌の功德、如何にも風流といへば風流であります、かういふ所に、この日本人の如何にも呑氣といへば呑氣ですが、面白い氣持が溢れて出るので。近頃は餘程ものが忙しくなつて、この呑氣といふことが時代おくれと云ふことになりましたが、私共段段と老朽に近付いて來るものは、この呑氣さの無くなるのが極めて遺憾に思はれます。この『スピード・アップ』とか云ふ世界でも、雨を樂しみ月を樂しむだけの、餘裕をどうかして拵へて欲しいとお願ひします。併しかういふ所謂近代的な

俱樂部（工業俱樂部）のやうな建物では雨も月もだめです。ここは喋舌るには宜いでせう。今日は喋舌る時代で觀賞する時代でなくなつた。

米國人と東洋思想

この雨のことに就てまた想ひ出すことがあります。アメリカに今から百年程前になりましたが、先程談話室でも一寸舊知のお方と話がありました、それはアメリカのコンコードの話です。アメリカは御存じの如く東部の方が先に開けて、さうして次第に西の太平洋方面に進んで來たのです。それはアメリカ人がカリフォルニア州に黄金が出るといふので、矢鱈に此方へやつて來た譯なんです。そのためでもありません、どうしたつて太平洋沿岸のものは人氣がよくない、また黄金狂のアメリカ人が多いと思ふ。これに反して、東方の十三州、もとのイギリスに反抗して獨立國を拵へた方の國には、自由を愛し、兼ねて哲學、文學、宗教を愛する人が多くと思ふのです。

それは別として、此コンコードにエマスンと云ふ大哲學者で大文學者が居ました。此人は専門的な哲學者ではありませぬが、哲人と云つてよいでせう。米國は物質主義の國だと申しますが、自分は必ずしもさう思はぬ。却つて觀念的思想傾向の人が中々ある。それはエマスンの本が今日でも年年出版せられて、一般に愛讀せられるのでよくわかる。

此エマスンと同時代人で其友達にソローといふ人がある。このソローといふ人が、ウ・オ・ル・デン、『森の生活』といふ本を書いて居りますが、この人は餘程東洋風の人で、西行の宿りした『雨月』小屋のやうな所に住んで居た、本當の丸太小屋である。而して此の丸太小屋は自分が丸太を伐つて來て、本當に六尺四方か一丈四方の家を拵へて、其所へ机を置き椅子を置き寢臺を置く、總て自分の手製であつたといふこととであります。今日でも其小屋の寫眞を賣つて居ます。繪葉書にもなつて居ます。床が削り立ての荒削りであるから、そこで友人が、これでは餘りに殺風景だから、カーペットを贈らうじやないかといふので持つて來た。さうしたらばソローはそい

つを斥けて、かういふ無用の長物を一つでも入れたら、もうその次から次からと、色々なものが欲しくなる。だから第一にこれを斥けるといつて、その持つて來た友人の贈品を拒絶したといふ話がある。

これは事實本當です、我等は始終この道具に苦しんで居るのです。道具といふものを矢鱈に人間は用ひたがる。道具に對する所有慾といふか、それが矢鱈に我等の心の中に動いて居る。さうしてその所有慾の壓迫で、道具を次から次へと拵へて行き、そして却つてその道具に使はれて居るやうな次第です。我等の一生はこの使ふ爲の道具に使はれて居るものと見てよいのです。今日は道具といふよりも機械と云ひます、その機械に使はれて行く。昔の道具の場合よりも機械では大勢の人が一塊りになつて使はれます。色々な科學の發明といふので機械が矢鱈に出来るが、その機械に我等は毎日朝から晩迄使ひまわされて居ます。さういふ奴隸生活をやつて居るのが今日の文明と云ふもの。所がソローはそこに於てはもう一種の達眼で見て居るから、カーペットは要らぬと、かういふのです。

彼はかういふ原始的な小屋がけ世帯の所に寝起きして居つて、自然を樂しみ自然と共にねちきした人である。その人が雨のことを言つて居る。はじめ此所へ來た時には、人間界を離れて、さうして自分の友達とも一緒に居らぬといふやうな所では、淋しくて仕様が無からうかしらぬといふ心配が、ひよつと起きたといふのです。所が或日雨の降つて居るのを何となしに聽いて居るといふと、その雨の音の中から一つの別の世界が感得せられた。人間にあらざる、また別調の風の中に吹かれるといふのでした。ちよつと我等人間界でない消息が窺はれたと云ふのです。それからといふものは、自分の最も親しいものは友達でもなければ——あの最も人間臭い所の人間ではなくして、何の心もなくそぼく／＼と降つて來る雨の音であつたと云ふのです。また自分を取巻いて居る所の草や木、向うの木に囀つて居るところの鳥の聲、此處の草の蔭にすだく蟲の音であつたのです。こんな生活で何年間か其所で人間の世界に交渉をもたなかつたといふ人、それがソローなりました。

その人がそんな審美生活をやつて、さうして鳥やけだ物と親しんだが、その人が鳥に就いて書いたこと、けだ物に就いて書いたことは、今日の博物學者が書いた研究よりもずつと良いといふ話を聞いて居る。それはどういふ方面で良いかといふと、今日の博物學者は彼奴を一つ研究してやらう、あの動物を一つ研究して、何か論文でも書いて世界に名を轟かしてやりたいものだといふ野心で、動物を始終見て居る。動物と自分といふものが一つにならぬ。動物は始終自分に對して向うに居る。彼奴を彼奴をと後を付けて居る。たゞそれだけなら宜いけれども、今度は彼奴を切つてしまふ、動物を色々に切りほどこいてしまふ。單に切るだけならまだ宜いけれども、生き乍らそれを解剖するといふやうなことまでやる。さういふことをやつて我等がそれでどの位命が長くなるのか知らぬけれども——或は實際に長くなつて居るのであるかも知れないけれども、またそんな事をやつて、悪い仕業の結果を避ける工夫もやつて居るのです。さういふ風に動物を研究して、さうして自分の名が、所謂功成り名を遂げて後に、動物祭でもやつて、南無阿彌陀佛をやつて居れば、動物が極樂へ行くやうに思つてやつて居る譯でせう。併し乍らソローの研究はさういふ方で

なくして、自分が鳥になり、けだ物になつて、その生活を描いて行くのです。さういふ點から見てその動物學的な研究といふものが、非常に参考になるといふことを聞いて居ります。

それだけでなく自然及び自然界の事物と同化して行くと云ふことは、次のやうなことになるのです。日本の繪を描く人がよくアメリカの大學邊りに雇はれて鳥の繪を描いたり植物の繪を描いたりするといふやうな話を聞いて居りますが、その日本人の描く繪といふものが如何にも生きて居ると云ふのです。鳥なら鳥の性格がよく現はれて出て居る。又茲に植物なら——百合なら百合を一本——この頃なら朝顔が咲くが、その一輪の朝顔なら朝顔、菊なら菊、ダリヤならダリヤを描くに當つて、如何にもよく、それ／＼の草木の精神といふものが彷彿として畫面の上に表現される。たゞその姿を寫生しただけでない、此點では西洋の畫家などと大にその趣きを異にするときいて居ります。此點では、アメリカのソローは餘程東洋人に近い所があると、かう言うて宜からうと思ふ。事實その通りでこのソローといふ人は東洋

の哲學を心讀した人の一人なんであります。

今申上げました様に、このエマスン、ソロー、アスコットといふやうな、さういふやうな人々が汲汲として東洋の文學・哲學を研究したのは、今から百年以上前なのです。どういふ風に東洋の文學や哲學又は宗教を研究したかといふと、その頃のアメリカの文明文化といふものはまだ／＼ヨーロッパの所謂出店であつたのですから、ヨーロッパの本を頻りに輸入してそいつを耽讀した。ちやうどマックス・ミュラー及び彼以前の梵文學者が印度の文物を研究して、さうして遂には『東方聖書』といふものを發行しようといふやうな計畫をした、さういふものがだん／＼出來かけようとする。梵文研究はマックス・ミュラーよりもつと早いのでありますけれども、まづ其頃になつて東洋の學者の研究が、色々と進歩して來た結果、『東方聖書』を編纂するやうな機運が醸成せられた譯であります。その頃印度の本を譯し支那の本を譯したものが滔滔として歐米の思想界に氾濫して來たものです。そいつを今のエマスン、ソローなどが讀んだものであります。私は若い時にエマスン等を讀んだ時

には知らずに居りましたけれども、エマソンなどを讀んで如何にも自分の心に近く觸れて來るものを感じました。かういふのが西洋の人にも居るかしたらんと餘程氣を惹かされたものであります。今時の若い人でも多少心を惹かれるだらうと思ふが、それは外國のものを讀んで居つたんじゃないやなくて、その實自分等が先祖からずつと養はれて來て、我等の意識の根底に、無意識に流れて居る所のものを、今度はそれが外國の文字・文學・思想に現はれて來た、それをわし等が讀んだといふ譯なのであります。それであるから自然に我等の心に深く這入るといふことは勿論の譯であります。その頃は何にも知らずに居ましたが、近代に至りて、それに就てのいろいろの著書が出ますので、我等もそのことが分つて來たのです。

西洋人の中に深く東洋思想の浸みこんでゆくことは確かに間違ひのないことです。このエマソンの日記や手紙なども出版されて居ますが、その中の様子を見るといふと、エマソンは如何にも東洋の本を研究して居る、餘程東洋の本を研究して居る。その研究の仕方といふものが今日の所謂東洋學者の語學的なのと違つて、寧ろ文學

的・生活的な・藝術的な研究といふ方に見てよいと思ふ。東洋の精神を自分に取り入れて、その取り入れたものを、自分等に特有の表現法で文字に現はすといふことになるのであります。そんなことをやつた人の一人がエマソンであつたと思ふのであります。そこでエマソンはそれを自分のものにして文學に現はす。それから今のソロー——この丸太小舎に住んで居つた仙人哲學者のソローは、それを實行の方に移した。それからアスコットといふのが宣傳係といふあんばいで矢鱈に色々な本を出版したといふことになつて居る。今から百年ほど前にはアメリカにはこんな人が主なる運動者として、東洋思想・東洋情緒と云ふものを鼓吹したものであつたのであります。さうしてアメリカの『トランセンデンタリズム』、一種の超越學派とでも云ひますか、さういふものが拵へあげられた譯であります。それでソローのやうな人の出現もなる程と、その意味が解ける、さういふ所がソローの本にある。ソローが雨に依つて心を打たれたといふこと、この『雨月物語』をそつくりそこにもつて行つてアメリカ流に翻譯したものと見ても宜いではないかと思ふのであります。

雨 滴 聲

雨のことを申しますに就て、これから禪の方に移ることに致しますが、どうしてこの雨といふものが面白いかと申しますと——卒然かう申しましても分りにくいと思ひますけれども、或は或手引になりはしないか、或は今日私が手引にしようと思ひますことが、幾らかの時間の後に、あなた方の心の中に、結論となつて出て來ることがあらうかと思ひますから、まあ只今すぐにお分りになるにしても、ならぬにしても、そこは頓着しないで申しします。

鏡清といふ人——これは支那の人で唐末から五代にかけての人であります。禪といふものは支那で主として唐時代に完成したのですが、これも後からちよつと申す機會があるかも知れませぬ。此鏡清といふ人が或雨の降つて居る日に、戸の外——門の外と書いてありますがこれは戸の外でも宜い——『あの門の外に音のするのはあれは何だ』と小僧に聞いたならば、『あれは雨の滴る音である』、『雨の滴る聲で

ある』と答へた。『何の聲ぞ』と言つたらば『雨の降る音である』と、かう正直な當り前の間違ひないところを返事しました。さうすると鏡清がかういふ批評を下した、『どうも人間は己に迷うて物を逐ふくせのとれぬものだ』と、かう云つて歎息したといふことであります。

雨の降つて居るときに、何だと問はれて、雨が降つて居るといふ返事をする、それが『己に迷うて物を逐ふ』ことになるのである。向うのものに囚はれて居て、自分のものが却つてわからずに居るといふのはどういふ意味であるか。何が『自分』で、何が『物』で、何が『聲』で、何が『聞く』であるか、これを一一説明すると中々長いことになつて、一朝一夕にはすみません。唯一言に申しますといふと、『己に迷うて物を逐ふ』、物と云ふは客觀界といふことにしてよい、之を逐ふと云ふのは、客觀界即ち『物』なるものが、『己』即ちこの自分に對して立つて居ると考へて、即ち概念的に經驗を構成して、この客觀界といふものを作り上げる。さうしてそこに自分から獨立した出來事と云ふものがあつて、それを經驗するとして、二元の世

界を展開させるのである。概念で構成したものが即ち事實の體驗であるやうに取られるのです。それで『己に迷ふ』といふことになつて來る、また『物を逐ふ』といふことになる譯である。斯ういふ具合に片付けて置きます。必ずしも今日はそこに時間を費すことにしたくないのであります。

さういふ具合にこの雨を雨と見て居つても、又雨と聞いて居つても、雨の本性、之を聞くと云ふ其聞くことの本性がわからないと、雨をきいて居ても其雨は本當の世界ではないことになる。普通に云ふ雨の世界以外に、今一つの世界があるといふと、又何かさういふものを考へ出して、所謂概念的に又何か構成するのであるが、さうしないやうに願ひます。楞嚴經といふ御經に、一精明分れて六和合となると云ふことがあります。此一精明——此歴歴として孤明なるものに氣が付かずして、雨だとか風だとか云つて、その音につきまわされるのを己に迷うて物を逐ふと云ふのです。これは主觀の世界でも客觀の世界でもないのです。そんなら空空寂寂底かと云ふに、亦さうでない。寂の中に動く知がある。そこに人間が人間として面白い

所があると、自分は斯う思ふのであります。

躍るもの

空也上人と云ふお方があります。又一遍上人と申すお方もあります。殊に空也上人は日本國中踊り廻つて歩かれた。空也踊りといふ鹽梅であります。踊り廻つて歩かれたといふことも、色々の意味がありませうけれども、あの踊り廻るといふ所に、私は餘程面白い所があると思ふ。この踊り廻る、雨の音を聽いて、雨ならざる世界を感得した——その喜びといふものは、ソローをしてそのいくとせかをロッグ・キヤビン——丸太小舎に暮させて了ひました。而してその間を長いとも短いとも思はず、『一生用不盡』で、その不盡の處を樂んで行つた。それが空也上人の身の上に映つたとき、此の『一生用不盡』が上人にどういふ生理的反應をしたか、又精神的反應をしたかといふと、上人は日本國中を踊つて歩くといふことになつた。猫も踊ると申しますが、踊りは人間の特色です。面白いものです。

あの越後の良寛上人といふのが——これは誰でも御存じと思ひますが、五合庵の良寛さん——この人が盆踊りで手拭を被つて若い者と一緒に歌つたり踊られたりしたといふ話がありますが、あれは餘程面白いと思ふ。ちよつと今我等は踊る譯にはいかんやうな氣もする。心の動き——まあさう云つて見るが、それを表現する形式といふものは、人人の體質に依り、又氣質や個性上のいろ／＼な分子が異つて居るので、必ずしも我等が心の動きを直ちに皆踊りといふ形式をとつて現はすやうには出来にくい。誰も彼もが、さういふ風に出て來るといふ譯でないけれども、併し良寛上人や空也上人には、さういふ風に出來て居たのである。良寛さんは村の若い者と一所に踊つた。年寄の坊さんが踊つては可笑しいといふやうな所があつたと見えて、手拭を頬冠りして踊つた。そこが中々面白いのです。私は時々これを思ひ出しては、自分で笑ふこともあります。

チンドン屋といふのがあります。頭に何か載せて、色々な旗を立てて、太鼓をたたいて、腰を妙な鹽梅に動かして歩く。あれをやる人自身は面白いかどうか知らん

が、見て居ると如何にも愉快である。私は一遍あいつ境涯になつて、東京の眞中を、一日中歩いて見たいものだと思ふこともあります。實際さう思ふのです。あれを見る度に見とれる、面白くて仕様がないうやうです。良寛上人の踊られるのが分る。それから空也上人の踊られるのが分る。

踊りの話がつゞきますが、これはフランスの小説家でレ・ミゼラブルの小説を書いたユーゴーといふ人がある。あの人のノ・ト・ル・ダ・ム・の・せ・む・し・男と云ひますか、脊中の曲つた人の小説を描いたのがあると思ひますが、随分昔のことです。今確かに憶えませんが、その小説の中に、フランスのバリの町の眞中を棒か何かを持つて歩いて、さうしてその棒を何か面白く振りまわすのか、頭の上に立てるのか、何か全く忘れてしまひまして困ります。此處でこんな取りとめもないお話をするのであればありませんでしたが、ふと思ひ出したまま、こんなことになりました。とに角、その時のユーゴーの言葉の中に、あれは均衡の哲學を實地にやつて居るのだと云ふやうなことがあります。即ち物の平均をとるので、こつちが上つてもいけない、あ

つちが上つてもいけないと云ふのです。左様、日本の皿まわし、棒の上で皿廻しをする。これで平均哲學をよく味得出来ると思ふ。これを實際に體驗するといふと人生の皿廻しがうまく出来る譯だ。それでユーゴの挿話を、假りに皿廻しとして置きます。皿廻しは平均哲學といふものの眞髓を感得したのだといふことに見ても、悪くはないでせうか。さうでないかも知れんけれども、まあさういふことにして置きます。皿廻しと云ふと、皿にとらはれるやうに思はれませうが、平均の理窟の眞髓にはいると、空也上人の踊りと同じことになりはしないか知らん。

『如』と『即』

それはそれとして置いて、そこでもう一つ禪に就いてお話をしますと、普通に禪といふことは、唯空寂といふが如きものだ、人は想像して居ます。静寂を喜ぶ事、如何にも閑寂な境界にねおきするといふことが、禪の眞髓であるやうに考へられて居る。それでちよつと、はつらな批評家は、この静寂といふこと、閑寂と云ふこと、

何もなしに只ぼんやりでもして居るのが禪だと言つて居る。なるほど『静』の奥に徹底するところにも禪はある。さうしてその奥に徹底した所から、繪を畫き、歌を唄ひ、花を愛し、自然を喜ぶといふ様なことはありません。自然の表面といふものが、如何にもざわ／＼して居るから、そのざわ／＼して居る所を突抜けて、さうして静かな所に到る時、そこに初めて自然の愛すべきものが見つかると、それが禪だといふ様な鹽梅に言ふ人が往往ある。そんな人は日本人にもありますし、外國の人にもあるのです。けれどもそんな風に静寂を解してはならぬ。動を離れ、騒ぎと相隔たつた抽象的な静寂を愛することは、禪ではないのです。静寂をも通り抜けなくてはならぬ。それから又物と我と一つになるといふやうなところを狙つて、それを禪と云ふやうな人もある。併し物と我と一つになるといふのは、死んでしまふことである。或はそれを静寂と云ふのかも知れぬが、我と他とが一つになつて、我は我といふことがなくなつてしまふと、さうすると愛するといふこともなく、喜ぶといふことも出来なくなる、だから一つではない、即ち我は我であつて、物は物である、さ

うでありながら、我が物になり、物が我になるといふことに見なくてはならぬ。それだから一つではない。佛教では一如と云ふ文字を使ひますが、此の『如』と云ふ言葉が中々面白い、此の『如』に徹するとき、一つの喜びがあるといふことであります。さういふやうな鹽梅で、禪は空でもなく、静でもなく、一でもないのです。

佛教に又『即』といふ字があります。此『即』が妙を極めた言葉です。『即』とは物に『即』して我、我に『即』して物と云ふやうなことです。『即』するといふ字が東洋人の人生觀・世界觀の根底にある字であつて、この『即』といふ一字にぶつつかつたが爲に、我等は本當に自然を愛することが出来るのです。さうして其所にほんとうの日本人の生活といふものの基調が出来て來たのじやないかと思ふのであります。この『即』といふ字が餘程肝腎な字であります、一如といふ所から出る『即』であります。それから自然を愛すると云ふことは、自然に即するといふことでなくてはならぬ。必ずしも自然と一つになるといふのではない。近頃ドイツの美學者に感情移入といふことを觀賞の原理のやうに言ふ人があるといふことを聞きますけれ

ども、我々が自然を愛すると云ふのは感情を移入するといふのではない。こつちから或るものを持つて行つて、それを向うに入れて、さうしてその感じがするといふのでは、『即』にならぬ、二の對立がとれて居ない。これはギリシャの思想系統、所謂『ヘレニズム』である。ギリシャ人の考へ方を繼承して居る西洋の人には、どうしても『即』といふことが考へられない、感ぜられない。『即』といふことを感じ得るといふことは東洋の人、殊に日本人にあると思ふのであります。

自然に『即』する

その例は、『即』といふことを私は斯ういふ風に見たいと思ふのです。『即』が吾等の性格として自然に對する態度をさめると思ふのです。例へば小さな小舎を拵へますとすると、大きな家といふものより、小さな小舎といふものの方が、我等に相應したやうな氣がする。それは日本人は原始的であるからして、昔のやうな南洋の土民のやうに、小舎を拵へるのだらうと申しますけれども、昔は歴史的にはさうい

ふ關係があつたかも知れません。けれども歴史的にはどういふ關係があつても構はない、發生學的には吾等の家といふものが、南洋土人的であらうが、或は又寒帯のエスキモー的であらうが、何でも構やしない。我等が賤が伏屋といふものに對して、有つ所の感情、賤が伏屋の下に寝起きする所の赤裸裸な吾等の生活・生活感情、それが頗る日本的なものだと、斯う思ふのであります。これは支那に行つても印度に行つても——同じ東洋でも、支那ではそれが十分に味はれず、印度でも味はれなかつたと思ふのであります。それはどうかと申しますといふと、小舎といふもの——賤が伏屋といふやうものでないと、本當に自然との接觸が出来ない。このやうな、此建物のやうな、壁や窓で圍まれてしまつて、これからは家だ、これからは自分の居る所だ、これからは庭だぞといふやうな鹽梅に、内と外との區ざりをつけてやる生活は日本人以外の人のやる生活です。日本人には此んな家は住處にならぬと、予は信ずる。そんなら野蠻人は日本的に棲んで居るといふかも知れぬけれども、野蠻人は日本人のやうに文化意識と云ふやうなものを有つて居ない。唯芭蕉の葉な

ら、その葉で葺いた小屋、椰子の葉で葺いた屋根、そんな處に住んで生きて居るといふだけの民、それが南洋なら南洋の土人である。日本人の家は芭蕉の葉で葺いても、杉の皮で葺いても、その下に生息して居て、さうして其處に安んじて行く心、そこに一種の美的なものを認めて、自然に『即』した生活をして行くとの自覺を持つて居る。

この自覺・この『即』の意識が、よほど大切だと思ふのであります。それはどういふことになるかといふと、素より雨露を凌ぐといふことがなくてはならぬ。吾等は猿のやうな鹽梅に樹の上の生活、樹の枝から枝へ飛んで行く生活は出来ぬ、どうしても屋根といふものがなくてはならぬ。屋根で青天井と自分の間に境をつけて仕舞ふが、その屋根はほんの必要だけのことで、それがために、自分を全く周囲の自然から隔離するものであつてはならぬ。出来るだけ外を見るやうなものにならなければならぬ。なるべく天に近いものでなければならぬ。周囲の事物に近いものでなければならぬ。そこで日本の家には窓といふものがない、戸だけである、その戸

を皆開けると、直ちに外の自然に接するといふ鹽梅で、外と内との區別がないやうにならなければならぬ。月でも上つたときに、こんな西洋流の建物の窓から顔を出して見たのでは、風流も何もない。月が月と見られない、唯シャボン玉のやうにか感じられないのであります。これが西洋の文明から受ける呪はれです。今日の我等はさういふ呪を受けて毎日喘いで生きて居るのです。そいつをどうかして超脱しなければならぬ。といふのは、これを壊してしまへといふのではない。これをこの儘にしておいて、さうしてさういふ今言うたやうな別個の天地があつて、其處で生活することが、日本人的に自然を愛するのだと意識しなければならぬ。たゞ斯ういふのであります。

そこでまた賤が伏屋に戻つてまゐりますが、此處では外との境界線がない。月が勝手に室の中へ這入つて来る、月の光が障子を通して這入つて来る心持といふものは面白いものである。『月上^{ハツテ}前峰^{ムネ}竹窓明^{カナリ}』で、竹でも梅でもあると尙ほ更面白い。自分の室の前に芭蕉でも一本植ゑたとする。すると雨でも降つたときには、藁屋根

ではその音を聞くわけに行かぬけれども、それが芭蕉の葉の上に葉ちると、その音を十分に聴くことが出来る。又芭蕉の葉の裂けた所も馬鹿に面白いものです。芭蕉の葉といふものは非常に大きくなつて、どこまでも延びんとするものですが、それで遂にさける、裂けなければ面白くない。あれが裂けてばらばらになると、昔の坊さんは貧乏和尚の破れ衣のやうであると云つた。あの破れ衣のやうな芭蕉の葉が如何にも面白い。オックスフォードの學生は、御存じのやうにガウンといふものをみながら居るが、そいつがばさばさに裂けて、例の貧乏坊さんの破れ衣のやうになつたのを喜んで着る。それを自慢にして着る。ばさばさになつて居るのを風に翻へし、意氣颯爽として、街の東西に濶歩する學生を見ると、芭蕉の葉のだんばらに裂けて居るのを思ひ合せて、一種の風流味をさへ感ずるのであります。オックスフォードの學生自身はそんな風流味を有つて居るかどうかは第二の問題ですが。

それからもう一つ、斯ういふことがあります、我等は樹木といふものを見るのに、二階の窓からならば葉や枝だけしか見えませぬ。葉を見ても枝を見ても面白いこと

は面白いが、本當の面白味といふものは、樹が地面からずつと出る所が一番感興を惹くのです。出かけて居る——活動寫眞で見るやうに、芽が一すく／＼に延びて行くところを見るのでなくして、樹が地面からずつと生えてる所が面白いのです。山寺などへ行くといふと澤山杉の木があります。仰いで上の方を見ると、いかにも雲をつくと云ふやうな勢で直立して居るのを見ます。天を突いて居るのも面白いことは面白いが、この杉の木なら杉の木がどつしりと地面の中に根を下して、而してその中から何のわだかまりもなく、すつと出て居る様子を見るといふと、自分も矢張りそこから出て居る一本の木のやうになつてくる。事實は、そんな氣になるのじやなくて、實際さうなのです。我等は幾ら空を眺めて星を數へて居つても、足は大地を離れるといふことは出来ない。大地を離れて生きて居るといふことは出来ないといふ感じは、或は學者に云はせるといふと、我等は地上生活といふものを、ずつと昔からやつて來て居るのだから、その癖が意識の底に残つて居て樹を見るといふと、自分等の太古の生活を無意識に感ずるのだといふやうなことを申しませうが、さう

かも知れない。さうかも知れないけれども、それはそれで、また別の話で、今われ等の意味する所と全く關係のない事である。わしはその生えた樹を見ると、その大きな杉の木がずつと竝んで、殊に月夜などには、その樹が月に照されて、如何にも鮮かに澤山の杉の幹が、斯ういふ工合になつて、ずつと並んで生えて居る所を見ると、前にお話した『即』の世界が展開して來るのです。この世界では死ぬとか生きるとか、得とか損とかいふことは全く關係なしに、自分が生きて居るのか、死んで居るのか、自分が樹になつて居るのか、樹が自分になつて居るのか、所謂莊子が夢に胡蝶となつたと同じく、莊子が夢に胡蝶となるのか、胡蝶が夢に莊子となつたのか、何かそこに理屈はあるだらうが、自分はそんなものに頓着なく、莊子ときは莊子、胡蝶のときは胡蝶で、そのまま、あるがままの世界を享受して行くのである。何とも喩方のない一種の別天地が開かれるのです。別に天地があるやうな氣がする。ここで始めて自然が愛せられるやうになると云ひたいのです。

英國の詩人のテニソンが石垣に生えて居る小さな花を取つて、この花と根とを共

に知ることが出来たならば、我等は天地の祕密を知ることが出来るだらうと、小さな詩で歌つて居ます。あの詩は私は餘程面白いと思つて讀んで居ります。さういふやうな心持と申しますか、併し又違ふところがあるのです。樹を知るといふのでなく、またそれが分つたら、どうのかうのと云ふのも何でもないので。その樹が分ると、わしが樹であるか、樹がわしであるかなどと、いふやうなことを考へて居るでもないのです。かういふことを考へて居ると、そこに物の隔りと云ふべきものが出来て来ます。さうすると本當の自然に對する愛と云ふものがなくなると思ひます。樹であることも忘れ、自分であることも忘れるが、樹は樹である、そこに生えて居る、自分は自分である、眺めてゐる自分である。而して此間に、兩者の間に流れてるものを感じる。ここに一如の生活が開かれて、『即』の世界があるのだとも申しますか。これは禪で洗鍊せられた自然美の愛、日本人でなければ味はれぬところのものでないでせうか。斯ういふやうなことは、普通に自分等が意識して居ると云ふのではないのです。富士山を見たり、雨を聞いたり、月を見たりする時、いつもこんな分析があると云ふのではない。これは日本に禪といふものが来て、さうしてそれに訓練せられ陶冶せられて、今云うたやうな氣分が我等の心の中に養はれて來たと云ふだけのことなのです。

禪と近代の思想

そんなら、どうしてそれが養はれて來たかといふ歴史的過程については、又他の機會に研究した結果をお話しなければならぬ。一朝一夕には勿論物語ることが出来ないであります。今日は唯さういふ自然に對する心持といふことを主にし、それから日本人は本來非常に自然を愛すること、自然と相和してこれに順應した生活をやつて行く、その妙味を解して居ることをお話したつもりなのです。この妙味を解するところを氣質といつては、實際いけなひのかも知れず、又性格でもいかぬかも知れない。六箇敷云へば、今日の演題を『禪と日本人の情操的生活の一面』とでも致しますか、そして此一面は自然に對する日本人の審美的態度なのです。その方面

に禪がどんな關係を持つかを、秩序なしに申上げるのが、此講演なのです。

唯私はここに斯ういふ問題が出て來るだらうと思ひますのは、今日唯物主義とか共産主義とかいふやうなことが、頻りに唱へられ、經濟が今日の生活の基調だと申します。今日食ふに食はれない人間ばかりが澤山居る所へもつて來て、そんな悠長めいた封建的とも見られ、資本主義的とも見られるイデオロギーの話はやめて欲しいと、かういふ問題なのです。さういふ人があるならば、私は又斯う云ひたい、『君のやうな考へ方を止めて、わしのやうな考へ方にちよつとなつて見たらどうだ』と。かういふことも言ひ得ると思ふのです。向うの人が此方を資本主義のイデオロギー、封建的だ或は奴隷主義だといひますれば、さういふ方は亦階級闘争と云ふイデオロギーに囚へられて居るのだと見られます。これは畢竟イデオロギーの世界での争で、そんなことを離れて、現在の經驗の事實そのものから見れば、イデオロギーなど入れ得るすきがないのです。イデア以外の處に亦別個の世界があるのだから、而してこの世界は如何に打消さうとしても、打消されないのだから仕様がな

からうか。

併し唯これだけでもいかんかも知れぬ。唯心持だけの話では生活理論の上に何等の基礎をもたぬとも云へよう。今はそんな議論をする餘裕はありませんが、只これだけ申したいと思ひます。唯物主義或は共産主義或は社會主義とか、經濟主義或は科學主義など云ふやうなものが、色々頭を擡げて來て居ますが、さういふ主義の起るには、一面又何かの眞理があるのかも知れない。全くそれが嘘で出來上つたものではなからうと思ひます。何か又そこに色々の考へを起させるやうな社會的現象といふものが、少なくとも一つか二つ、或はほんの影かも知れないけれども、何かあるとするならば、それを亦正面まともに見て宜いと思ひます。それをまともに見ておいて、さうしてまた我等が先祖から、ずつと知らず識らずに、神ながら的に養つて來た日本人の心持、鎌倉時代から又禪といふものに依つて更に鍛へ上げ意識的に守り育て來た、その性分、その氣持をも、充分に顧みて行かなくてはならぬと、自分は考へるので。もし此等二つの傾向——相反するとも見える傾向の調和が出來ぬならば、

私は今日の文明はもう一顧の値もないものとして惜しげもなく捨てて宜いと思ふ。

併し口ではさう何のことなしに捨てられるものやうには言ひましても、又さう容易に實行出來ぬ事情もあるべしと考へる。すべてのものは、何かの歴史的過程を踏んで來たものだと思ふから、その踏んで來る過程を顧みる必要がありませう。而してその時に、その間に何か忘れたものがありはせんかと尋ねて見たい。今はこれを尋ねるに最も適當な時節ではないでせうか。これだけは言へると思ふのであります。

そんなら實際の解決方法としてどうするかといふことは、これまた一朝一夕の問題ではないのですから、我等は共に頭を絞つて、或は個人／＼で出來なかつたならば、衆人の智慧を寄せて考へて見たい。何とかそこに斯ういふことも可能であらう——斯ういふ文明ばかりが續いて行つたならば、日本と云ふ特別のものは死んでしまふと思ふ、斯ういふやうな生活でなしに、もつとそこに我等が生きて行けるやうな、本當に日本人として生きて行けるやうな、西洋人としてでなく、支那の人としてでなく、印度の人としてでなく、我が瑞穂の國に生れた日本の吾等として、十分に豊かにゆつくりと生きて行けるやうものを造り上げたいと、かう相談して見たい。お互に他を押へつけることをしないで、今云うたものを平和に造り上げたい。さういふ平和な隅を何所かに拵へておくことの出來るやうにしたいと自分は希ふのであるが、それは無理な願かしらぬ。固よりこの他にも色々日本人として必要なことも澤山ありますけれども、それは又他の方面の研究に譲つて、唯私がこの自分の許された時間に於いて演題の要旨について述べ得る所は、これだけのことに過ぎないのである。

此處では自分の思うて居ることのほんの一部分しか申上げられなかつたと、斯う思召して戴けば結構なのであります。これが全部であるといふことでもなし、又系統立つたものだといふことでもない。雲の間に一寸見える片鱗のその影かも知れないものを、秩序なしに申上げましたのを、御清聽を煩はして誠に恥しく又有難う存

一 眞實の世界

じます。

一八〇

(昭和十年春、日本文化協會主催、工業俱樂部にての講演)

禪の一面と武士道

一、殺人刀・活人劍

禪と武士道とは一寸關係ないやうに思はれるかも知れない。

禪は佛教の一派であり、佛教は慈悲を旨とする。武士道は、先づ大體、劍を持つて立つことになつてゐる。劍といふものは、人を殺す道具である。一方では慈悲を旨として、物の命をとらぬことになつてゐるのに、他方では人を殺す。この活かすことと殺すこととの間に、果してどういふ連絡があるか。兩者は畢竟相反するものではないかと考へられるのも無理はない。

ところが、不思議にも日本では、禪——或は佛教全體と云うてもいいかも知れないが、殊に禪と劍との關係といふものが、極めて密接になつて來てゐるのである。劍といふものはつまり、武士道と佛教との關係からして、必ずしも人を殺す道具ではなく、人を活かすことにもなつてゐる。即ち殺人刀と活人劍、この兩方が相助け合ふといふことになつてゐるのであつて、しかも殺すのは人ではなくして、その